

ダム建設予定地内  
文化財発掘調査報告書4

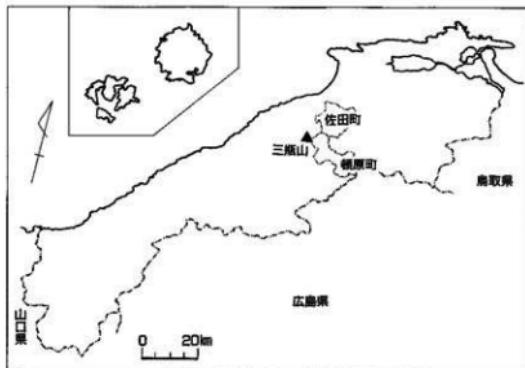
檀原遺跡・谷川遺跡  
殿淵山毛宅前鉱跡

1997年3月

谷川総合開発工事事務所  
教育委員会

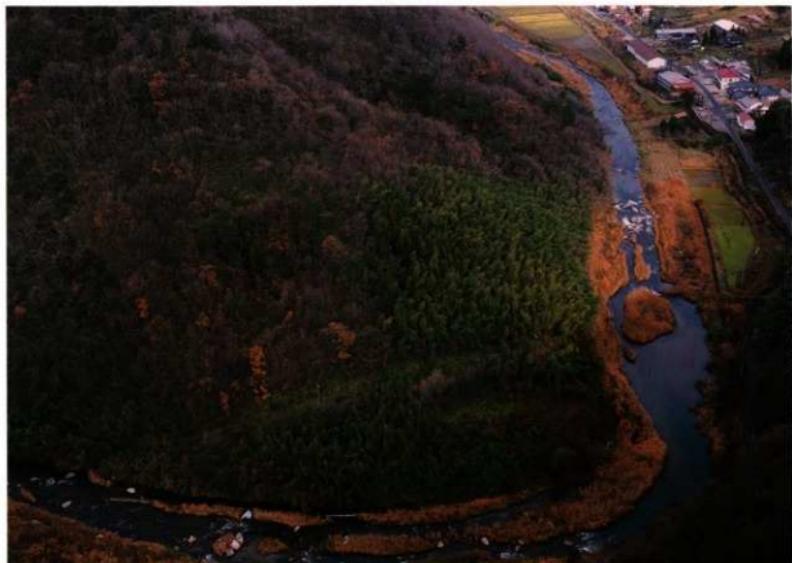
志津見ダム建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書4

檀原遺跡・谷川遺跡  
殿渦山毛宅前鉱跡



1997年3月

建設省斐伊川神戸川総合開発工事事務所  
島根県教育委員会



権原遺跡全景（発掘調査前）



I-ku 1号炉横断面



V区1号炉（東から）



V区1号炉・2号炉・SX-01（西から）

## 序

建設省斐伊川神戸川総合開発工事事務所においては、『現代のおろち退治』といわれる斐伊川神戸川両水系を一体とした治水計画の一環として、斐伊川の上流に尾原ダム、神戸川の上流に志津見ダムを建設し、下流域の洪水の調節及び水道用水の確保等を目的とした多目的ダム建設事業を進めています。

ダムの事業用地内の埋蔵文化財については、文化財保護の主旨に則り関係機関と協議しながら必要な調査を実施し、記録の保存につとめています。

志津見ダム建設事業においても、島根県教育委員会と協議をし、同教育委員会や頼原町教育委員会の協力のもとに平成元年度より発掘調査を実施しているところです。

本報告書は、平成5年～6年度に実施した「榎原遺跡」、平成7年度実施した「殿瀬山毛宅前鉢跡」ならびに「谷川遺跡」の調査結果をまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術及び教育のために広く利用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力頂きました島根県教育委員会ならびに関係各位に対し謝意を表します。

平成9年3月

建設省中国地方建設局  
斐伊川神戸川総合開発工事事務所

所長 藤山秀章

## 序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け、1989（平成元）年度から志津見ダム建設予定地内にある埋蔵文化財の調査を行っております。

ダムの建設が予定されている神戸川の流域には、古くは縄文時代から多くの人々が暮らしてきました。また江戸時代には、島根県が全国にその生産量を誇ったたら吹き製鉄を盛んに行つた地域でもあります。この地域に存在する多くの遺跡が、こうした歴史を雄弁に物語っています。

本書は1993（平成5）年度から1995（平成7）年度に実施した発掘調査のうち榎原遺跡をはじめとする3遺跡の調査結果をまとめたものです。この報告が地域の歴史を明らかにし、埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査及び本書の刊行にあたっては、地元の皆様をはじめ各方面から多大なるご支援、ご協力をいただきましたことを心からお礼申し上げます。

1997年3月

島根県教育委員会

教育長 清 原 茂 治

# 例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が、建設省中国地方建設局から委託を受けて1993年度～1995年度の3カ年にわたって実施した志津見ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査を実施した遺跡は次のとおりである。

　　檍原遺跡　簸川郡佐出町人字上橋波（1993・1994年度）

　　殿淵山毛宅前鉱跡　飯石郡飯石町大字角井殿淵1-2番地　外（1995年度）

　　谷川遺跡　同　人字八神379-4番地　外（1995年度）

3. 調査組織は次のとおりである。

**調査指導者**　穴沢義功（たたら研究会委員）、大沢正己（同）、潮見　浩（広島大学名誉教授）、河瀬正利（同文学部助教授）、宮本長二郎（東京国立文化財研究所修復技術部長）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、杉原清一（島根県文化財保護指導委員）、伊藤晴明（島根職業能力開発短期大学校校長）、時枝克安（島根大学総合理工学部教授）、松井整司（島根県地学会副会長）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長）

## 〔1993年度〕

**事務局**　廣沢卓嗣（文化課長）、山根成二（同課長補佐）、勝部　昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（同課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

**調査員**　内田律雄（調査第4係長）、宮本正保（同主事）、木村直人（同教諭兼主事）、矢野克治（同調査補助員）、田中迪亮（同）

## 〔1994年度〕

**事務局**　廣沢卓嗣（文化課長）、野村純一（同課長補佐）、勝部　昭（埋蔵文化財調査センター長）、佐伯善治（同課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

**調査員**　内田律雄（調査第4係長）、宮本正保（同主事）、日次謙一（同）

## 〔1995年度〕

**事務局**　勝部　昭（文化財課長）、野村純一（同課長補佐）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、佐伯善治（同課長補佐）、濫谷昌宏（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

**調査員 谷川遺跡** 角田徳幸（調査第4係文化財保護主事）、内田裕二（同教諭兼主事）、

石飛幹祐（同調査補助員）

**殿瀬山毛宅前鉱跡** 宮本正保（調査第4係主事）

4. 自然科学分析は、次の方々及び機関の協力をいただいて実施した。このうち、製鉄関連遺物の自然科学分析については、1997年度刊行予定の報告書に掲載する予定である。

C14年代測定 (財)九州環境管理協会

製鉄関連遺物分析 (株)九州テクノリサーチTACセンター

地磁気年代測定 伊藤晴明（島根職業能力開発短期大学校長）、時枝克安（島根大学  
総合理工学部教授）

5. 本書に掲載した遺跡位置図は、建設省国土地理院発行5万分の1、地形図は建設省斐伊川、  
神戸川総合開発工事事務所が作成した図をもとに作成した。また、横原遺跡調査区配図、  
同遺跡I区1号炉平面図の一部は㈱ワールド航測コンサルタントに委託して作成した写真  
測量図に基づく。

6. 掘図中の方位は、磁北を指す。

7. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

S D…溝状遺構 S K…土坑 S X…性格不明遺構 P…ピット

8. 発掘調査にあたっては順原町、佐田町両教育委員会に協力を賜り、作業員として、順原町、  
掛合町、佐田町の方々に従事していただいた。

9. 遺物の整理・実測などは、各遺跡の調査員を中心に、加藤往子、金坂忠美子、馬庭志津子  
がこれにあたった。

10. 本書の執筆・編集は上記調査指導者の指導を踏まえ、角田と宮本があたった。

11. 本書に掲載した出土遺物・実測図及び写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管してい  
る。

## 本文目次

<b>第1章 調査にいたる経緯・調査の経過</b> .....	(宮 本).....	1
<b>第2章 位置と環境</b> .....	(角 山).....	2
<b>第3章 檜原遺跡</b> .....	(宮 本).....	6
第1節 調査の概要.....		6
第2節 調査の結果.....		8
1) I 区の調査.....		8
2) II 区の調査.....		30
3) III 区の調査.....		35
4) IV 区の調査.....		37
5) V 区の調査.....		41
第3節 小結.....		52
<b>第4章 殿淵山毛宅前鉄跡</b> .....	(宮 本).....	55
第1節 調査の概要.....		55
第2節 調査の結果.....		55
第3節 小結.....		59
<b>第5章 谷川遺跡</b> .....	(角 田).....	61
第1節 調査の概要.....		61
第2節 旧河道の調査.....		63
第3節 出土遺物.....		65
第4節 小結.....		70

## 挿図目次

第1図	櫻原遺跡調査区配置図	7
第2図	I区・II区地形測量図	9
第3図	I区1号炉周辺遺構位置図	10
第4図	SD-01・P1実測図	11
第5図	SX-01実測図	11
第6図	SX-02実測図	11
第7図	1号炉地下構造実測図(1)	13
第8図	掘方断面図	14
第9図	1号炉地下構造実測図(2)	16
第10図	1号炉地下構造実測図(3)	17
第11図	1号炉地下構造実測図(4)	19
第12図	1号炉地下構造土層図	21~22
第13図	小舟断面及び跡坪側面図	23
第14図	跡坪正面図	24
第15図	跡坪土層図	24
第16図	跡坪内トンネル状施設実測図	25
第17図	本床実測図	26
第18図	排溝場遺物採取区画配置図	27
第19図	排溝場土層図	27
第20図	I区出土遺物実測図(1)	28
第21図	I区出土遺物実測図(2)	28
第22図	T区出土遺物実測図(3)	29
第23図	I区川土遺物実測図(4)	29
第24図	II区土層図	30
第25図	SX-01実測図	31
第26図	鍛冶炉及び周辺ピット実測図	32
第27図	SX-02実測図	33
第28図	II区出土遺物実測図	33
第29図	SX-03実測図	34
第30図	III区調査後地形測量図	35
第31図	III区土層図	35
第32図	SX-01実測図	36

第33図	S X - 0 1 出土遺物実測図.....	36
第34図	IV 区遺構位置図.....	37
第35図	IV  X 土層図.....	38
第36図	P 1 ~ P 7 実測図.....	39
第37図	S K - 0 1 · 0 2 · P 8 · P 9 実測図.....	39
第38図	IV 区出土遺物実測図（1）.....	40
第39図	IV 区出土遺物実測図（2）.....	40
第40図	V 区調査後地形測量図.....	41
第41図	1 号炉・2 号炉周辺遺構位置図.....	42
第42図	1 号炉実測図（1）.....	43
第43図	送風施設跡実測図.....	45
第44図	1 号炉実測図（2）.....	46
第45図	1 号炉実測図（3）.....	47
第46図	2 号炉実測図（1）.....	49
第47図	2 号炉実測図（2）.....	50
第48図	S X - 0 1 実測図.....	51
第49図	V 区出土遺物実測図.....	51

#### （殿淵山毛宅前鉢跡）

第50図	殿淵山毛宅前鉢跡位置図.....	56
第51図	地下構造実測図（1）.....	57
第52図	地下構造実測図（2）.....	58

#### （谷川遺跡）

第53図	調査区配置図.....	61
第54図	試掘調査区土層実測図.....	62
第55図	トレンチ西壁土層実測図.....	63
第56図	発掘後地形測量図.....	64
第57図	遺物出土地点位置図.....	65
第58図	縄文土器・石器実測図.....	66
第59図	弥生土器・土師器実測図.....	67
第60図	土師器・須恵器実測図.....	68
第61図	石製品・耳環実測図.....	69
第62図	陶磁器他実測図.....	69



# 第1章 調査に至る経緯と調査の結果

志津見ダムは、斐伊川・神戸川の治水計画の一環として、飯石郡頓原町大字角井に建設される、洪水調節を主目的としたダムである。建設事業は1986年（昭和61）に着手され、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査は、1989年（平成元）から開始された。今回報告する遺跡についての概要は以下のとおりである。

## 1. 檜原遺跡

檜原遺跡は、分布調査やトレンチ調査の結果、鉄滓を廃棄した排滓場や、製鉄に関わった人々が生活し、事務所でもあった集落（山内）をもつ近世の製鉄遺跡であることがわかっていた。志津見ダム下流の道路付替・河川拡幅工事に伴い、檜原遺跡の一部が削られることになり、その工事予定地について1993年4月12日から12月24日まで近世製鉄炉（いわゆる高殿たたら）の一部、排滓場、池状遺構などについて調査を実施した。調査はこの年で終了する予定であったが、その後の計画変更で工事にかかる面積が広がり、1994年度も引き続き発掘調査を実施した。調査は4月18日に開始し、近世製鉄炉の残りの部分の調査のほか、中世の製鉄炉が新たに発見されるなど中世から近世にかけての製鉄関連遺構を数多く検出して1月11日に調査を終了した。

## 2. 殿淵山毛宅前鉛跡

殿淵山毛宅前鉛跡は、1995年9月に国道184号線の待避所造成工事によって発見された。待避所予定地は周知の遺跡の隣接地であったため、工事に立ち会い、遺跡の有無を確認することとした。重機により搅乱土を除去したところ、製鉄炉の地下構造と思われる遺構が発見されたため、工事を一時中断し、同年9月28日から発掘調査にとりかかった。遺構の残存状況は周辺が搅乱を受けていためかなり悪く、面積もわずかであった。地下構造の最下部と考えられる施設について調査を行い、10月6日に調査を終了した。

## 3. 谷川遺跡

谷川遺跡は、1995年の8月に、志津見ダム地内の才谷川改修工事の予定地内に周知の遺跡である谷川城郭群が含まれているという頓原町教育委員会からの連絡を受けて、8月8日から8月25日まで範囲確認調査を実施した。その結果、弥生時代などの遺物が発見され、遺物包含層の存在が確認されたことから、全面調査を行うこととなった。なお遺跡の性格上、調査地点の周間に存在した、谷川遺跡に含めて本調査を行うこととした。

全面調査は、遺物包含層が確認された地点を中心約500m<sup>2</sup>を対象とし、同年の9月4日から9月21日まで実施した。その結果、小河川の跡が判明し、包含層中からは縄文時代後期から古墳時代後期の各時代にわたる遺物が出土した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理・地質的環境

中国山地に源を発する神戸川は、優美な姿で知られる三瓶山(標高1126m)の東麓を北流し、日本海に注ぐ。調査地は、その神戸川の中流域に位置しており、現在の行政区分で言えば島根県飯石郡佐田町大字橋波から飯石郡順原町大字八神にまたがっている。

この地域は、起伏量400~200mの中起伏山地が連なっており、その間に神戸川が縫うように流れることで、砂礫段丘や谷底氾濫原が形成されている。遺跡は、山間に開けたこうした砂礫段丘や谷底氾濫原など僅かな平坦地を中心として展開しており、これが遺跡立地の大きな特色となっている。

表層地質は、大きく2つに分けることができる。1つは佐田町大字橋波から順原町大字角井にかけて見られるもので後期中生代~古第三紀の酸性凝灰岩、もう1つは順原町志津見から八神にかけて見られるもので古第三紀~白亜期の閃綠岩~花崗岩複合岩質岩石である。花崗岩質岩石は、周辺では大山市佐津口から多根、順原町獅子から赤来町來島にかけて分布している。

また、調査地は今から約10万年前から3600年前まで噴火活動を繰り返した三瓶山の東麓にあたることから、火山性の堆積物が見られることも大きな特色である。調査地周辺の土層は、遺物包含層を含め上層より、第1黒色土層-第1ハイカ層(三瓶太平山降下火山灰層)-第2黒色土層-第2ハイカ層(三瓶角井降下火山灰層)-第3黒色土層(浮布黒色土層)-第3ハイカ層-第4黒色土層-三瓶浮布降下火山灰層-三瓶浮布降下軽石層の順である。このうち、年代が判明しているものは、第1ハイカ層が今から約3600年前、第2ハイカ層が今から約4700年前で、第3黒色土層の中位にはアカホヤ火山灰が含まれていることから、この上層部は今から約6300年前以降に堆積したことも明らかである。

### 第2節 歴史的環境

調査地周辺における遺跡の初見は、縄文時代草創期末から早期初頭の条痕文土器が検出された板屋Ⅲ遺跡である。この調査では縄文時代の遺構・遺物と三瓶山火山灰が層位的に確認されており、第3黒色土層下層が縄文時代草創期末から早期末・上層が前期前半から末、第2黒色土層が前期末から後期中葉、第1黒色土層が後期中葉から晩期以降の遺構面や遺物包含層になっていることが明らかになった。

この他の縄文時代の遺跡としては、五明田遺跡・森遺跡・門遺跡・下山遺跡などが挙げられる。このうち、五明田遺跡では縄文時代後期前葉の磨消縄文土器が良好な状態で多量に発見されている。また、下山遺跡では縄文時代早期中葉以降の遺構・遺物が層位的に確認されており、中でも立石を伴う配石遺構群や東日本からの搬入品と見られる屈折像土偶は注目された。

弥生時代の遺跡としては、森遺跡・板屋Ⅲ遺跡・門遺跡などが知られている。これらの遺跡で確認されている堅穴住居跡は弥生時代後期を中心としたものであるが、下山遺跡・板屋Ⅲ遺跡では一部で前期の土器片も確認されており、弥生時代前期から遺跡が展開していたことは明らかである。また、森遺跡では集落跡に隣接して土壙墓群が営まれており、中には碧玉製管玉を多量に副葬したものも見られた。

古墳時代の遺跡は、前期・中期の様相は十分明らかでないが、下山遺跡で中期の堅穴住居跡が確認されている。後期になると古墳や集落跡が比較的判明しており、このうち、古墳は横穴式石室を内蔵したものが比丘尼塚古墳・中原古墳・門古墳群、横穴墓が堂ノ原横穴墓で知られている。その規模や内容の点で比較すると八神地区の古墳の相対的な優位性が窺えようである。

古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡は、森遺跡・板屋Ⅲ遺跡・門遺跡で検出されているが、古墳時代後期には堅穴住居跡の堤沿いに作り付けの竈を設けたものが一般化している。また、森遺跡・門遺跡では所属時期が明確ではないが掘立柱建物跡も検出されており、倉庫などの施設があったと思われる。

製鉄関係遺跡は、現在のところ頬原町志々地区で18カ所、佐田町鷹田地区で22カ所の計70カ所が知られているが、その実数はさらに多いものと思われる。しかし、本格的な床釣構造をもつ以前の製鉄遺跡は、あまり知られておらず、門1号炉・板屋Ⅲ1号炉及び4号炉・櫛原V区2号炉のみである。このうち、門1号炉・板屋Ⅲ1号炉・櫛原V区2号炉は、木炭を敷き詰めた本床のみもつものであるが、板屋Ⅲ4号炉は本床の横に小舟状の溝をもつもので、近世以前の箱形製鉄炉の地下構造には2つの系統が窺える。また、板屋Ⅲ2号炉・3号炉・櫛原V区1号炉のように半地下式整形炉に系譜をもつ特殊ながも確認されており、中世の様相は一様ではない。

近世のものになると、志津見ダム地内で調査されただけでも櫛原遺跡・殿渕山毛宅前鉋跡・長老畑遺跡・下山遺跡・丸山遺跡・大根鉋跡で床釣構造をもつ製鉄炉が確認されている。また、周辺では佐田町朝日鉋跡・梅ヶ谷尻鉋跡・頬原町泉原鉋跡・大田市口ノ平鉋跡の調査も行われており、県内でもこうした製鉄遺跡の実態がかなり分かっている地域の一つである。その構造をみると、規模の大小をはじめ、本床と小舟底面の高さなどに違いがあり、具体的に変遷を窺うことができそうである。また、たたらの経営者については、判明しているものは多くないが、田部家、田儀桜井家、永田家などの名前が見える。

## 註

- (1) a.鳥取県「都道府県土地分類基本調査-右見大山・大瀧-」1979  
b.鳥取県「都道府県土地分類基本調査-三瓶山-」1981
- (2) 松井監司・福岡 奉「二瓶火山の浮石黑色土以後の火砕物の層序(その1)-東方に分布するものについて」『鳥取県地学会会誌』11 1996
- (3) 頬原町教育委員会「頬原町の遺跡 志々地区」1989

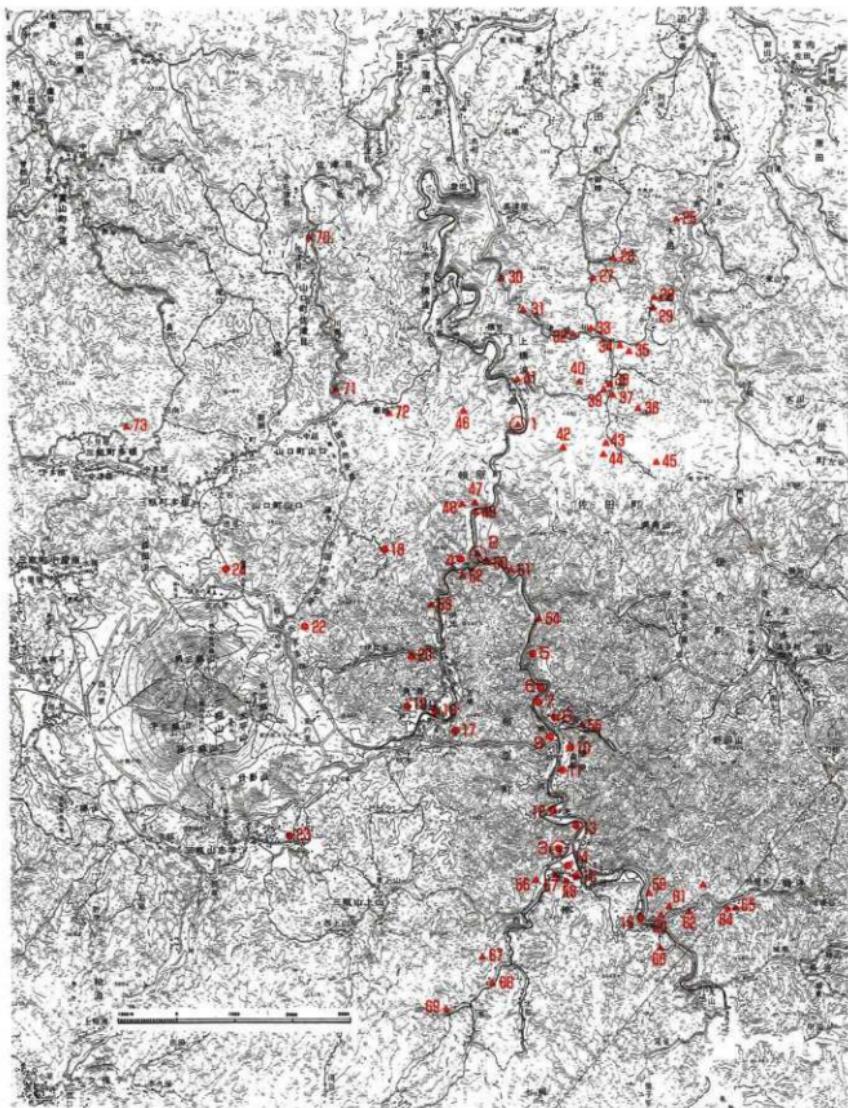


表 調査した遺跡と周辺の遺跡

No	遺跡名	所在地	種類	編 名
1	越草遺跡	越川郡佐田町上橋波	製鉄遺跡	本報告書第3章掲載
2	殿浦山毛毛前御跡	殿石郡領原町角井	製鉄遺跡	本報告書第4章掲載
3	谷川遺跡	愛石郡領原町八神	遺物包含層	本報告書第5章掲載
4	下ノ瀬井	愛石郡領原町角井	複合遺跡	製鉄炉2・西文時代集落跡・配石遺跡ほか
5	貝谷遺跡	愛石郡領原町志賀見	複合遺跡	製鉄炉1・貝谷1号・上細井
6	後子瀬井	愛石郡領原町志賀見	遺物散布地	
7	徳原遺跡	愛石郡領原町志賀見	複合遺跡	
8	坂岸山遺跡	愛石郡領原町志賀見	複合遺跡	製鉄炉2・各種炉2・西文・江戸時代集落跡ほか
9	門瀬井	愛石郡領原町志賀見	複合遺跡	製鉄炉1・班牛・奈良時代集落跡ほか
10	森原遺跡	愛石郡領原町志賀見	複合遺跡	製鉄炉ほか
11	神原遺跡	愛石郡領原町志賀見	遺物散布地	
12	小丸遺跡	愛石郡領原町八神	遺物散布地	
13	中原瀬井	愛石郡領原町八神	複合遺跡	占墳1・人頭塗場跡1・江戸時代集落跡ほか
14	森遺跡	愛石郡領原町八神	集落跡	縄文時代遺物包含層・陈生・奈良時代集落跡ほか
15	五明田遺跡	愛石郡領原町八神	集落跡	縄文時代遺物包含層・土坑群・占墳時代水渠路ほか
16	北丘山張古道	愛石郡領原町八神	土坑	横穴式石室1
17	杉ノ瀬露	愛石郡領原町角井	遺物散布地	石器
18	角井遺跡	愛石郡領原町角井	遺物散布地	磨製石斧
19	堂ノ筒穴空窓	愛石郡領原町角井	複合窓	複穴窓・須恵器
20	伊比川遺跡	愛石郡領原町角井	遺物散布地	磨製石斧
21	獅子谷跡	愛石郡領原町角井	遺物散布地	磨製石斧
22	橋ヶ持遺跡	愛石郡領原町角井	遺物散布地	縄文土器・洗浄土器・土器群・溝窓器
23	加瀬遺跡	人吉市・飯町志野	遺物散布地	土師器・忍冬器
24	大水原遺跡	大田市山口町水原	遺物散布地	土器群
25	トチ頭塗治尼跡	鹿児島郡伊佐町人口	製鉄遺跡	
26	大山岬跡	鹿児島郡伊佐町大岳	製鉄遺跡	
27	鹿原谷跡	鹿児島郡伊佐町大岳	製鉄遺跡	
28	打尾屋跡	鹿児島郡伊佐町大岳	製鉄遺跡	
29	打ち筑城治塗跡	鹿児島郡伊佐町大岳	製鉄遺跡	
30	胡日山跡	鹿児島郡伊佐町古津瀬	製鉄遺跡	本報告書第1章・縄文土器
31	出木塚跡	鹿児島郡伊佐町高瀬	製鉄遺跡	
32	守屋伊佐跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
33	古野下野跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
34	宮ノ木御跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
35	小鹿牛伊佐跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
36	木谷仲跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
37	北延城治塗	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
38	古野瓦窯跡	鹿児島郡伊佐町吉野	瓦窯跡	
39	新田羊和多	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
40	皆川跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
41	木下銀治跡	鹿児島郡伊佐町上波	製鉄遺跡	
42	保丹谷伊佐跡	鹿児島郡伊佐町上波	製鉄遺跡	
43	庵ヶ谷山山跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	本報告書第2章
44	庵ノ木谷四跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
45	葦の小舟跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
46	廢陶窯跡	鹿児島郡伊佐町吉野	製鉄遺跡	
47	芦井谷遺跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	製鉄炉1・大殿冶場跡1
48	八井谷遺跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
49	長老坂遺跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	製鉄炉1
50	貯糞廻	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
51	大幡山跡	鹿児島郡領原町志賀見	製鉄遺跡	製鉄炉2・大殿冶場跡5
52	施原川河跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
53	猪子谷跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
54	九山遺跡	鹿児島郡領原町志賀見	製鉄遺跡	製鉄炉1
55	弓谷湯跡	鹿児島郡領原町志賀見	製鉄遺跡	
56	坂根鐵化跡	鹿児島郡領原町八神	製鉄遺跡	
57	上巻ノ川跡	鹿児島郡領原町八神	製鉄遺跡	
58	段原殿治跡	鹿児島郡領原町八神	製鉄遺跡	
59	御岸田跡	鹿児島郡領原町八神	製鉄遺跡	
60	洛竹精耕所跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
61	獅子尻塗跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
62	御子古御跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
63	梅ヶ追谷飼跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
64	市地向塗跡	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
65	仁井金砂	鹿児島郡領原町角井	製鉄遺跡	
66	大立寺山跡	鹿児島郡領原町八神	製鉄遺跡	
67	三代木伊佐跡	鹿児島郡領原町八神	製鉄遺跡	
68	大底御跡	鹿児島郡領原町八神	製鉄遺跡	
69	小熊敷御跡	鹿児島郡領原町八神	製鉄遺跡	
70	日ノ平御跡	大田市山口町佐瀬	製鉄遺跡	本報告書第1章
71	横ヶ原御跡	大田市山口町佐瀬	製鉄遺跡	
72	御施御跡	大田市山口町山口	製鉄遺跡	
73	多後製冶塗遺跡	大田市山口町山口	製鉄遺跡	

## 第3章 檀原遺跡

### 第1節 調査の概要

檀原遺跡は、簸川郡佐田町大字上橋波に所在する。中国山地に源を発する神戸川は佐田町西部を北へ流れるが、これにより形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は200m～205m、神戸川との比高差は5～10mである。遺跡は、分布調査の結果から段丘の川上側に近世の製鉄炉を中心とする遺構、川下側に製鉄に関わる人々の生活した集落（山内）からなることがわかつていた。また、江戸時代にたらを経営した鉄山師である、田儀櫻井家に残る『田儀櫻井家文書』に「檀原釣」の名が見えることから、文献との関連についても注目された。<sup>39)</sup>

調査区は、「93年度の調査で近世の製鉄炉が存在する平坦面をⅠ区、その南側（上流側）に位置し、3～4m低い平坦面をⅡ区とした。'94年度の調査では、Ⅱ区西側（上流側）にⅢ区、さらに西側（上流側）にⅤ区、Ⅰ区北側（下流側）にⅣ区を設定した。以下、各調査区で検出した遺構と、その主要なものについて概略を述べる。

Ⅰ区で検出した遺構は、近世製鉄炉（いわゆる高殿たら）の地下構造1（1号炉）、溝1（SD-01）、皿状遺構1（SX-01）、銀治炉状遺構1（SX-02）、そのほかに製鉄炉でできた鉄滓を捨てた排滓場などである。このうち製鉄炉の地下構造は、掘方の長さ（長軸）約15m、幅（短軸）約6m、深さ2.5mを測る大規模なものである。近世の製鉄炉に通有な本床、小舟をもち、さらにその下位にも複雑な構造をつくりだしている。

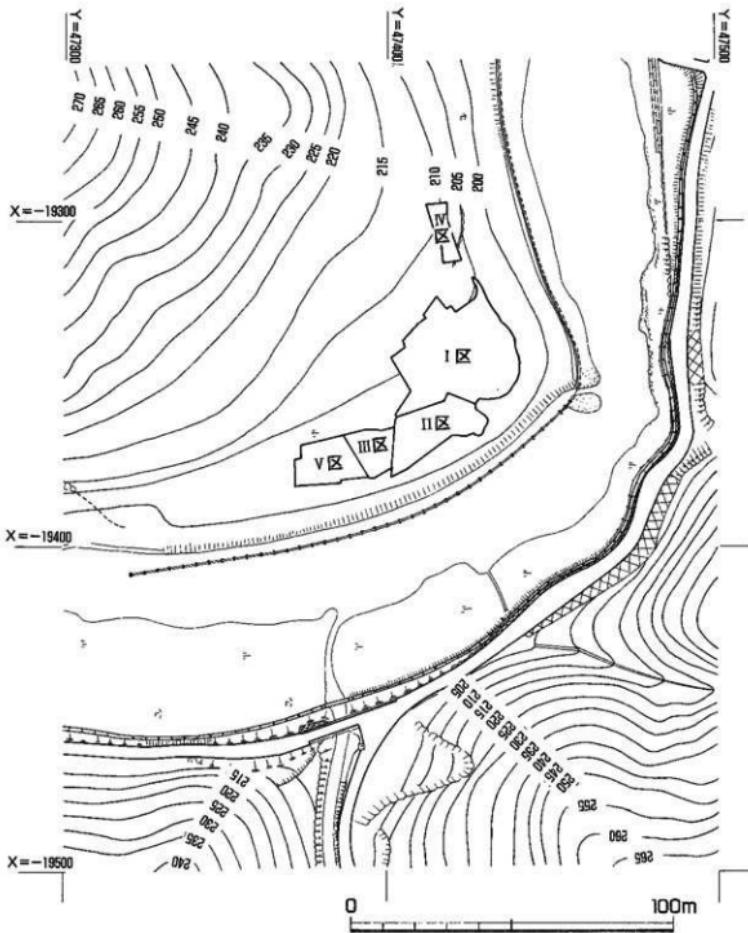
Ⅱ区では、道状遺構（SX-01）、池状遺構2（SX-02、03）、銀治炉1を検出した。このうちSX-02、03はいずれも自然石を積んだ壁を持ち、内側には粘土が貼られていた。また、SX-03は川に向かって延びる排水施設も備えていた。銀治炉は、この遺跡のるる河岸段丘を形成する砂層直上で検出した。地下構造部分ではなく炉底の一部と考えられ、長軸1.1m、短軸0.7mである。

Ⅲ区ではSX-01を検出した。幅約5mで、ごく浅い溝状の遺構である。

Ⅳ区では、土坑2（SK-01、02）ピット9（P1～9）を検出した。SK-01は、直径1.4m、深さ0.5mを測り、掘方の内側全体に粘土を貼りつけている。また、この地区では、不安定なものではあるが、三瓶山を噴出源とする火山灰の堆積が認められた。

Ⅴ区では、豊形炉に類似した形態をとる炉1（1号炉）と、箱形炉地下構造1（2号炉）、石組遺構1（SX-01）を検出した。1号炉は、炉内生成物も残存しており、最終操業時の状態を良くとどめた状態で検出された。炉の内法は40cm×40cmで、東側にトンネル状の排滓部が設けられていた。2号炉は東側の小口部を1号炉に切られているが、それを除けば遺存状態は比較的良好だった。現存長は4.5m、幅1.7mを測る。

なお、この調査で採取した製鉄関連遺物は、水洗の後、選別を重ね、遺構の性格を反映する



第1図 楠原遺跡調査区配置図 1:5000

と考えられた遺物については、実測と自然科学分析を進めている。その結果を踏まえた上で、  
楠原遺跡の性格についてまとめた報告を後日刊行する予定である。

## 第2節 調査の結果

### 1) I区の調査（第2・3図）

標高203～205mの平坦面で、遺跡の南～西を流れる神戸川との比高差はおよそ10mである。河岸段丘には2～3面の平坦面が階段状に存在するが、そのうち最も標高の低い川寄りの平坦面に調査区を設定した。遺構から出土した遺物は、鉄滓・炉壁など製鉄関連のものを除くと、陶磁器や古錢（寛永通宝）などがわずかに出土しているにすぎない。これは、I区だけでなく他の調査区も同様である。第2図は、'93年度と'94年度の調査区を合成したものであるが、I区のうち、1号炉の大部分及びSD-01が存在する調査区西側が'94年、それ以外は'93年の調査区域である。また'93年の調査の際、1号炉の東側跡坪付近にトレンチを設定したため、この部分について平面図ではできる限り復元したが、立面図・断面図ではこの部分が欠失しているものがある。

1号炉では地下構造の上面に粘土面を検出した。東西（1号炉長軸方向）18m、南北（短軸方向）12mで、操業時の作業面と考えられる。1号炉を覆っていた建物の規模をある程度反映していると考えられるが、後世の擾乱により粘土面はかなり乱れており、送風施設設置場所についても、上層の変化などは認められず、推定できなかった。

### SD-01・P1（第4図）

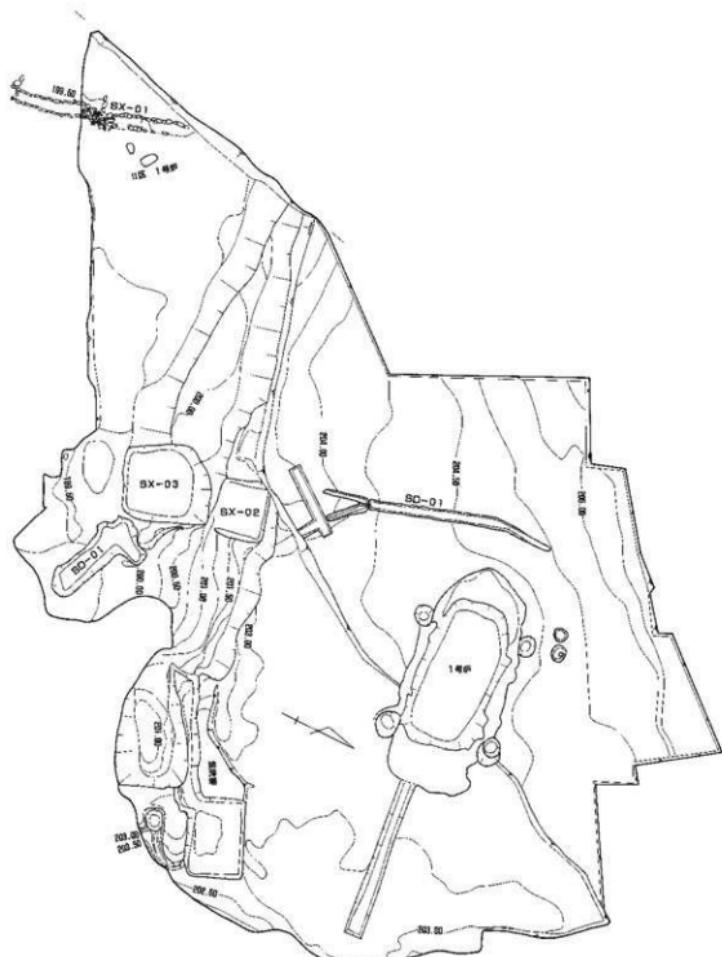
製鉄炉を被う粘土面の北東から南西にかけて幅30～80cm、深さ10～30cmの溝を検出した。このさらに北側にも細長く浅い落ち込みが2基認められ、溝と一連のものであると考えられる。溝は粘土面の西側の一辺に平行し、後述するII区のSX-02の方向へ延びるが、II区との境界付近は砂層となっているため溝は確認できなくなる。溝の位置から考えて、製鉄炉を覆う建物の雨落ち溝の可能性が考えられる。P1は直径30cm、深さ10cmの浅いピットで、SD-01に隣接して設けられる。P1の付近に建物などを推定させる他のピットは認められなかつたが、P1も建物の壁ないし軒を支える柱穴であることも考えられる。

### SX-01（第5図）

I区の北東隅、1号炉の粘土面の西側5mで検出された。浅い皿状にくぼんだ遺構で、底面には薄く粘土を貼っている。北東側には数個の石が認められるが、これらがこの遺構を構成していたものか、二次的なものか不明である。規模は長軸140cm、短軸110cm、深さ10cmで、粘土は熱を受けておらず、厚さは2～3cmである。

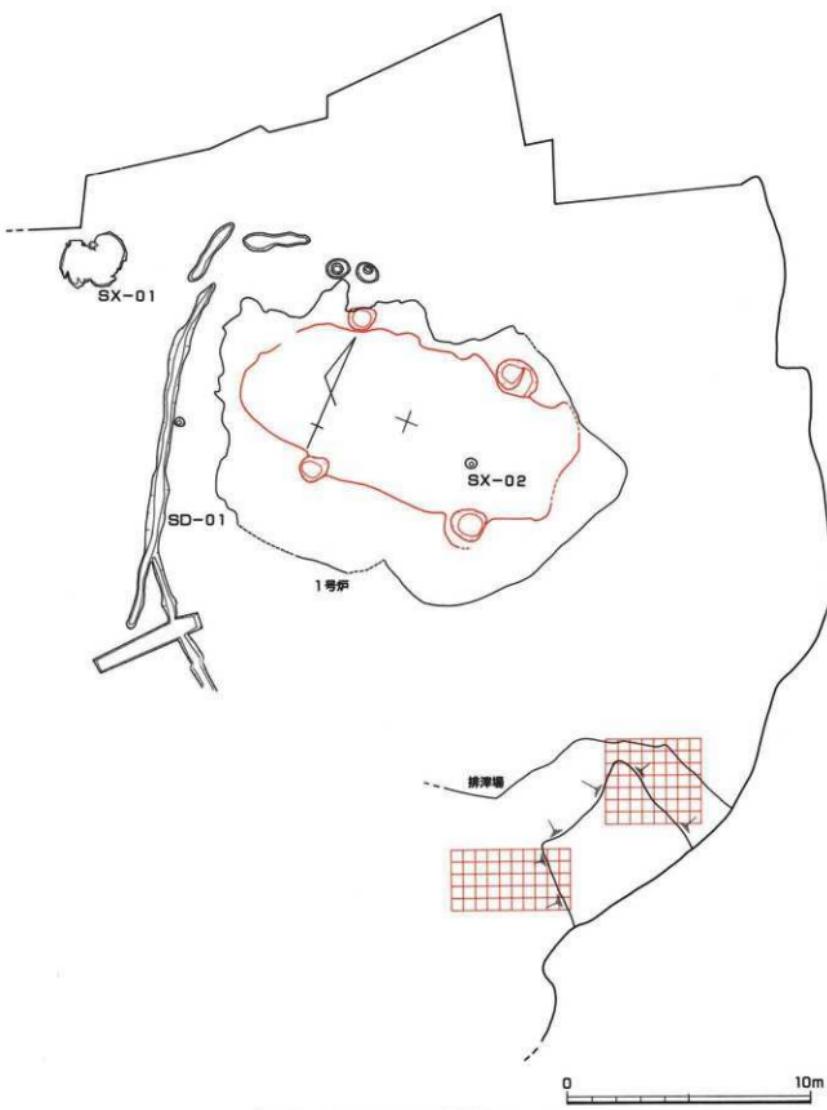
### SX-02（第6図）

1号炉の調査中に検出された、小形の鍛冶型状の遺構である。土層観察用に残したベルト内から発見されたため1号炉との関係が不明確であるが、レベルなどから復元すると、平面的には1号炉本床東端からさらに東へ約1m、層位的には地下構造土層図（第12図）の縦断面46層内に存在し、1号炉の廃絶後に設けられたものと考えられる。

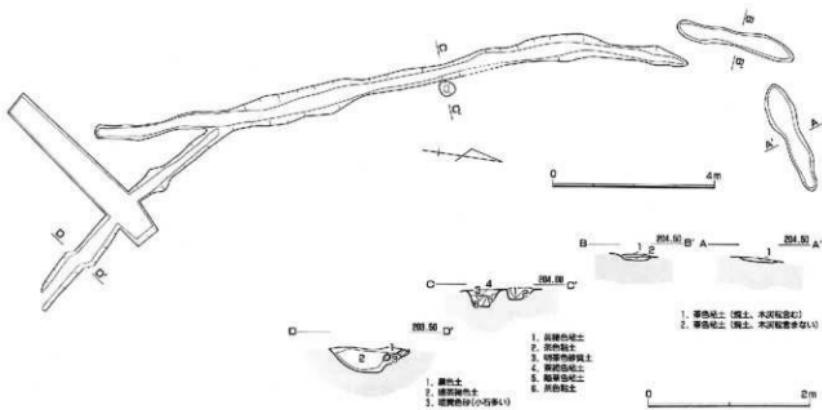


第2図 I・II区地形測量図 1:300

0 10m



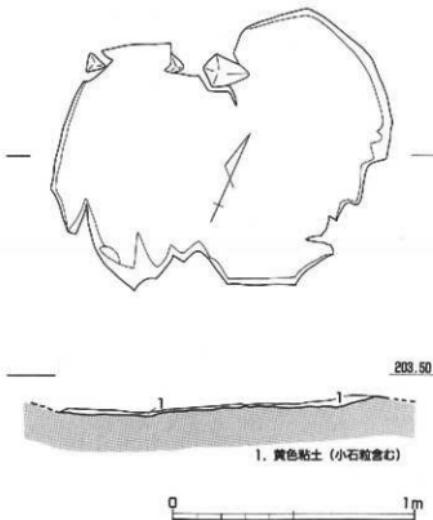
第3図 I区1号炉周辺遺構位置図 1:200



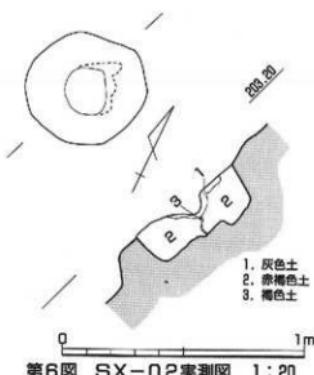
第4図 SD-01・P1実測図

規模は、平面形は直径50cmのほぼ正円で、中央付近が20cm×15cm、深さ10cmのボウル状にくぼんでいた。ほぼ完形と見られるが、くぼみ部分の側面から底面を中心に厚さ20cmの灰色土が見られ、還元状態にあったことがわかる。この灰色土は北側にやや広がっており、この方向に

送風孔が存在した可能性がある。地下部分には深さ15~20cmの赤褐色~褐色の粘土が硬くしまっており、酸化状態で熱を受けたものと見られる。



第5図 SX-01実測図 1:40



第6図 SX-02実測図 1:20

## 1号炉

1号炉の地下構造は、幅約40mを測る平坦面のほぼ中央に位置し、長軸をほぼ東西方向にとつて掘方を設けている。掘方の規模は長さ14.6m、幅6.3mで、中央の9.5m×4.5mが1段深い2段掘りとなっている。深さは上段のテラス状の部分で深さ約1m、下段の中央付近で2.6mである。

近世高殿鉄<sup>9</sup>の地下構造は「床釣り」と呼ばれ、本床・小舟・跡坪などの存在する上部と、排水施設・敷石（坊主石）などを設ける下部に大きく分けられる。1区1号炉の場合は、掘方中央の1段深い部分に床釣り下部が収まるように構築される。床釣り下部の主要な施設は、下位から敷石・配石面（下）・配石面（上）である。また掘方壁面には煙突状石組施設がつくられている。

### 押立柱（第7・8図）

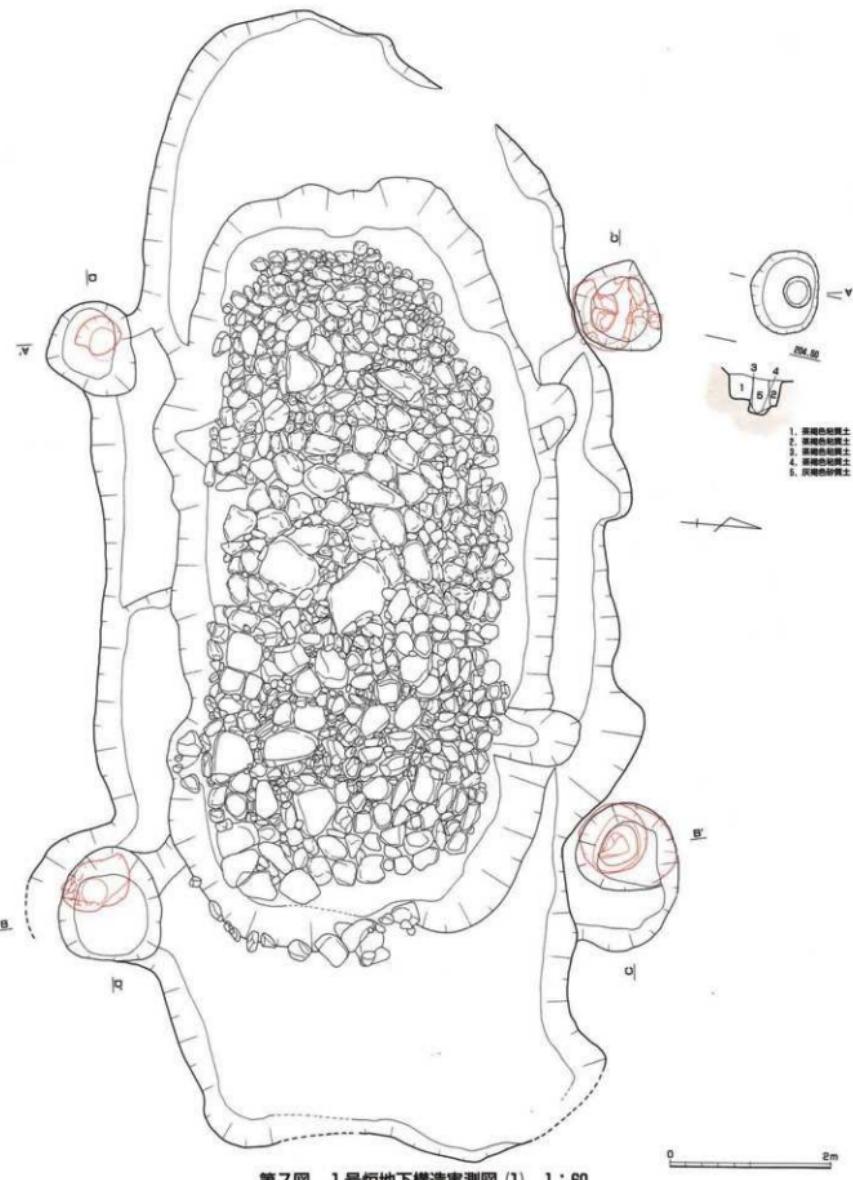
掘方に接して、大形の柱穴が4穴確認されており、これが押立柱にあたる。掘方との切り合いで関係については把握できなかった。各柱穴間の距離は北西—南西間が6.2m、北東—南東間6.5m、北西—北東間6.6m、南西—南東間6.8mと微妙に異なるため、いずれの辺も平行とならない。柱穴掘方の平面形はいずれも卵形ないし梢円形で、長軸1.2~1.4m、短軸0.9~1.2m、深さは1.3~1.4mと大きなものである。いずれも裏込めがなされており、北西と南東の押立柱の裏込めには土だけでなく石も使われている。平面図と土層図から推定される柱の太さは30~50cmである。また、南東押立柱はやや北に傾いて、南西押立柱は西に傾いて立つことが土層図などからうかがえる。

押立柱4穴のうち、南西押立柱を除く3穴からは炭化した状態の柱根を検出した。炭化している理由は、柱の腐食を防ぐため表面を焼いたためと考えられ、また北東押立柱の柱根については、使用された材の樹種は松であること、炭化がかなり内部まで進んでいることから、火災にあった可能性などが指摘された。

このほか、北西押立柱の2m北側からもピットが1基発見された。位置は南西押立柱と北西押立柱を結んだ延長線上で、規模は、平面形が長軸1m×0.7mの梢円形で深さは0.3mである。底面やや北側寄りの一部が1段深くなっている。この範囲は直径35cm、深さ10cmである。1号炉の覆屋に關係する柱穴の一つと考えられ、土層からみると、柱はやや南側（建物の内側）に傾斜して建っていたと見られる。

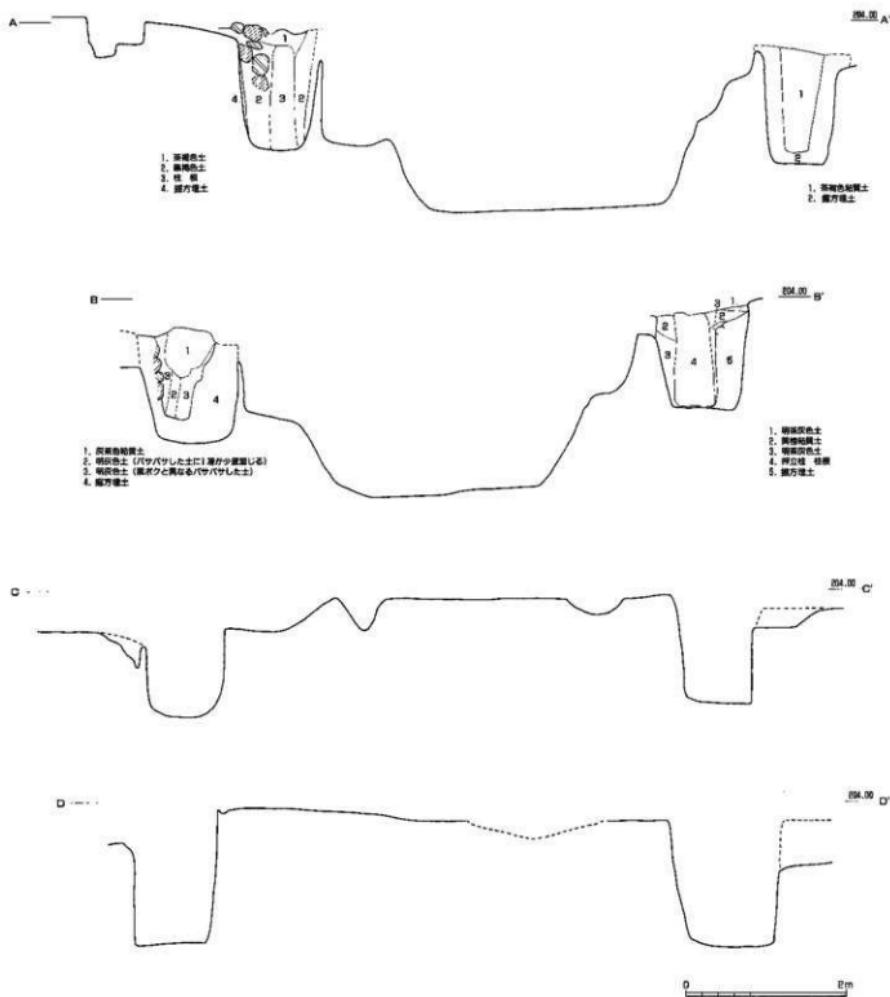
### 敷石（第9図）

掘方の最下部には、大量の石が敷き詰められ、「坊主石」と呼ばれるものに相当する。使用される石はいずれも自然石で、拳大のものから60cm×100cm、厚さ20cmといった大きなものまで様々である。石の配置には特に規則性は認められないが、大形の石が中央付近に置かれ、また西側にいくにつれて掘方の幅が狭くなっていくためか、西側には比較的小さな石が多い。



第7図 1号炉地下構造実測図(1) 1:60

この敷石の下や周囲に、溝ないしトンネル状の施設をもつ例も多いが、1号炉では認められない。これは、造構が河岸段丘上に立地し、掘方検出面から50cm～70cm以下は砂層となつてゐることから排水、防湿用の施設はあえて必要とされなかつたためではないかと推定される。



第8図 掘方断面図 1:60

### 配石面（下）・石組施設（第9図）

敷石の上位には、厚さ10～20cmの焼土層を挟んで石を配した面があり、その厚さは約10cmである。配石には規則性が認められ、長軸方向に7列程度、短軸方向に15列程度を並べているが、各列の間隔、方向はそれほど厳密ではなく、周辺部では掘方に合わせて列が湾曲し、石の間隔が広くなった部分では、中間に小形の石を補っている。使用している石は比較的偏平な自然石で、石の大きさは1辺30cm～40cmである。石と石との間は黄褐色の粘質土で埋められていたが、この土は熱を受けた様子はなく、固くしまった層でもないため重量がかかっているのは配石のみである。この層の上層及び下層は、強く被熱した焼粘土が固く焼き締まっている。これは、焼けていない状態の粘土を敷いて配石を行ってから、黄褐色の粘土層が充填される前にこの層全体を強く焼いていることを示すものである。

石組施設は、掘方の壁沿いの北東、北西、南東、南西の4カ所に設けられ、短軸中心線から西側へ約2m、東側へ1.6～2mの地点に位置し、長軸中心線を挟んで南北の施設がほぼ向かい合うように配置されている。

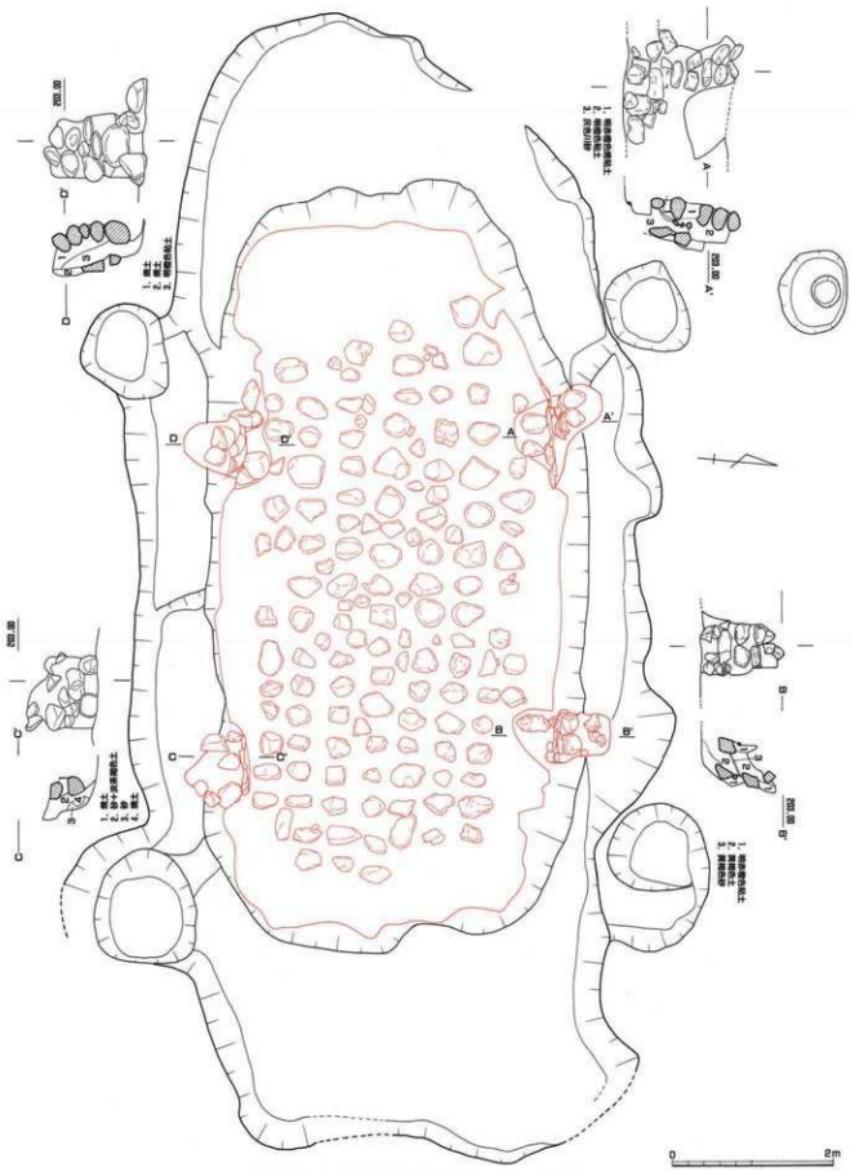
構造は、自然石と粘土を用いてつくられた、大形の竈のようなものである。地下構造掘方の壁を半円筒形に掘り込んで、内側に石と粘土を貼りつけ後方の壁をつくった後、側面から前面にかけての部分も同様に石と粘土で円筒形の構造をつくり出している。前面下部には粘土を用いず、石を架構して開口部を設けており、そのレベルは配石面（下）と一致することから、この面から構築されたことがわかる。ただし、配石面（下）と配石面（上）との間に存在する焼土層は、石組施設の開口部付近に打ち欠いたような穴が設けられ、石組施設は上下両方の配石面へ開口するような構造になっていたものと見られる。

規模は、外法で開口部の幅80～130cm、円筒状部分の幅60～90cm、高さは90～140cmである。開口部の内法は幅20～30cm、高さ20cm、円筒状部分は内径15～25cmである。

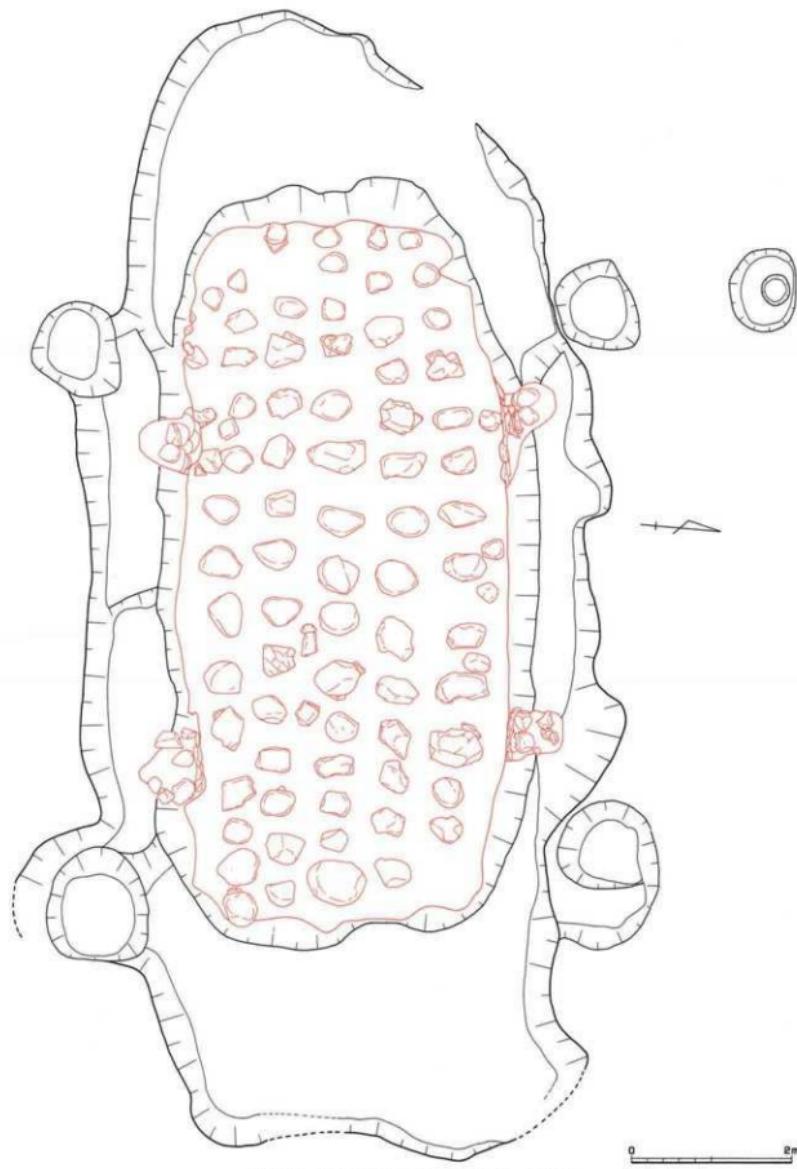
円筒状部上部のレベルから考えると、小舟構築時にはいずれも閉塞されていたものと見られる。円筒部分の内部には部分的に砂や土が堆積していたが、これらは壁の崩落などによる流れ込みで、おそらく地下構造を築成していく過程においては、上部は煙突状に解放されていたと考えられる。そして、この施設の粘土部分が被熱していること、配石面（下）、配石面（上）がともに強く被熱していることを考えると、配石面（下）（上）を焼成し、除湿・乾燥を行う際の煙突として機能していたことが想定される。

### 配石面（上）（第10図）

配石面（下）の上に10～20cmの焼土層を挟んで存在する層である。構造は配石面（下）に類似しているが、いくつかの点で異なる。最も大きな点が、石と石との間が完全に空間となっていることである。そのほかには、使用されている石材の大きさが30～70cmとやや大きくなること、その影響からか石の個数、列数が減少することが挙げられる。石の配置は、長軸方向では



第9図 1号炉地下構造実測図(2) 1:60



第10図 1号炉地下構造実測図 ③ 1:60

明確に5列が認められるが、短軸方向では列をなしている部分もあるものの、規則性がなく、この方向に列を作るという意識はあまりなかったようにみられる。それぞれの石は下層にめり込むように痕跡を残しており、下層が縮まっていない段階でかなりの重量が石にかかったことがわかる。この施設の構築は、石を配置した後、石の間の空間に薪を充填した状態で上層の粘土を敷き層全体を被覆する。その後、薪を焼き抜くと配石の間に空間をもつ層ができるわけである。

この層の上面及び下面は固く焼き締まっており、焼土が敷かれたのではなく、粘土が敷き詰められた後に火を受けたもので、この層から木炭が検出されていないのは、木炭が残らないほど完全に焼かれたためと考えられる。このような構造は近世のいわゆる高殿たらには比較的多く見られるものである。

#### 床釣り上部

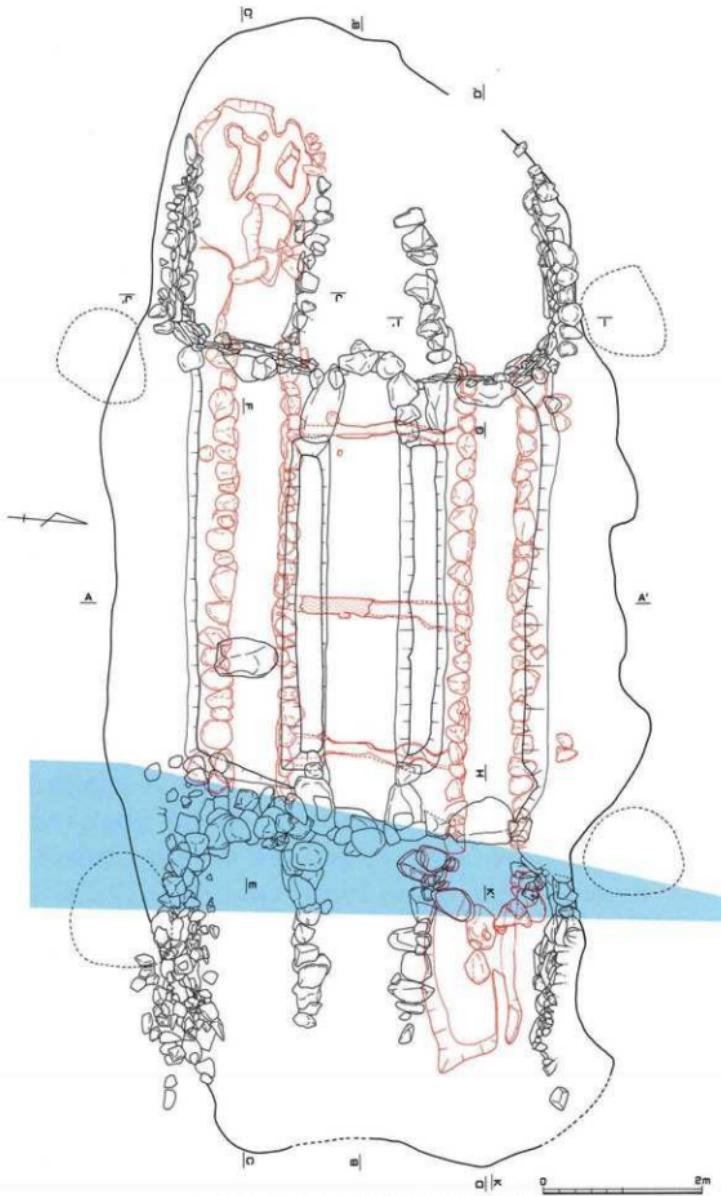
床釣り下部を基礎に構築される部分である。近世高殿たらの場合は、ほとんど全てにおいて小舟と呼ばれる大規模なトンネル状の空間、小舟を乾燥させる際の作業場となる跡坪、炉の直下にあたる本床と呼ばれる舟底状の施設を設けるが、細部の構造やそれ以外の施設の有無はたらごとに微妙に異なる。

#### 小舟（第11～13図）

小舟は、トレンチ調査により東側の開口部付近が破壊され、不明確な部分もあるが、ともに復元長は約6m、内法で幅0.5m、高さ0.6mである。小舟床面の高さは、北側・南側小舟ともほぼ同一であり、また西側・東側開口部でのレベル差もほとんどなかったが、小舟中央付近が開口部より約10cm高くなっていた。内壁面は20～40cm大的石を並べて2段程度に積み重ね、それを基礎にして隙間を粘土により目張りしている。石を積み上げる際の控え積みなどは認められなかった。天井部分は基本的には粘土のみで構築されるが、小舟の両端では50～60cmとやや大形の石を架構し、開口部を確保しているほか、南側小舟の中央からやや東よりで1カ所大井に石を架構している部分がある。

小舟は、内部に薪を充填して天井を粘土などで覆ったのち、その薪を燃やし切り、空間として残すという工程により設けている。これは、炉の地下を乾燥させると同時に、炉を支える地下構造の強度を高めるという目的を持つものである。この小舟についても、それを裏付けるように内面の様相は強い熱を受けたことを示しており、また側面は高温のためガラス化している部分も見られた。小舟の開口部に閉塞施設は認められず、小舟・跡坪を埋めた際の焼土などが自然に流入していた。小舟断面の土層を見ると、北側小舟の西開口部寄りと南側小舟の東開口部寄りにやや赤みがかった土が見られる。これは酸化状態での被熱を示すことから、それぞれの開口部が焚き口として使用されたことをある程度反映しているものとみられる。

小舟を焼く際の焚き口、煙突状施設は互い違いに設けられることが多いが、この遺跡でも北



第11図 1号炉地下構造実測図(4) 1:60

東と南西の跡坪にトンネル状の施設が存在することから、この2カ所の施設が煙突の役割を果たし、北西・南東が焚き口として使われたと考えられる。このトンネル状施設については後述する。

また、両小舟の間には、これをつなぐように3本の細いトンネルが存在する。中央のトンネルは小舟の長さをほぼ2等分する位置にあり、そこから東側に1.7m、西側に2.2mにそれぞれ位置し、各溝間の距離は均等ではない。内法は中央のものが最もしっかりしており、長さ2.1m、幅0.2m、高さ0.1mである。東側・西側のトンネルはこれよりも規模が小さく、また小さな屈曲を繰り返しており、粗雑な印象を受ける。底面の高さは小舟の床面とほぼ一致しており、小舟側面の構築に前後してつくられたものであることがわかる。この3本に共通する特徴は、どちらの小舟にも開口していないことである。少なくとも小舟の天井をつくる段階では閉塞されており、当初から小舟に貫通していなかったことも考えられる。

また、中央のトンネル内には、銛鉄が流れ込んでいる状態が確認された。何らかの理由で操業中に炉の底部と本床に亀裂が生じ、製錬中の銛鉄が流出してこの位置まで達したもので、回収されないまま地下構造の補修が行われたのであろう。

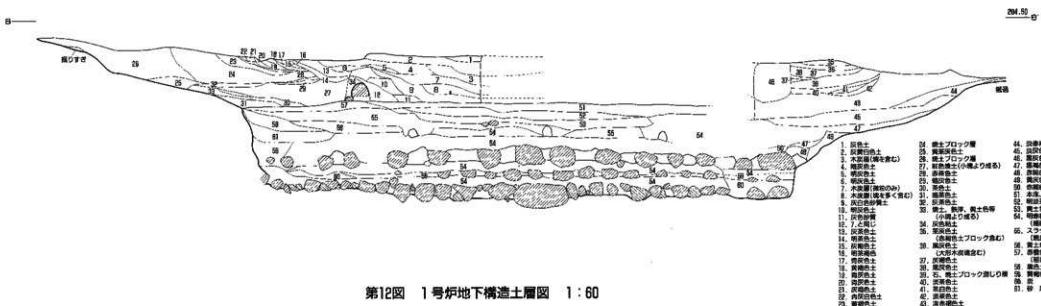
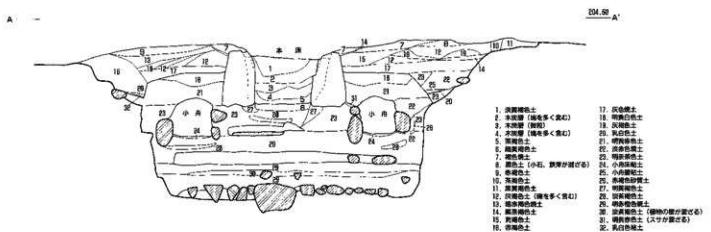
#### 跡坪（第11・13～15図）

跡坪は、いずれも幅約1.5m、長さ約3.5mの広さで、高さは最大で1.4mである。平面的には小舟に向かって細くなる逆U字形を呈す。床面は小舟に向かって-10°～-20°で緩やかに傾斜しており、厳密にいえば平坦面をもたないが、小舟よりの1～2mでは傾斜が特に緩やかになり、小舟などの乾操作系をする上では支障がなかったものと思われる。

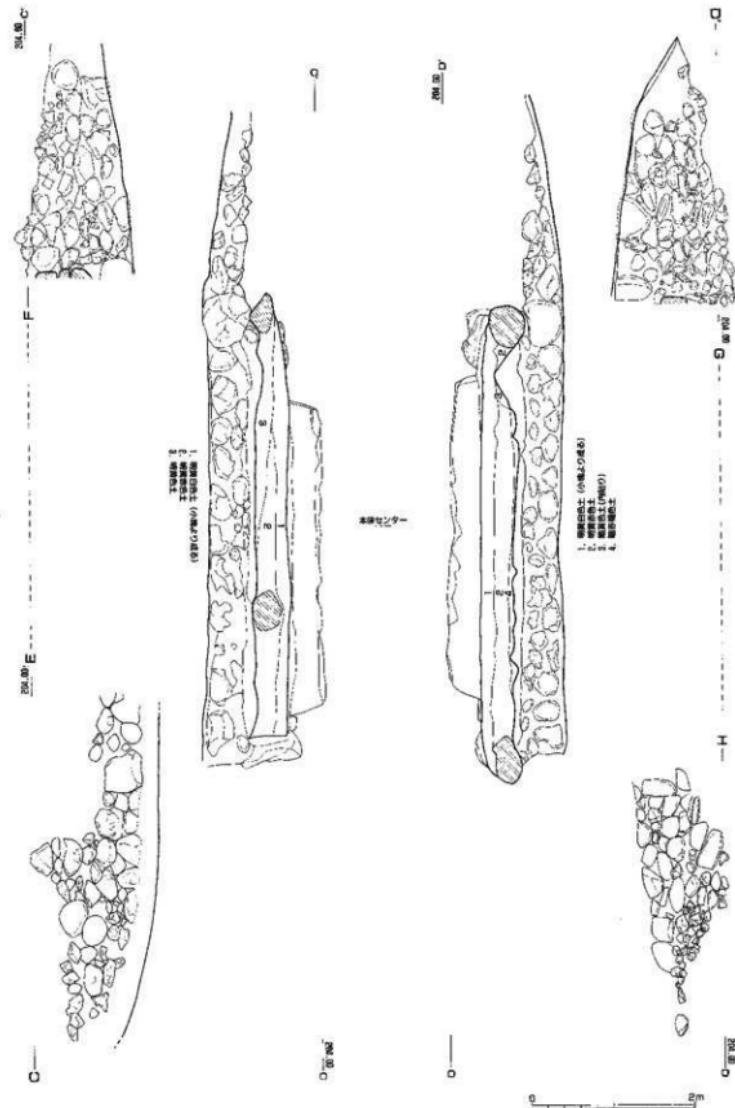
掘方側（外側）及び本床・小舟側の壁面は10～50cm大の石が1.4mの高さまで積まれ、補強されている。また、センター側（内側）には開口部付近で高さ0.3～0.4m、幅約2mをはかる基壇状の高まりが存在し、南側と北側の跡坪を区画している。つまり、1つの開口部に一つ一つが独立したような形でつくられているのが特徴である。この高まりは、側壁が石を基礎となつておらず、小舟側壁の石とほぼ同じレベルであるため、小舟と一緒にものとして構築された可能性もある。掘方側の壁についても、ある高さまでは小舟と同時につくられた可能性を否定しないが、目地の通り方などからそれを読みとることはできなかった。それぞれの跡坪の土層を見ると、何度も再掘削を行っている様子が見てとれる。

#### 跡坪内トンネル状施設（第15・16図）

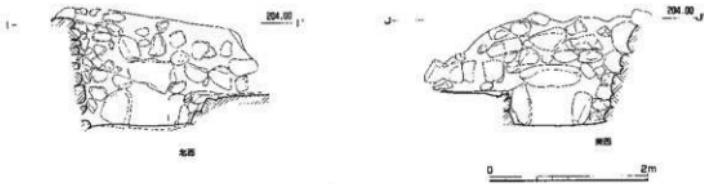
跡坪内のトンネル状施設は、北東・南西の跡坪で検出された。南西側のものは、小舟開口部寄りに長さ約3.0m、幅1.3m、深さ0.3mの空間を設け、その中につくられる。跡坪の外側（掘方）寄りに石と粘土を使用した高さ30cmの段を設けることによって、跡坪を狭め、小舟の開口部に近い長さ70cm、幅80cm、高さ30cmの空間をつくりだしたのち、石組と粘土によって二つに分割してトンネル状にし、跡坪床面の勾配に沿って約1.5m外側へ延びる構造となっている。



第12図 1号炬地下構造土層図 1:60



第13図 小舟断面及び跡坪側面図 1:60



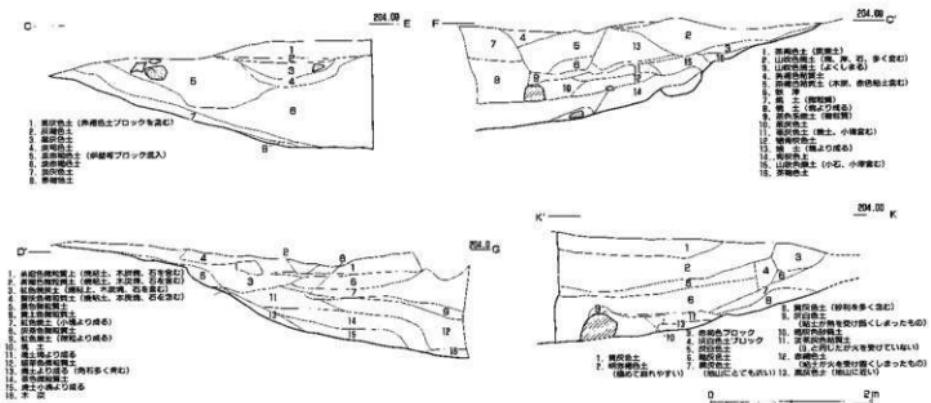
第14図 跡坪正面図 1:60

外側へ向かうにつれて、トンネルは再分割されたり、合流するなどして、それぞれが通じていたと思われる。北東側のものについても、基本的には同様な構造であるが、空間の規模が長さ2.5mで若干規模が小さく、分割されたあとは幅40cmと幅20cmの2本のトンネルに完全に分かれている点が異なる。

しかし、いずれのものについても、跡坪の埋土を貫通して外部へ通じる穴やトンネル様の施設は検出できなかった。このことについては、跡坪内の施設が窪突の役割を果たしていなかったのではなく、跡坪が完全に埋められていない段階で小舟の焼成がおこなわれ、その後に、跡坪が完全に埋め戻されたと考えておきたい。また、跡坪の上層はかなり複雑な切り合いで見えることから、後の再掘削などのため、外部へ通じる施設が消滅したことも考えられる。

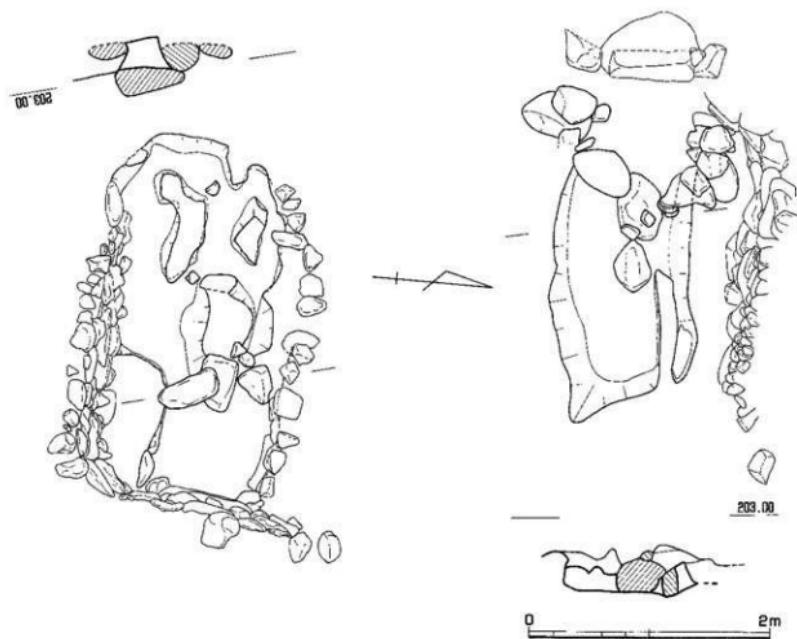
#### 本床（大舟）（第17図）

本床（大舟）は、平面的には2つの小舟の中間に位置し、舟底状を呈する。製鉄炉の直下に位置する乾燥、除湿のための施設である。薪を詰めて粘土で天井をつくり、焼成する点は小舟と同様であるが、さらにその後天井を外し、内部で木炭を燃やしながら叩き締め、粉状の炭を充填するとされる。

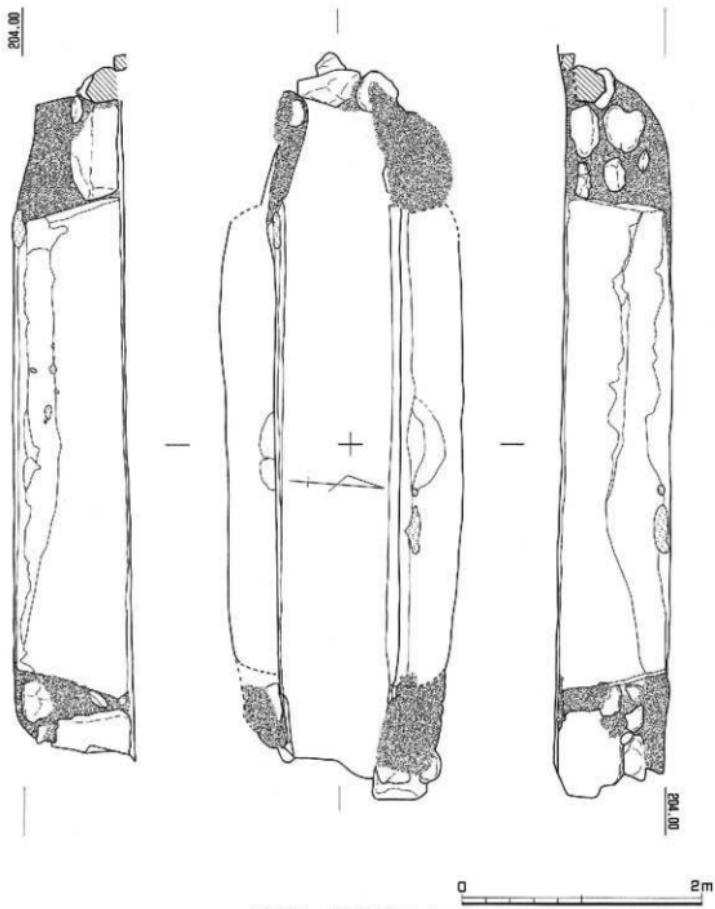


第15図 跡坪土層図 1:60

壁の大部分は粘土のみでの築成で、小口部分は石組を基礎にして粘土で被覆して築成し、両小口がすばまって閉塞される。本床の規模を復元すると、外法は長さ6.3m、幅は中央付近で最大となり2.1m、内法は長さ5.5m、幅は壁の上端で最大1.1mである。壁の高さは、粘土のみの部分はほぼ90cmを保ち、小口部では基礎となる石に合わせてやや下がっていく。本床底面の高さはほぼ一定で、小舟側壁上端と高さがほぼ一致する。焼成の際、小口部分は、一方が焚き口、もう一方が煙突として使用されていたと考えられるが、どの小口がどちらの機能を果たしていたかを示す痕跡は検出できなかった。本床の壁の上面や、粘土部分と小口部分が接する面は丁寧に面がつくり出されている。上面は、本床を焼成する際の天井部をのせるためのものであろうか。小口部分の面取りについては目的が不明である。小舟内壁の粘土部分は硬く焼きしまり還元色を呈する。また壁の上位には鉄滓の付着が認められるほか、粘土を貼り足して壁を補修している様子がうかがえる。本床内の堆積物は、最上層と最下層を除き、木炭の層で構成されている。層によって木炭片の大きさが異なり、粉状のものから、わずかに破碎された程度



第16図 跡坪内トンネル状施設実測図 1:40



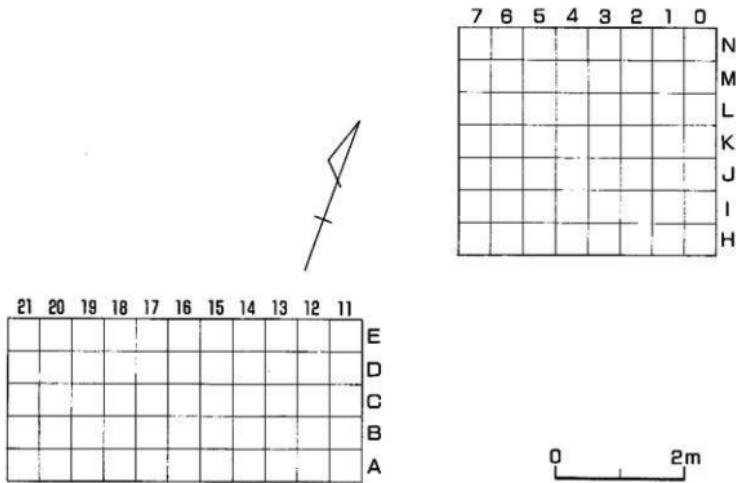
第17図 本床実測図 1:40

のものまで様々であった。(第12図参照)

小舟・本床の築成順序については、小舟側面まで地下構造をつくり、次に本床の側壁を構築した後に小舟の天井をのせていると考えられる。

#### 排溝場（第18・19図）

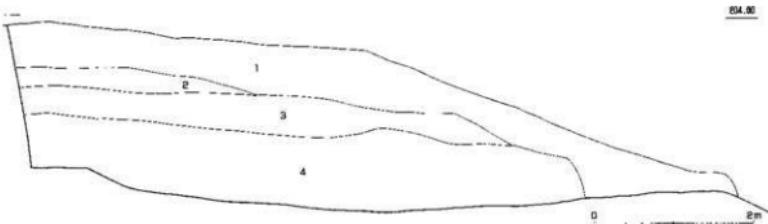
I 区の南東端斜面、1号炉の南西約 5 m に位置する。神戸川に向かって下る南東側斜面と II



第18図 排滓場遺物採取区画配置図 1:30

区へ下る南西側斜面にかけて、1号坑で生成した大量の鉄滓、炉壁などが廃棄され、面積は約70m<sup>2</sup>、深さは2mに達していた。製鉄炉の性格を解明する上で、鉄滓から得られる情報は欠かすことはできないため、排滓場に一辺50cmの方眼を組み鉄滓の採集用区画としたが、その鉄滓の量から全量の採取は不可能であったため、およそ1/2について回収することを目指し、実際には第18図のように区画を設定し、調査を実施した。区画の東→西を0→21、同じく南→北をA→Nに分け、この組み合わせで各区画を呼称した。

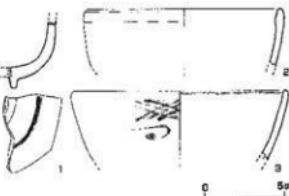
層位については、操業時に鉄滓が廃棄されるごとに層が形成されるため、堆積はかなり複雑な状況を呈しており、厳密に分層することは困難であったので、破碎された炉壁及び粘土の形成する面が特に厚い部分を基準に4層に分層した。鉄滓ほか製鉄関連遺物の観察、分析結果について改めて報告する予定である。



第19図 排滓場土層図 1:60

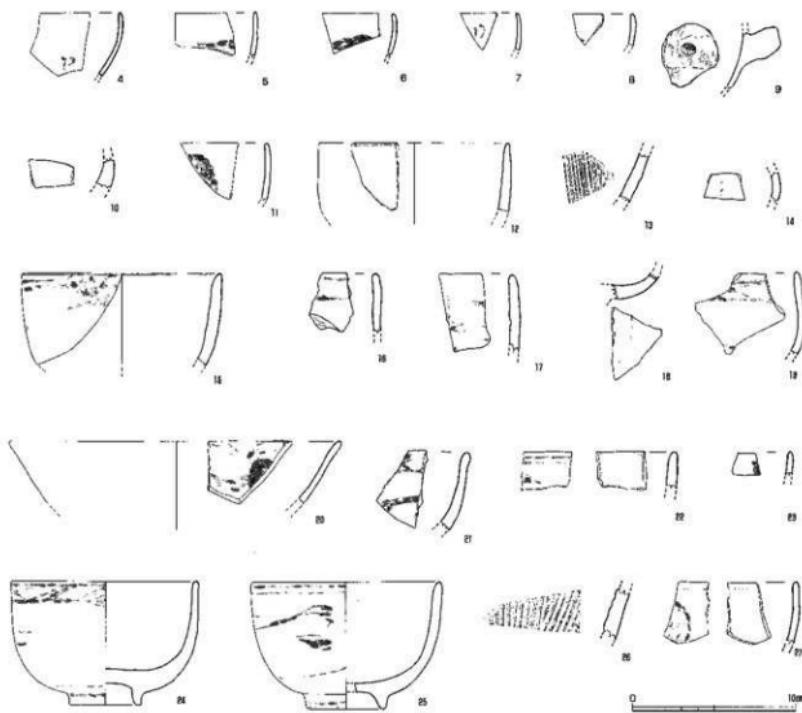
### I 区出土遺物（第20～23図）

I区で出土した、製鉄に直接関係しない遺物は、陶磁器を中心にごくわずかである。そのほとんどは小片で、出土場所も排溝場が大半を占める。それ以外の遺構では、1号炉地下構造埋土、SD-01から1～2点の陶磁器などが出土しているのみである。

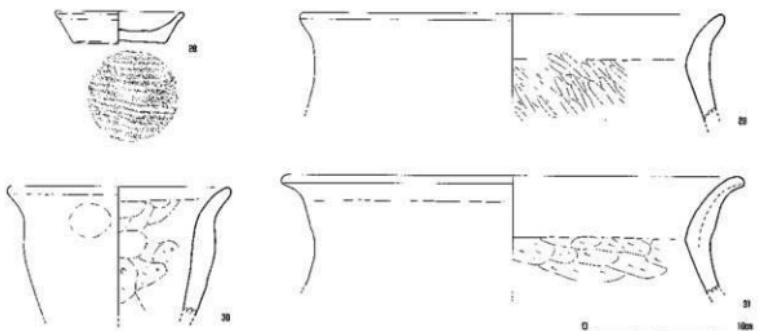


陶磁器はその多くが肥前系の陶胎染付である。20-1は1号炉跡坪内、2と3がSD-01から出土した。いずれも肥前系の陶胎染付碗と見られ、1が底部付近で、高台内にも施釉される。2・3は口縁部である。3には口唇が認められる。

第21図は排溝場から出土した陶磁器で、4～11が1層、12～14が3層、15～26が4層、それ以降は、層位不明のものである。2層からは陶磁器は出土していない。陶胎染付の茶碗以外で特徴的なものについて簡単に述べると、4～8は肥前系の磁器で、茶碗の口縁部である。9は



第21図 I区 出土遺物実測図 (2) 1:3

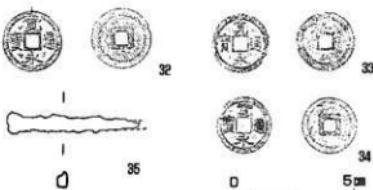


第22図 I区 出土遺物実測図(3) 1:3

陶胎の土瓶の釣り手付近、10は底部付近と考えられるが、小片のため詳細は不明である。13は肥前系と考えられる擂鉢で、薄い鉄軸がかかる。14は外間に軸がかからず、すの付着している部分がある。20は刷毛目の皿である。

これらの陶磁器の時期については、一部17世紀後半にさかのほる可能性を持つものもあるが、概ね18世紀代のものである。このほかに小片のため掲載しなかったが、わずかに瀬戸・美濃系や、地元の肥前系の窯で焼かれた可能性のあるものが出土している。28~31は土師質土器で、1号炉の検出・掘り下げ中に出土した。28は小形の皿で、調整は内面・外面ともナデで、底部はやや上げ底気味で静止糸切りである。29は口縁が直線的に外傾する厚手の甕と思われる。調整は外面～口縁部内面はナデ、内面の頸部以下はヘラケズリで部分的に細かいヘラミガキが認められる。33は口縁部が最大径となる小形の甕であろう。調整は外面～口縁部内面がナデ、内面頸部以下はヘラケズリで、外面の頸部付近に指頭圧痕が残る。34も甕と考えられ、調整は33と同様である。時期は、31~33は平安時代頃のものであろうか。31は少なくとも中世以降のものと思われ、堅緻な焼成を見るとたら操業頃の可能性もある。

第23図は古銭と鉄製品である。32~34は寛永通宝で、32と33が1号炉の南西跡坪埋土中、51は排溝場の第3層から出土した。32と34が1659年以前に鋳造されたいわゆる「占寛永」、33がそれ以降の「新寛永」である。35も1号炉跡坪内から出土しており、先端が欠けているが、角釘ではないかと考えられる。



第23図 I区 出土遺物実測図(4) 1:2

## 2) II区の調査

II区は、標高約200mの平坦面を中心に遺構が存在し、I区との比高差は約3m、川との比高差は約5mである。北側にはI区から延びる平坦面があり、そこから南へ下る斜面から平坦までを調査範囲とした。この調査区の斜面では表土の下層はすぐ基盤である砂礫層となるが、平坦面では、砂礫層の上にわずかに茶褐色土がのり、生活面や作業面となっていたようである。

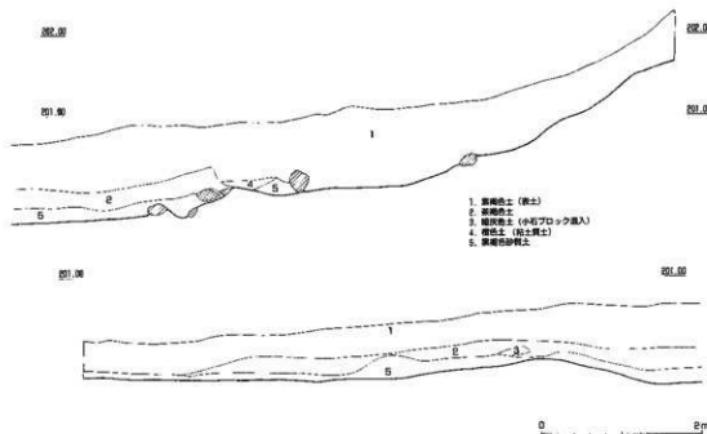
II区で検出された遺構は2列の平行する石列状遺構（SX-01）、鍛冶炉、池状遺構（SX-02・03）、池状遺構に接続する溝状遺構（SD-01）である。

### SX-01 (第25図)

II区の南西隅に位置し、範囲確認調査で存在が確認されたため、一部調査範囲を拡張して調査を行った。遺構は、石列がわずかにS字状に蛇行しながら2列平行して南北に延びるもので、検出時の規模は長さ7.5m、石列の間隔は約1mである。石列は等高線に直交するように延びており、北端部で標高は約204mで南端はこれよりも約1m低い。

使用されている石は、長さ20~30cm、幅約10cmの偏平なものが多く、石列のつくる空間と外とを仕切るように立て並べられている。ほぼ中央付近で平行する石列が途切れ、小形の礫が集積される部分がある。この部分では石列が西側へほぼ直角に曲がっているように観察される。また遺構南端でも同様に石列が西側へ続く可能性がある。

この2列の石列間には、礫が集積されている部分を除いては、周囲と同様に黒色土が堆積しており、これを取り除くと砂質土が現れ、堆積物に周囲との違いは認められない。遺物も出土していない。



第24図 II区 土層図 1:60

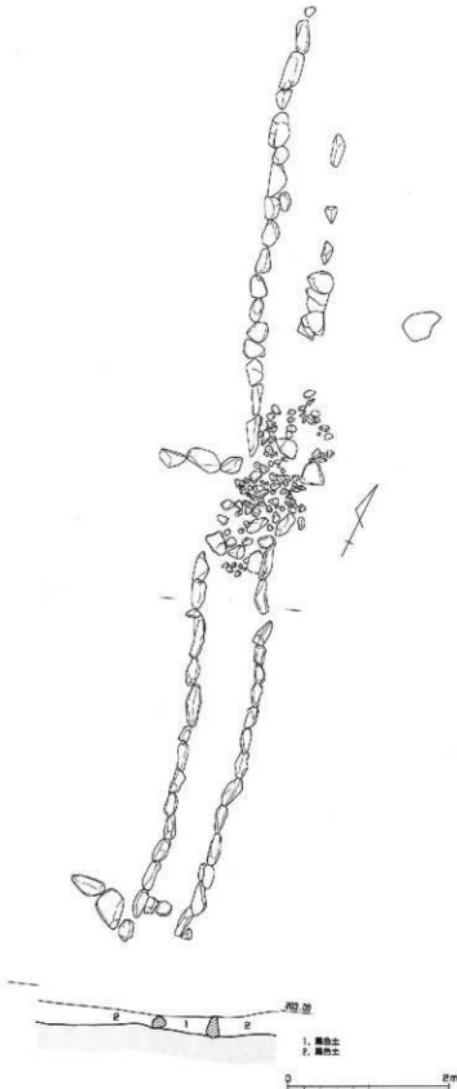
石列間の土の堆積状況や、高低差などを考えると、SX-01は、川の方向からⅡ区やⅠ区へのぼるための道で、石列はその道を区切るためのものと考えるのが妥当であろう。

#### 鍛冶炉（第26図）

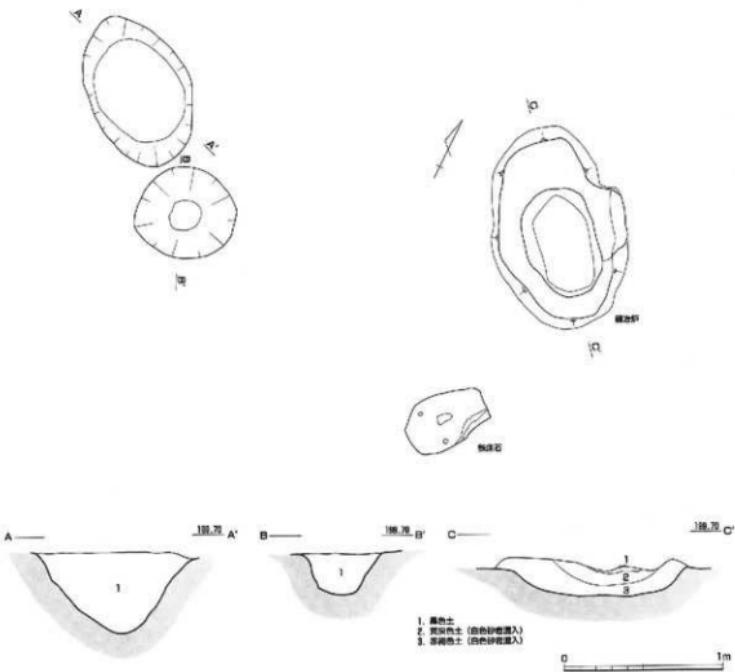
鍛冶炉はⅡ区の西側で検出された。平面は外法で長径110cm、短径70cmの橢円形で、北東側にやや張り出した部分が認められる。中央付近の70cm×40cm、深さ10cmの皿状に凹んだ範囲が炉底範囲であろう。炉の基礎は、砂層を約20cm掘り込んでつくられている。断面の土層の色から、炉底近くは被熱して、かつ還元状態であったと見られ、鍛冶炉として使用されたことを裏付けている。また近世の大鍛冶の場合、炉は2基がセットとなっている例が多いが、ここで検出した炉は、1基のみである。

炉の南側約1mには、鉄滓の付着した偏平な石が存在し、精錬時に鉄を鍛打する鉄床石と見られる。平面形は50cm×20~30cmで長方形に近い。砂層直上で検出されたものであるが、原位置と考えられる。

このほか、炉の西側でピットを2基確認した。1基は平面形100cm×60cmの橢円形で、深さ50cm、もう1基は径50cmの円形で、深さ30cmである。この周辺で検出されたピットはこの2基で、ピットの形状からも、鍛冶炉の覆屋の柱穴であったかどうかは判別できない。



第25図 SX-01実測図 1:80



第26図 錬治炉及び周辺ピット実測図 1:30

#### S X - 0 2 (第27図)

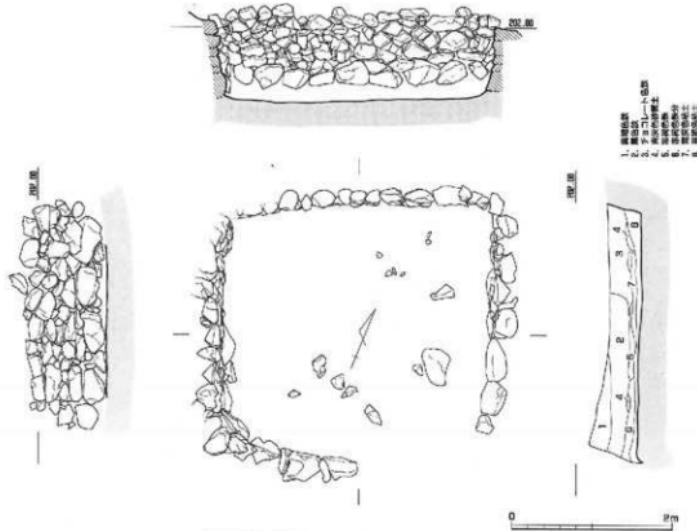
II区の東側の斜面に位置し、この遺構を構築するため必要最小限の面積だけを削平して、平坦面をつくり出して設けられた池状遺構である。I区 S D - 0 1 の延長上に存在する。砂層を掘り込み、4方向の壁は大形の石を積み上げて石垣状にしているが、検出時には南側壁の東寄りでは石垣が存在しなかった。規模は、内法で3.3m×3.2mとほぼ正方形の平面形である。深さは石垣の北側と南側ではかなり差があり、北側の石垣の頂部から掘方までは1.1m、南側では0.6mである。

遺構内の堆積物は上層から中層にかけて、殆ど鉄そのものといえるほど鉄分が非常に多く含まれたもので、硬く固着していた。最下層については厚さ10~20cmの粘土になっている。基盤となる層が砂層であるため、漏水を防ぐために敷かれたものであろうと思われる。

#### S X - 0 3 (第29図)

S X - 0 2 の南側に隣接する池状遺構である。S X - 0 2 より床面の高さで約2m低く、ほぼ平坦面上につくられる。S X - 0 2との先後関係は不明である。

基本的な構造はS X - 0 2と同様であるが、北側壁は石垣が崩落したものとみられる。平面の



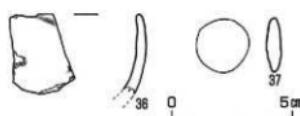
第27図 SX-02実測図 1:60

規模は $4.5\text{m} \times 4.4\text{m}$ とSX-02よりもやや大きく、深さは北側壁沿いで1m、南側で0.8mとなっている。遺構内の堆積物は、やはり非常に鉄分が多く固着していた。壁面及び床面近くには粘土が残存しており、目張りのために用いたものであろう。

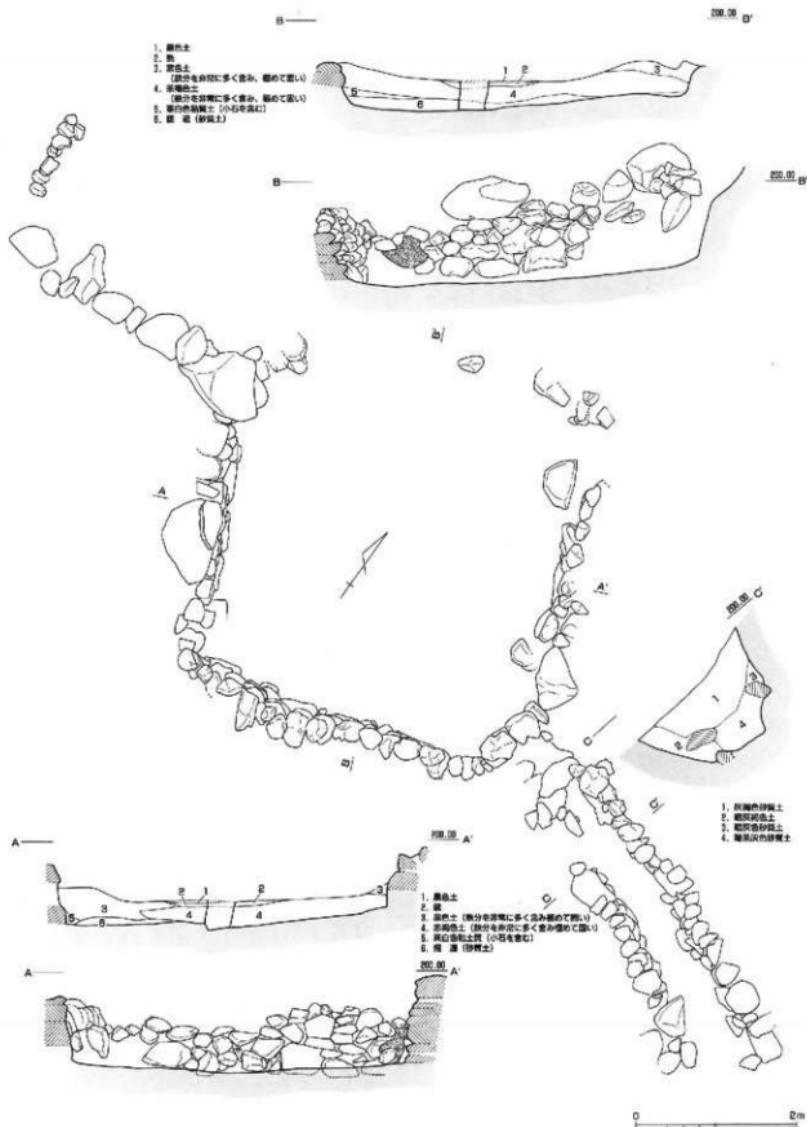
SX-03の西側には壁を構成する石につながる石列が認められた。北西方向に直線的に3.5m延び、そこから直角に屈曲する。SX-03への導水施設の一部である可能性もあるが、詳細は不明である。また、SX-03南東隅の底面近くから東へ続く暗渠状の遺構が発見された(SD-01)。規模は、長さ約5m以上、上端の幅約2m、深さ約1mの溝を掘り、20~50cm大の石を壁沿いに積んで補強して埋め戻している。ほとんどの部分で、石は側壁に用いられるだけだが、基部では天井に石を架構し、トンネル状にしている。SX-01との接続部は粘土で塞がれており、石は用いられない。底面は鉄滓の混じる酸化土となっている。側面の石は5m以上先では認められない。

#### II区出土遺物（第28図）

II区から出土した遺物は、SX-02から出土した肥前系の染付の小碗片と、北側斜面から発見された碁石の2点のみである。染付の時期は18世紀前半～中頃と考えられる。



第28図 II区 出土遺物実測図 1:2



第29図 SX-03実測図 1:60

### 3) III区の調査

III区は、II区とV区の中間に位置する。標高は200m～202mで、緩やかな斜面である。東に隣接するII区の南西端で鍛冶炉が検出されていることから、III区にも鍛冶炉ないしその関連施設の存在が想定された。しかし、焼土面や、粘土層、鉄滓などはいくつか確認されたものの、鍛冶炉を検出した面とのレベル差などを考慮すると、いずれも後世の流れ込みなどによるものと考えられ、鍛冶関係の遺構は発見されなかった。

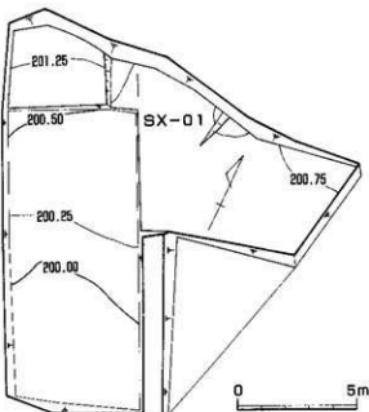
土層（第31図）は、表土を除去すると黒色～茶色をした粒の細かい層があり、この中に鉄滓や焼土などがわずかに含まれている。また、土層断面北側（山側）の1・6～8層は、SX-01の埋土である。

#### SX-01（第32図）

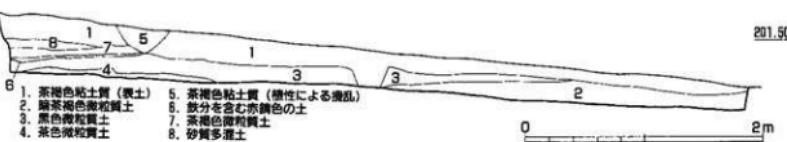
SX-01はIII区の北西側に位置する。III区の北西はI区から続く平坦面となっており、III区とは約2mの比高差がある。その間は急な崖面が存在し、調査の範囲外であるが、SX-01はその崖の中へ続いているようである。

規模は、幅4.5m～5.9m、深さ0.1m～0.4mで、幅の広い溝状を呈するが、北側ほど幅が広くなっている。中央より東側の埋土中及び床面からは、10～20cm大の礫が多数検出されている。土層の堆積状況を見ると、細かい砂を多量に含むものが多く、また最下層には、酸化した鉄の層が検出されている。また、底面の高さはほぼ水平か、周辺の地形とは逆に北西側の方がやや低くなっている。

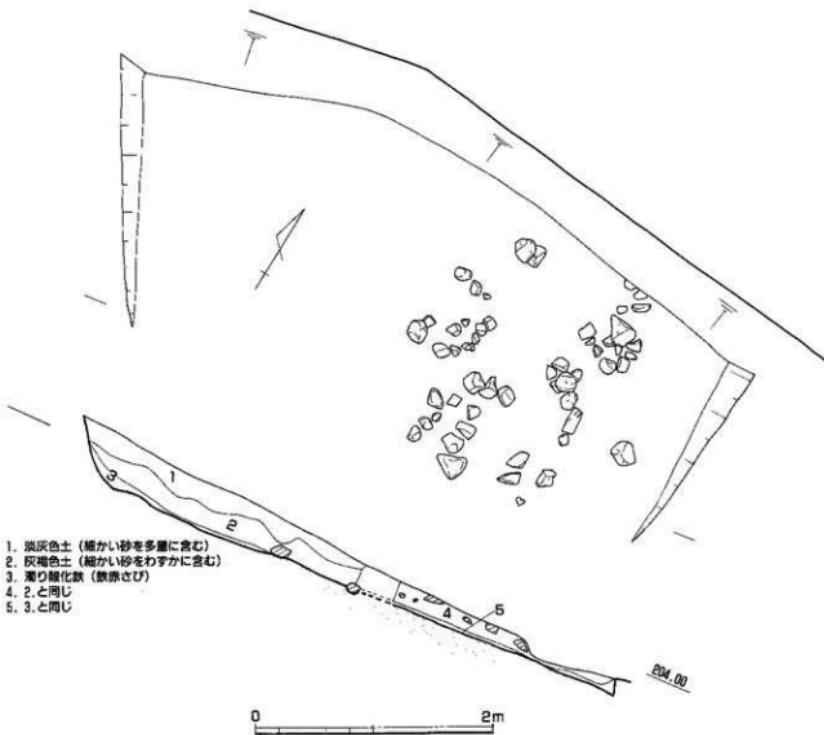
最下層に酸化した鉄分の層があることから、鉄分を多く含む水がある程度の期間流れたか、もしくは滯水していたのではないかと考えられる。



第30図 III区 調査後地形測量図 1:200



第31図 III区 土層図 1:40



第32図 SX-01 実測図 1:40

#### SX-01 出土遺物（第33図）

38はSX-01から出土した陶磁器である。

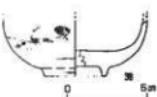
肥前系の陶胎染付で、茶碗の底部付近である。

高台内面にも釉がかかるもので、高台外面にも呉

須による絵がつけられている。時期については、

J区で出土している陶磁器類とほぼ同じく、18

世紀代のものと考えられる。



第33図 SX-01 出土遺物実測図 1:3

#### 4) IV区の調査

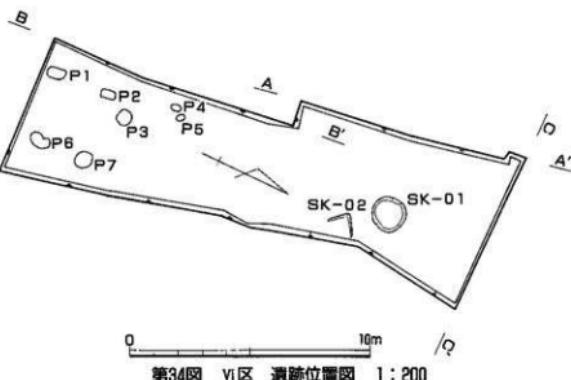
IV区は、今回の調査範囲の中で最も川下側に位置する。IV区の平坦面は、本来幅15mであったものを、造成して上段と下段の2面につくりかえたものであろう。調査区を設定したのはこのうちの下段の平坦面で、幅は約10mである。上段との段差部分は低い石垣で補強されており、標高は約204m、川との比高差は10mである。IV区北側（川下側）には、たたら製鉄に従事した人々の集落（山内）があり、その関連遺構の存在も想定された。

近世の遺構面は、表土に比較的近い位置で検出されることが想定されたため、慎重に掘り下げを行ったが、調査の結果、近世と考えられる遺構は、調査区北側で検出されたSK-01のみで、南側

を中心に時期不明のピットなどを確認した。

また、IV区においては榎原遺跡の調査で唯一、三瓶山を噴出源とする火山灰の堆積を確認した。西側壁面では、土層がほぼ水平に堆積している状況が認められる。基本的な層序は、搅乱などで乱れている箇所もあるが上位から、表土-黒色土層-第1ハイカ層-黒色土層-第2ハイカ層-黒色土層となっている（ハイカとは、この地域での火山灰の呼び名で、白色をした火山灰を指す）。この遺跡から神戸川に沿って約10km上流に位置する、飯石郡榎原町の板屋Ⅲ遺跡の調査から第1ハイカ層の降下時期は約3600年前、第2ハイカ層は約4700年前に降下したとされ、今回確認された3層の黒色土の時期も、上位のもの（第1黒色土層）が縄文時代晩期以降、中位のもの（第2黒色土層）が縄文時代前期末～後期、下位のもの（第3黒色土層）が縄文時代前期前半～末と考えられている。

この遺跡における火山灰の堆積は、層の境界部分が不明確で、土色がじんで中間的な色となるなどの点から、降下した火山灰がそのまま堆積したものではなく二次的な堆積と見られるが、堆積の時期にあまり時間差ではなく、板屋Ⅲ遺跡で得られた年代観と大きな齟齬はないことが指摘されている。また、北側壁面の土層を見ると、西側壁面とはほぼ同じ層序であるが、第2ハイカ層と第2黒色土の間に、厚さ最大1.5mをはかる砂層が存在し、この上面からほぼ水平な堆積となっている。この砂層は現在10m下を流れる神戸川の堆積作用で形成されたものであろう。



第34図 VI区 遺跡位置図 1:200

（北）

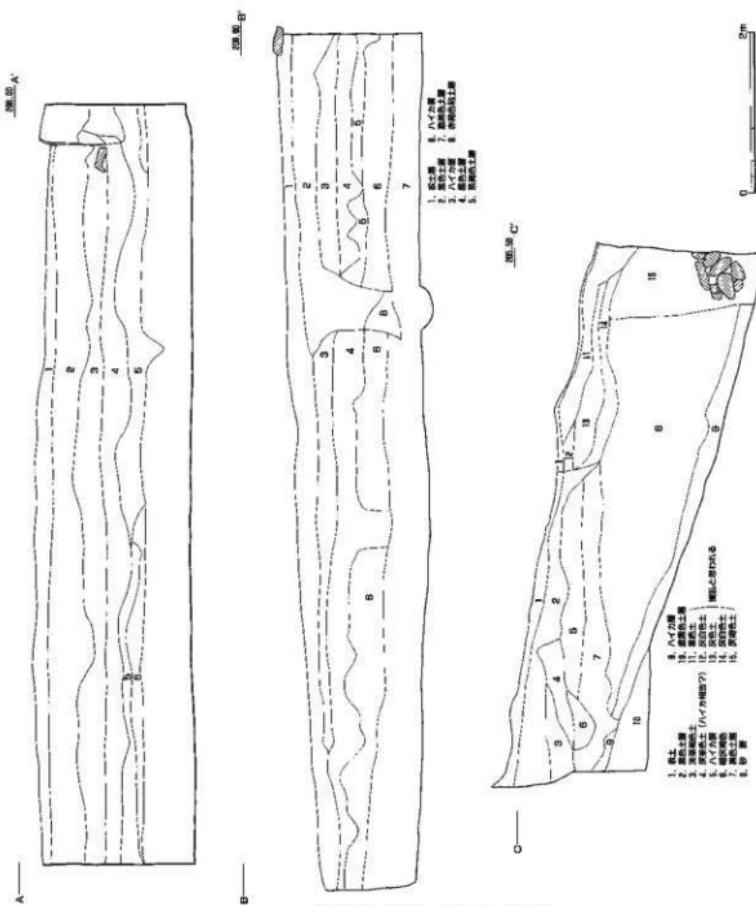
（東）

（西）

（南）

（北）

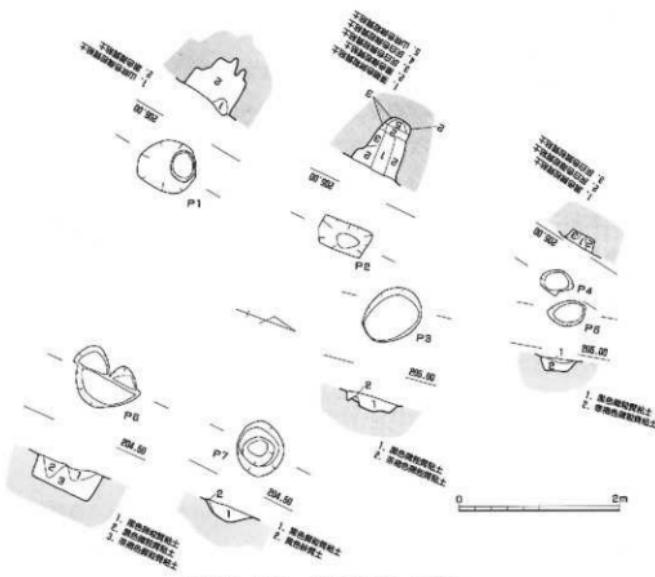
（東）



第35図 IV区 土層図 1:60

#### P 1～P 7 (第36図)

IV区南側で発見されたピット群で、検出面は第1ハイカ層の上面である。ピットの平面形は長方形のものや円形のものなどまちまちで、規模も直径40cm～70cm、深さ10cm～50cmと様々である。平面的な位置関係から、当初は掘立柱建物跡の存在も想定したが、ピット群の中で、P 2については柱穴の可能性があるものの、ピットの形状や底面のレベル差などから、建物の存在は考えにくい。



第36図 P1～P7実測図 1:60

ピットの時期は、第1ハイカ層上面が検出面であることから、縄文時代晩期以降のものと推定されるが、どのピットからも遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。

#### SK-01・02、P8・9（第37図）

SK-01及びその周辺の土坑・

ピットも、第1ハイカ層上面で検出  
されている。

SK-01は、直径140cm、深さ50  
cmの土坑である。壁面の一部及び床  
面には、山吹色～明灰白色の粘土が  
用いられている。遺物は、陶胎染付  
の底部付近が出土している。

SK-02は、SK-01の南西  
1mに隣接する。平面形は70cm×100  
cmの不整な4角形で、深さは30cmと  
浅いものである。遺物は出土してい  
ない。

P8、P9はSK-01・02の  
南西約2mに位置する。規模はP8



第37図 SK-01・02・P8・P9実測図 1:60

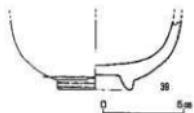
が長径60cm×短径30cmの楕円形で深さは30cm、P 9が長軸30cm×短軸20cmの卵形で、深さは20cmである。P 8には、中央に黒色土が認められることから柱穴であったことも考えられるが、周辺のピットは規模の小さいP 9のみであることから、建物の存在を想定することは難しい。

#### IV区出土遺物（第38・39図）

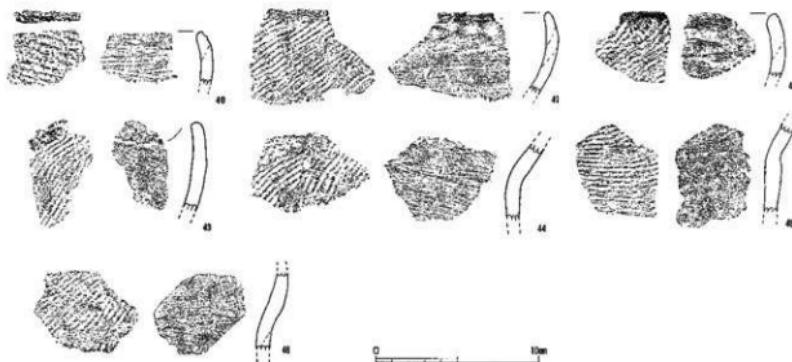
IV区からは、陶磁器の他、縄文土器が数点出土している。

39は、SK-01から出土した染付の碗である。胎土は陶胎とみられ、高台内にも釉がかかる。呉須により高台部に2条、体部の下位に1条の線が施される。詳細な時期は不明であるが、18世紀代のものではないかと思われる。

40～46は縄文土器である。いずれも中位の黒色土（第2黒色土）から出土している。40～43は口縁部で、43は波状口縁と見られる。器形はいずれも緩やかに内湾し、キャリバー状となる。外面は、43はRL、41～46はLRの縄文を外面に施す。40・41は巻き貝による条痕調整で、42・43がナデである。41の内面には指頭圧痕が残る。44～46は口縁部から胴部への屈曲部付近で、内面に稜線をもたない緩やかな屈曲である。外面はLRの縄文、内面は巻き貝条痕を施すが、46は板目条痕である。器形や文様の特徴から、縄文時代中期の船元I式土器G類に相当すると考えられよう。



第38図 IV区 出土遺物(1) 1:3



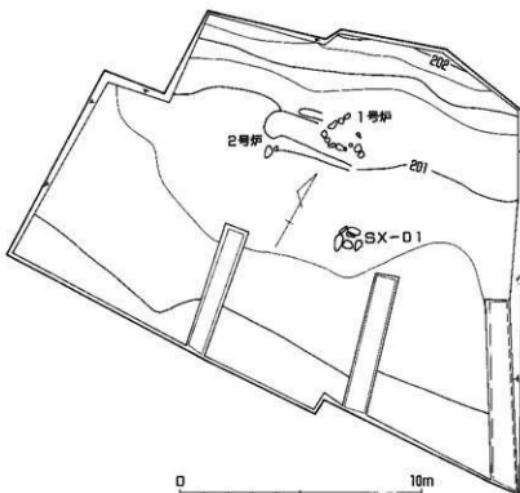
第39図 IV区 出土遺物実測図(2) 1:3

## 5) V区の調査

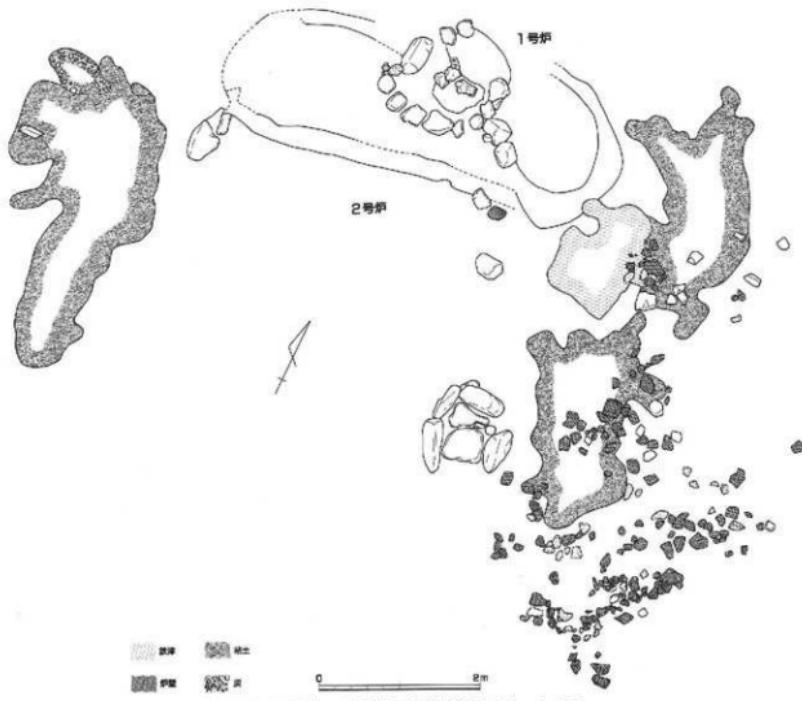
今回の調査区中では最も西(川上)側に位置し、標高199~203mの緩やかな斜面である。川との比高差はおよそ5mである。この調査区で確認された遺構は、豊形炉に類似した形態を呈する1号炉、箱形炉の地下構造部分と考えられる2号炉、偏平な石を組みあわせてつくられたSX-01である。1号炉と2号炉は切り合い関係にあり、2号炉の一部を切って1号炉が構築されている。

V区で検出された遺構は、いずれも調査区の中央より北側に存在し、1号炉・2号炉の付近が緩斜面の北端にあたり、ここから傾斜が急になり、上段の平坦面とを画している。また、この付近より北(山)側では砂層が露出しており、南(川)側に向かうにつれて黒色土の堆積が厚くなっている。

1号炉・2号炉の南東と南西には、粘土や鉄滓の面が存在し、2号炉の両方の小口付近から南側(川の方向)に面が広がっている(第41図)。東側は長さ約6m、幅2mの範囲で粘土面と細かい鉄滓片の面となっており、このうち鉄滓片の面は、1号炉小口付近の1m×1.5mの範囲である。このほかに、粘土面からやや南側にかけて、20~30cm人の鉄滓、瓦壁、碟が多数検出されている。量的には炉壁が圧倒的に多く、送風孔の痕跡を残すものも認められた。鉄滓や碟はごくわずかである。西側でも同様に粘土面が認められるが、鉄滓の面は存在せず、一部に粉状の炭が面をなしている。範囲は長さ4m、幅2mで東側よりもやや狭い。また、東側で見



第40図 V区 調査後地形測量図 1:200



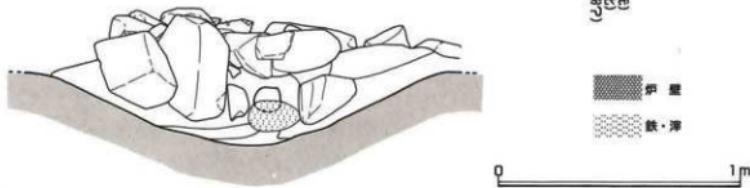
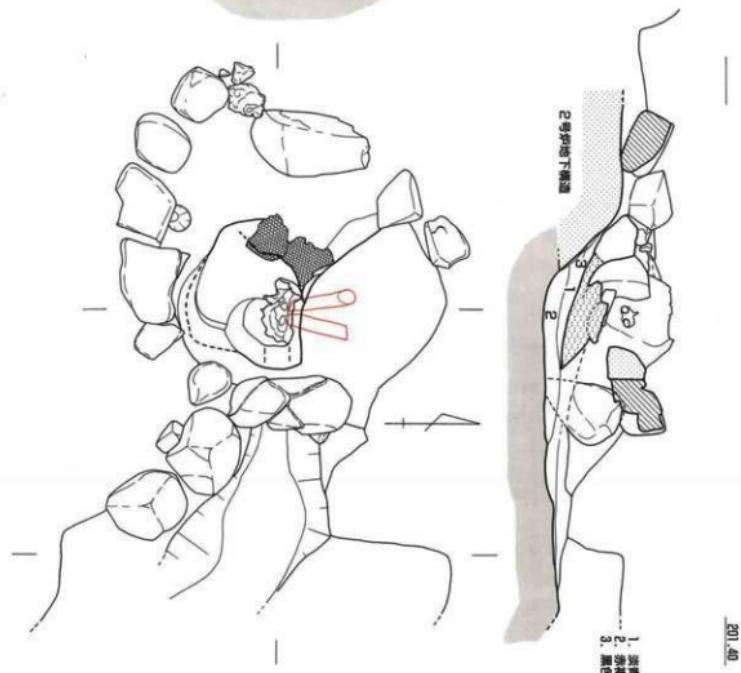
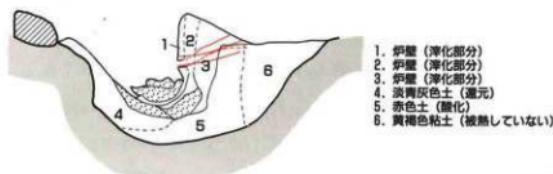
第41図 1号炉・2号炉周辺遺構位置図 1:60

られたような鉄滓・炉壁などの大きな破片は検出されなかった。

この粘土、鉄滓及び炭の面は主として2号炉にともなうものであろう。排出された鉄滓や鉄を取り出すときに炉体を壊した際の炉壁などが残存したもので、製錬時に生成した鉄滓の廃棄や鉄の取り出し作業にともなって形成された作業面と考えられる。1号炉が2号炉の東小口部分を切って構築されていることから、この面や炉壁、鉄滓などの中には1号炉にともなうものが混在している可能性が高いが、それぞれの面がどちらの炉に伴うものかを特定することはできなかった。

#### 1号炉（第42～45図）

1号炉は、先述したようにV区の緩斜面北端に位置し、2号炉北東側を切って構築されている。1号炉ほかの遺構がこの緩斜面が、人工的に造成されたものかどうかは確認できなかった。炉の形状は、構造的にはいわゆる堅形炉に類似し、炉の東側に排済用と見られるトンネルをもっている。また炉内には鉄塊系遺物を含む生成物が残存していた。



第42図 1号炉実測図(1) 1:20

炉の構築にあたっては、南側から東側にかけては2号炉の地下構造部分に加工を施して利用し、北側とトンネル部分は新たに粘土を積み上げて炉体の一部としている。平面的には、東西80~100cm、南北50~80cmの範囲を石と鉄滓、粘土で区画している。南側から西側にかけての石と鉄滓は、2号炉のカーボンベッドと見られる黒色土に埋め込まれており、単に区画をするためのものと見られる。いずれも被熱している様子はなく、操業には直接関係がなかったと思われる。1号炉に伴う被熱した面は、この範囲のうち東側の50cm×40cmの範囲であり、操業当初の炉の規模を示しているものと思われる。検出時には、北西側の炉壁として、炉壁を再利用して置いていているのが認められ、さらに規模を縮小しているため最終操業時の炉の規模は、最大でも40cm×40cmで、炉内生成物の残存状況などから考えるとさらに小規模であった可能性もある。

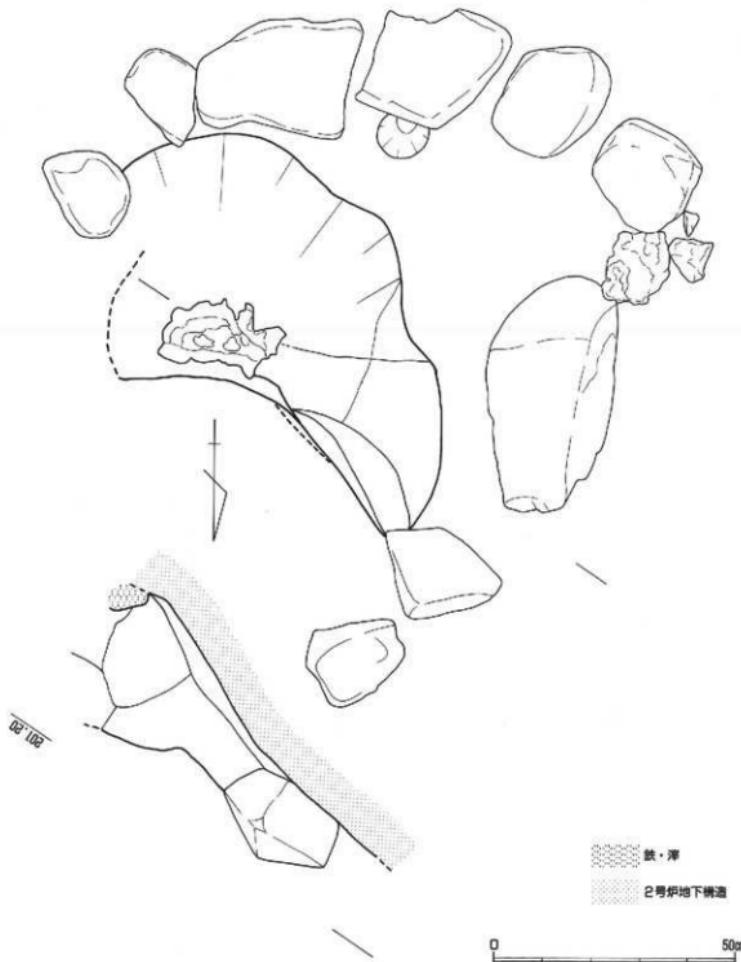
炉の内面は、北西にある再利用された炉壁から東側の排滓用トンネル部分までが滓化し、かなり強い磁着反応もあった。が底は平坦ではなく、排滓部へ向けて-10°の傾斜をもっている。炉の深さは、西側で最も浅く30cm、トンネル部付近で45cmとなり、排滓部へ向けて傾斜している。なお排滓部先端ではさらに5cm程度低くなる。東西断面の土層を見ると、2号炉の地下構造を一旦基盤層まで含めて斜めにカットし、その上に傾斜が緩やかになるよう粘土を貼りなおして炉を構築していることがわかる。南北方向の断面では、北側のが壁がほぼ垂直に立ち上がるのに比べ、南側の炉壁は40°~50°の緩やかな傾斜を示している。また、炉底に滓と炉壁が互層状に存在し、滓同士の切り合いも見られることから最低3回の操業を行っていることがわかる。

送風孔は北側のが壁に2カ所が存在する。長さ30cm、内径3~5cmの楕円形に近い断面を呈する細い送風孔が直接炉壁につくられ、炉内側が炉外側より5cm~10cm低くなるように-20°の傾斜をもって設けられている。また、平面的には、炉内へ向けて送風孔の間隔が狭くなるように配置され、炉外側での間隔は15cm、炉内側5cmで、送風孔からの風を炉の中中央付近に集中させる形となる。開口する高さは、どちらも北側壁の頂部から20cm、炉底から25cmの位置であった。この送風孔が北側のが壁の構成と併行して設けられたものか、炉壁構成後に穿孔されたものは確認できなかった。

排滓部は、全体の長さ約100cmで、このうちトンネル部は長さ45cm、幅10cm、高さ10~20cm、それに続く溝状の部分は、最大幅50cm、深さは10cmを下回るごく浅いものである。トンネル部は、溝の両側に石を置いて、長さ50cm、幅20cmの石をそれに架構して基礎とし、粘土で炉内側を被覆している。これに続く浅い溝状の部分の南側には石を置いた部分が認められるが、北側では存在しない。排滓部の底面は黄色の粘土が敷かれており、強く被熱した形跡があり硬くしまっているが、東にいくにつれて薄くなり、溝も消滅する。なお、排滓部溝のさらに前方（東側）には、長径1.5m、短径1.0m、深さ0.2mの、鉄滓片がわずかに混入した落ち込みが存在し

た。これは1号炉から排出されたものと推定されたため、土ごとこれを採取し、分析を進めている。

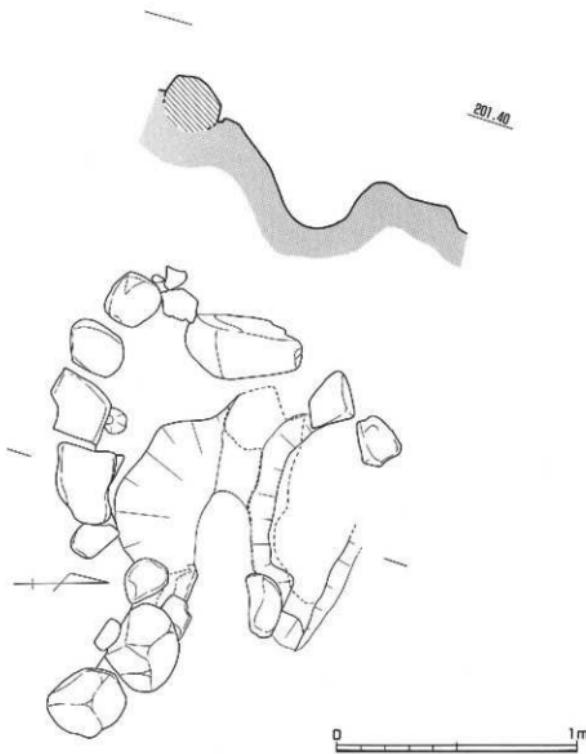
1号炉北西の炉壁を除去すると、北側の炉壁はやや西側へ方向をかえ、床面の高さもそれにつれ徐々に高くなっていくが、炉の中心部に近い内側壁面がやや外湾して立ち上がっている。（第43図）。これは、1号炉の操業開始後の比較的早い時期に使用された部分と考えられ、性格について



第43図 送風施設跡実測図 1:10

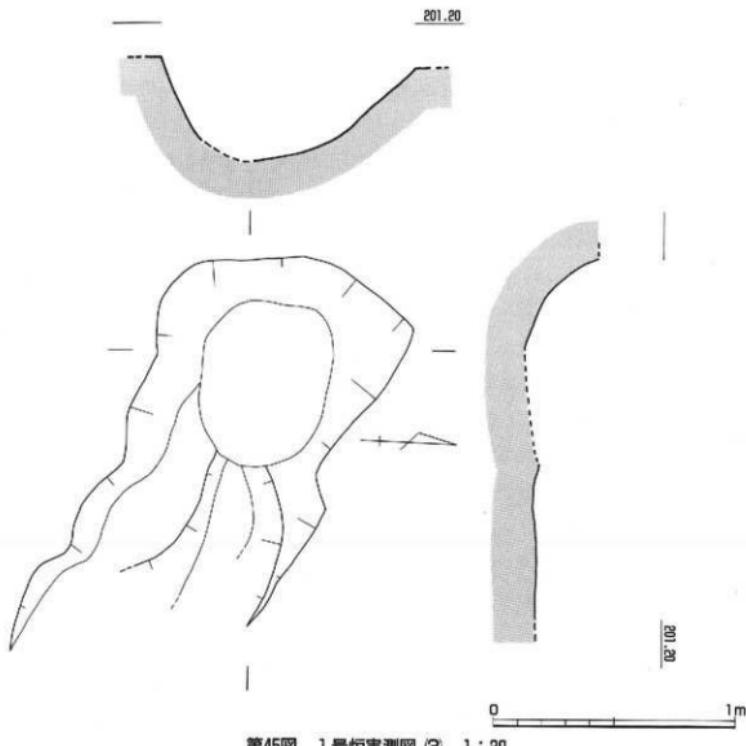
は、1号炉の形状が堅形炉に類似する点から考えると、送風施設（送風管）が設置されていた場所である可能性をもつ。図版26（上）は参考として飯石郡頓原町の板屋Ⅲ遺跡から出土した堅形炉の羽口を設置してみたものである。檀原遺跡からは、板屋Ⅲ遺跡出土例のような羽口は出土していないため、あくまでも推測の域を出ないが、このような送風管が設置されたことも1つの可能性として考えることができよう。

第44図は炉内生成物を除去し、改築された部分を取り除いた状態である。炉の横断面形は、最終操業時ほど明瞭ではないものの、北側壁が垂直に近く、南側壁は45°程度の緩やかな傾斜を示す。また炉底の西側には長さ50cm、幅15cm～20cmの溝状の部分が存在する。先ほど送風施設跡と推定したものより時期的に先行し、方向もほぼ炉の真後ろに延びるものである。この溝状部分もやはり送風施設の跡の可能性があり、1号炉の最も初期の段階における形態を示すものと考えられる。



第44図 1号炉実測図 ② 1:20

1号炉の掘方は、第45図に示したとおりである。規模は東西1.5m、南北1mで、深さは0.4mである。西側の65cm×50cmが炉になる部分で、東側が排滓部になるよう掘方の段階である程度計画されていたものと思われる。



第45図 1号炉実測図(3) 1:20

## 2号炉（第46図・47図）

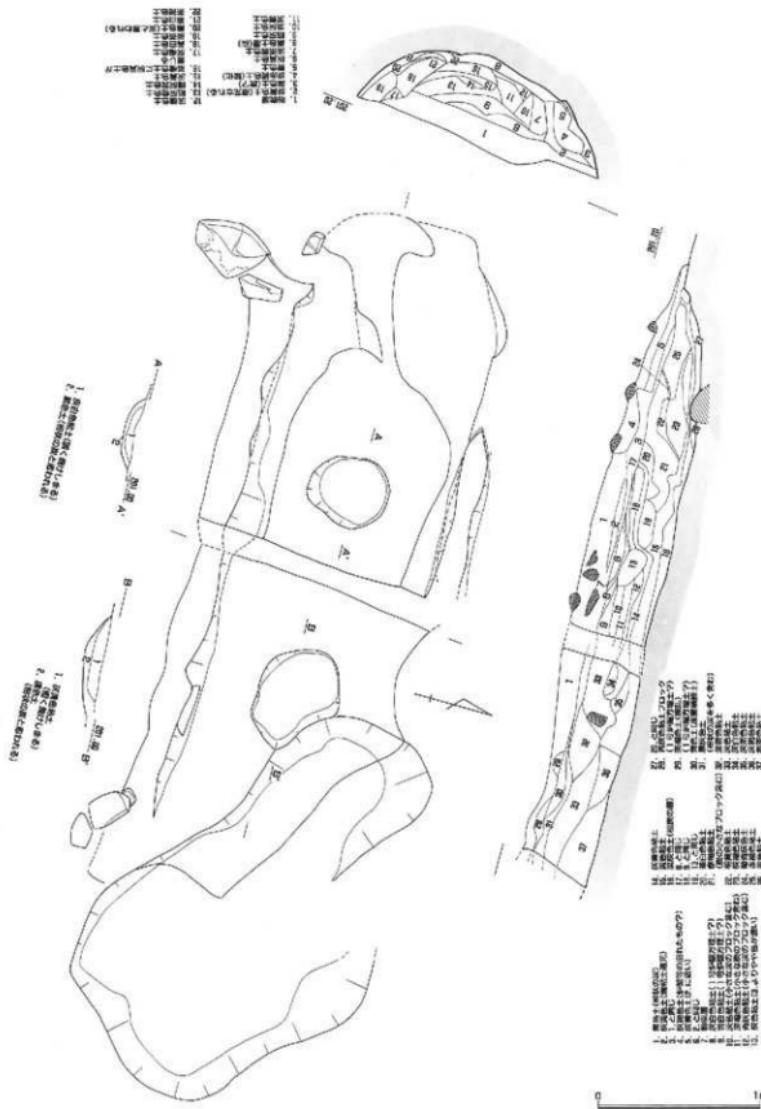
2号炉は、1号炉と同じくV区緩斜面北端に位置し、1号炉に先行して構築された箱形炉であるが、炉は既に無く検出されたのはその地下構造部分と考えられる。長軸をほぼ東西方向にとり、等高線と平行するように置かれている。1号炉により東側の一部を破壊されているため、正確な規模は不明であるが、現存長4.5m、幅1.7mの小口部分が半円形になる長方形を呈するものである。南端沿いには幅20~30cm、高さ10~20cmの土手状の部分が長さ3.5mにわたって存在し、北端においても残存状況は悪いものの、土手状の部分が認められ、横断面形が上に聞く「コ」の字形を呈する構造となる。この土手に挟まれたくぼみ部分には粉状の木炭と考えられる黒色土がつまっている、この上に製鉄炉を築成したのであろう。また、南端の土手状部分の東西両端付近には20~40cm大の石が置かれており、土手状部分もやや南側へ屈曲している。

地下構造の最上層に存在する黒色土を除去すると、薄黄色を呈する硬く締まった面が検出され、そのうち中央より西側で青灰色を呈する部分が確認された。長さ1.3m、幅0.9mの範囲と、それに付属する長さ0.9m、幅0.2mの範囲が青灰色を呈する。また、この面では、東側と西側の2カ所で浅い皿状の落ち込みが見つかっている。東側のものは平面が60cm×50cmの不整四角形で、深さは10cmである。西側のものは50cm×40cm、深さは5cm程度で東側のものよりやや小さい。落ち込みには底面沿いに薄く黒色土が存在し、その上層に周囲と同じ高さまで粘土が充填されていた。青灰色の面は、この部分が還元状態にあったことを示すもので、製鉄炉の範囲、排滓や鉄を取り出す作業を行う際の溝の位置などをある程度反映しているのではないかと思われる。同様に皿状の落ち込み部分も、製鉄炉の構造を知る手がかりの一つとなるのものと思われる。

地下構造の土層を見ると、横断面・縱断面とも複雑な土層の切り合が見られる。ここから推定される地下構造の基本的な築成順序は、1. 長さ3.5m以上、幅1.5m、深さ0.4mの底面が平坦な掘方を掘る。2. 掘方の中に、厚さ5~10cmに粉状の炭を敷き、長辺の両端に土手状の粘土部分を積み上げる。3. 中央部分を焼土などを敷きつめる。であろう。ただ、土手状部分についても何層かに分けられたため、何段階かに分けて構築されたか、作り替えが行われたことが想定される。なお、炭層のさらに下層には、わずかながら黄色系の粘土が認められる部分があり、これが最も初期の段階の地下構造の痕跡である可能性がある。

## S X - 0 1 (第48図)

S X - 0 1 は、V区のほぼ中央に位置し、1号炉・2号炉の南東約3mに存在する石組遺構である。中央付近に黒色土を約10cm掘りくぼめて厚さ20cm前後の比較的偏平な石を据え、その周囲にも偏平な石を主に使用し、横向きに立て並べて南西側を除く方向を開いている。周囲に置かれた石は、掘方を設けず、黒色土の上面に置かれただけである。いずれの石も加工した痕跡はなく、自然石を選択して使用している。先述した2号炉東側粘土面の先端付近に隣接しているが、それとの切り合の関係は認められない。また、これにともなう遺物も出土しておらず、

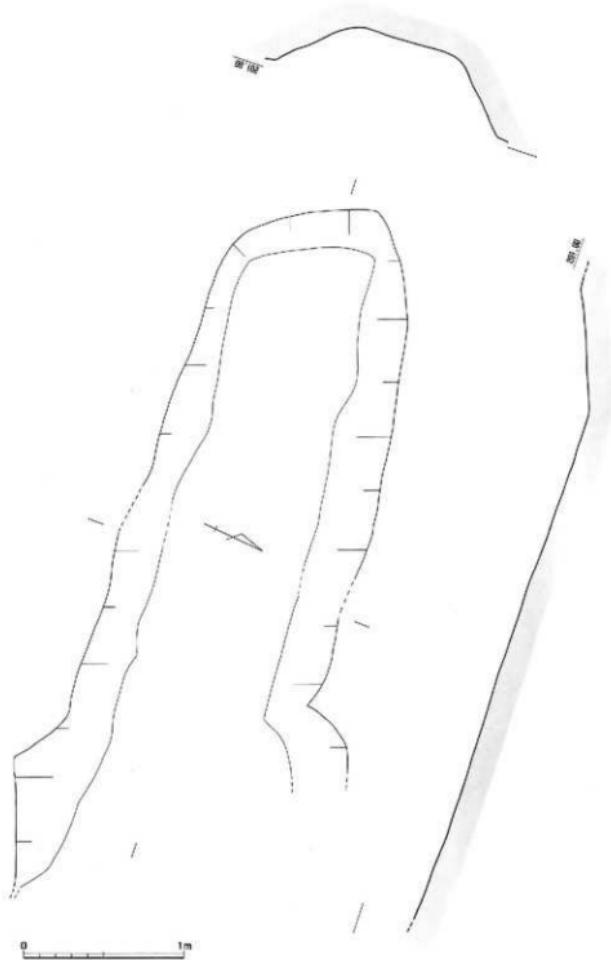


第46図 2号炉実測図(1) 1:30

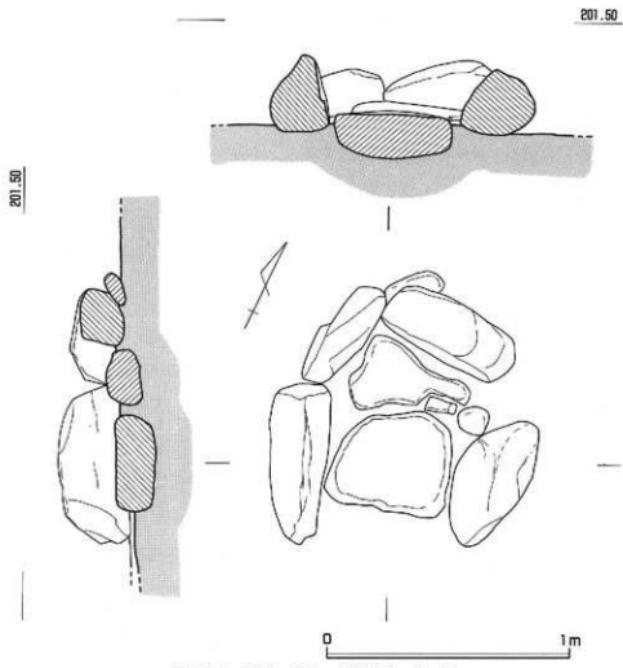
時期、性格ともに不明である。

V区出土遺物（第49図）

V区から出土した遺物で、遺構に伴うもののみ図示した。47はキセルの吸い口である。



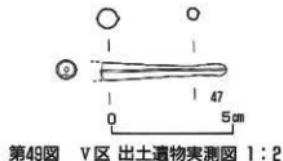
第47図 2号炉実測図(2) 1:30



第48図 SX-01 実測図 1:20

2号炉西（川上）側粘土面上で発見された。現存長5.1cm、外径は最大で0.8cmで吸い口には0.2cmの孔を設けている。

この他に擾乱層中からは、磁胎や陶胎の染付がわずかに出土している。



第49図 V区 出土遺物実測図 1:2

### 第3節 小 結

榎原遺跡では、製鉄炉、鍛冶炉など合計5基の炉を検出したほか、排滓場、池状造構など製鉄関連造構を比較的の良好な状態で検出することができた。製鉄関連遺物の分析は現在進行中であるため、遺跡の総合的な評価は後日刊行予定の報告書にゆずることとし、造構の形態からみた特色を中心に述べて、小結とする。

#### (1) I区1号炉

I区1号炉が、近世のいわゆる高殿たらであることは明らかである。「田儀櫻井家文書」に名前が見える「榎原鉢」が、I区1号炉を指している可能性も多い。なお、この文書には、榎原鉢を移転し、1784(天明4)年に佐津山口村(現在の大田市山口町佐津山口)日の平鉢で操業を行ったという記載もあり、発掘及び文書調査の結果、これに比定されるたらも確認されている。造構の時期については、熱残留磁気法では $1840 \pm 30$ 年、放射性炭素では $100 \pm 90$ BPの値を得ているが、出土した陶磁器は概ね18世紀代のもので、19世紀下るものはない。自然科学的な年代測定値とは矛盾するが、文献の年代観との間には大きな差ではなく、1号炉の操業は18世紀後半に行われたものと考えられる。

1号炉の構造的な特色は跡坪にあり、1. 跡坪にトンネル状の施設を設けている点、2. 跡坪が小舟の開口部ごとに独立し、開口部正面から進入する形態をとる点が挙げられる。特に、跡坪内のトンネル状施設については、おそらく初見であろう。小舟焼成の際に煙突としての役割を果たしたものと考えたが、やや小規模であるようにも思われる。今後の調査例の増加を待ちたい。また、大田市日の平鉢と構造を比較すると、I区1号炉と日の平鉢の構造は、ともに田儀櫻井家による経営と考えられるにも関わらず、多くの相違点を指摘することができる。日の平たらの場合、地下構造の全容が明らかになっているわけではないが、掘方長軸がほぼ南北方向をとる、小舟開口部が石で閉塞される、跡坪はそれぞれ1つにまとめられ、跡坪への進入は長軸に直交する方向から行う、といった構造である。同じ田儀櫻井家が経営したと思われるたらの構造的な違いが、何に起因するものなのかはいまだ不明と言わざるを得ない。

また、本床と小舟の位置関係から地下構造を検討すると、本床の床面は小舟に対して約50cm高い位置にあり、小舟内面の大井部とほぼ一致する。

近世高殿たらの地下構造については、本床と小舟の位置関係から、時期的に一定の傾向があるとされている。それによると、時期的には、比較的単純な地下構造をもつ17世紀末頃の初源期と、複雑化する18世紀後半以降と大きく分かれ、地下構造が複雑化する18世紀後半には、地域的には、本床底と小舟底が同一面につくられる「山陰型」と、本床底面が小舟底面に対して非常に高い「山陰型」が出現し、「山陰型」はさらに、「山陰型-出雲流」と、下小舟、脇小舟など層複雑な地下構造を持つ「山陰型-石見流」の2つにわかれていくというものである。

先の分類に従えば、I区1号炉は伏樋はもたないものの、敷石や配石面の存在が認められ、本

床床面が小舟床面よりかなり高いことから、「山陰型一出雲流」ということになる。本遺跡の位置する三瓶山周辺地域は、先の3つの形態が混在するようである。例えば佐田町朝日たたらは、下小舟など複雑な床釣り下部をもつこと、大田市久谷たたらは、18世紀中頃の築成で、本床と小舟床面が同一面上であることから、それぞれ「石見流」、「山陽型」と考えることもできる。このように3つの形態が併存する状況は、技術者の系統や、目的とする鉄の種類（銑鉄か鋼か）といった観点からのアプローチの必要性を改めて提起している。

なお、この問題に関して、山陽側は銑鉄生産中心、山陰側（特に出雲地方）は鋼生産中心とする従来の一般的な見方に対して、出雲地方も生産の主力は銑鉄であったとする論考もある。今後は地下構造のみならず、従来あまり注目されることのなかった鉄滓などの製鉄関連遺物についての分析・検討も進めて、遺跡に対する総合的な評価をしていくことが求められる。

#### (2) I 区 SX-02

非常に小形の鍛冶炉状の遺構であり、I区1号炉の地下構造を利用してつくられたものであろう。製鉄関連遺物の回収ができなかつたため、小規模な製鉄炉であるのか、鍛冶炉であるのか判断はできない。完形に近い状態とみられるが、上面がわずかに削平されており、本来はもう少し深い丸になるようである。

#### (3) II区1号炉

炉底部が残存しており、地下にカーボンベッドなどの構造はもたないもので、近世の大鍛冶炉とされているものとはやや形態を異にする。遺物もなく、熱残留磁気法で年代測定も行ったが、データにはらつきがあり時期は推定できなかった。

#### (4) V区1号炉

板屋Ⅲ遺跡の出土例とともに、堅形炉の系譜をひく構造をとり、中国地方では極めて珍しい検出例である。炉の検出状態も良好で、内部には鉄塊系遺物を含む生成物が遺存していた。鳥取県大河原製鉄遺跡の大鍛冶炉と推定された遺構がこれに近い形態をとる。この炉の構造的特徴は、堅形炉系の技術と、中国地方に多くみられる箱形炉系の技術が混在している点である。地下構造が単純な小規模な炉で、前方に排滓部をもつ点は堅形炉に類似するが、独立した送風管（羽口）をもたず、炉壁に設けた孔を送風孔とする点は、箱形炉に類似する。また、初期の操業では送風についても後方から行ったと見られ、堅形炉により近い様相を呈していたと考えられることも興味深い。遺構の時期については、遺構にともなう遺物はないが、熱残留磁気による年代測定で、1350±15という値を得ている。

#### (5) V区2号炉

中国地方では検出例の多い箱形炉の地下構造で、いわゆる小舟状遺構をもたず、本床状遺構のみからなる。地下には炭や焼土を敷き固めるだけの構造は、島根県塙穂町中ノ原遺跡検出例に類似し、規模的にもほぼ等しい。時期については、熱残留磁気による年代測定値が1340±25、放射

性炭素による年代測定値は $320 \pm 90$ BPとかなり異なる値を示す。中ノ原遺跡の場合も、年代測定値にばらつきがあり、報告では「古代末～中世と考えることも可能」として詳細な時期を明示していない。この遺構についても、時期の判断は困難であるが先に述べた構造的特徴もふまえて、中世の製鉄炉と考えておきたい。

#### (6) II区SX-02・SX-03

近世の高殿たたらの、鉄池に相当するものであろう。2つの遺構の切り合い関係はつかむことができなかった。堆積物は非常に鉄分が多く、製品の鉄そのものも含まれているようである。分析の結果に注目したい。

#### (7) V区SX-01

島根県大東町段たたら跡B III遺構がこれに類似する例である。段たたら跡検出例も、偏平な白然石を平面「コ」字形に立て組んだもので、周辺には古代～中世の製鉄炉が存在する。床面は被熱しない粘土を貼り、床面に石を敷くSX-01とは異なる。SX-01も段たたら跡でも遺構に伴う遺物はなく、性格や時期の推定は困難であるが、火を受けた痕跡が認められないことから、製鉄・精錬の工程には直接関係しないものと見られる。段たたら跡のものは約10m離れて存在する近世高殿たたらの祭祀に関係するとしており、SX-01も製鉄・精錬に関わる祭祀遺構の可能性を考えられるが、位置関係からV区1号炉・2号炉操業時の祭祀に関わることも推定される。

#### 註

- 1) この文書については、次の報告書に掲載されているものを参考にした。  
大田市教育委員会「日の平たたら跡発掘調査報告－近世高殿たたらとたたら文書－」大田市埋蔵文化財調査報告 6 1  
987年3月
- 2) 宮本長一郎氏（東京国立文化財研究所）のご教示による
- 3) I区排水溝とII区出土の陶器について、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）にご教示いただいた
- 4) 角田惣平「板屋III遺跡」島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報』IV 1996年3月
- 5) 松井豊司氏（島根県地学会副会長）のご教示による
- 6) 藤原忠彦・間壁義子「黒木日暮」『倉敷考古館研究集報』7 1971
- 7) 角田惣平「板屋III遺跡」『島根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター年報』III 島根県教育委員会 1995年3月
- 8) 註1に同じ
- 9) 河瀬正利「中国地方における砂鉄製錬法の成立と展開－炉床構造を中心として－」『瀬戸内海地域史研究』第3輯  
1991年8月
- 10) 島根県佐田町教育委員会「朝日抄」 1983年3月
- 11) 大山市教育委員会「久谷たたら跡」大田市埋蔵文化財調査報告書11 1990年3月
- 12) 高橋一郎「奥出雲の近世企業たたら発達小史－産業考古学的観点から－」『日本の産業遺産－産業考古学的研究』  
玉川大学出版部 1986年
- 13) 註7に同じ
- 14) 穴澤義功氏（たたら研究会委員）のご教示による 関金町教育委員会「大河原製鉄遺跡発掘調査報告書」1985年
- 15) 島根県教育委員会「又ヶ平遺跡・中ノ原遺跡・タカラ山第1・第2遺跡」1993年3月
- 16) 島根県大東町教育委員会「寺谷尻古墳・段たたら跡」1996年1月

## 第4章 殿淵山毛宅前鉄跡

### 第1節 調査の概要

殿淵山毛宅前鉄跡は、飯石郡頓原町大字角井に所在し、中国山地に源を発し北流する神戸川の中流域に存在する。遺跡周辺の地形は神戸川を谷底とする急斜面で、その一部を削平してつくりだした平坦面上に立地する。この平坦面は、標高約232m、長さ40m、幅15mの細長いもので、川との比高差は約13mであるが、近年まで宅地として利用されていたため、往時の状況をとどめている可能性もある。厚く堆積した擾乱土を除去した後、被熱した粘土面を砂層直上において確認し、製鉄炉の地下構造の一部と推定した。この粘土面の範囲は南北約5m、東西約3mで、製鉄炉の地下構造の最下部と考えられ、約10cm掘り下げると基盤である砂層に到達した。砂層上面では、炉壁や礫を利用した乾燥・防湿のためとみられるトンネル状施設を確認した。以下、検出順に上位から述べる。

### 第2節 調査の結果

#### 遺構検出面（第51図）

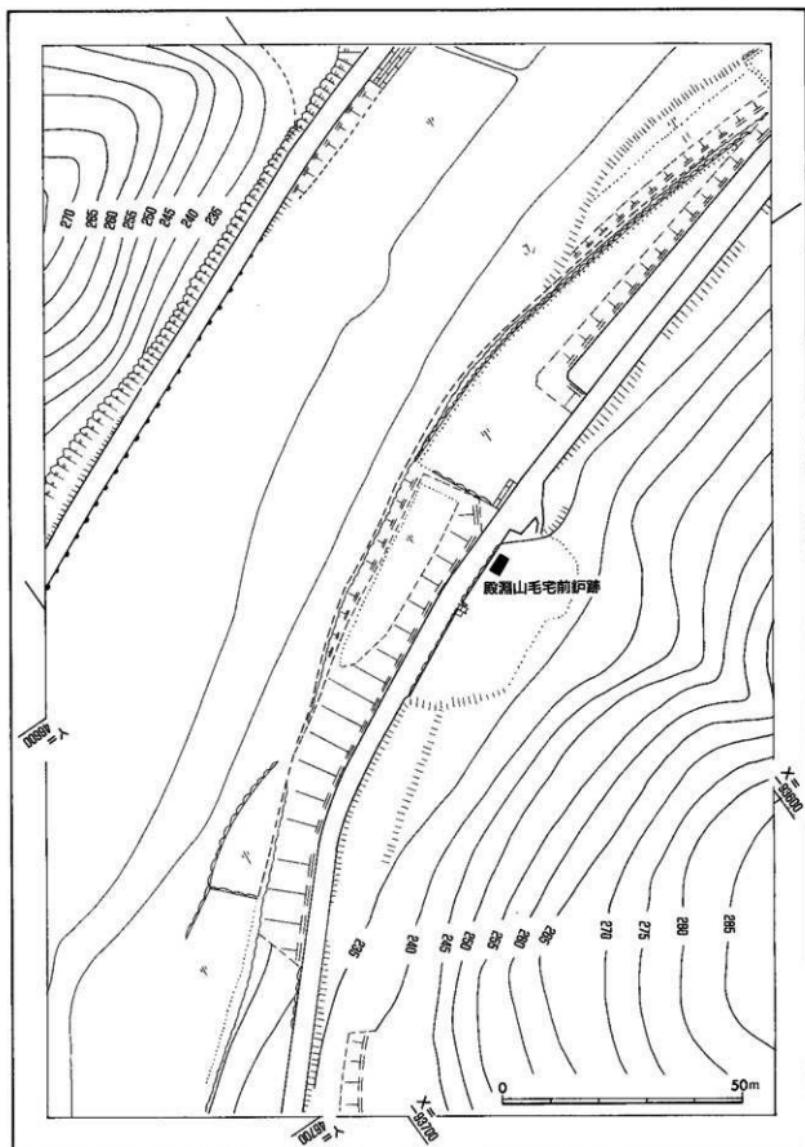
遺構を検出したレベルは標高232mで、長軸方向3.5~4.5m、短軸方向1.4~3.0mの範囲で熱を受けた粘土面を検出した。北側、東側、南側各辺のラインは擾乱を受けてかなり乱れていたが、西側については、ほぼ南北方向を示す乱れの少ないラインであったため、遺構の掘方を反映しているものと思われた。また、この面では他の部分と比較して、特に硬化した灰白色土の部分がベルト状に存在した。

この2本の灰白色土のベルトは、わずかに蛇行しながら0.8~1.2mの間隔で並んでいる。一部擾乱を受けるなどして不明確な部分もあるものの、西側が長さ3.3m、幅0.4~0.6m、東側は長さ3.0m、幅0.2~0.6mでいずれも長軸をほぼ南北方向にとる。厚さは2~3cmでごく薄いものであった。

#### トンネル状施設・石組施設（第52図）

熱を受けた粘土面を除去したのち、拳大~人頭大の礫または炉壁を用いて構築されたトンネル状施設を検出した。位置は遺構の南端沿いと北端沿い、さらにこれらをつなぐように、中央で交差するものがある。

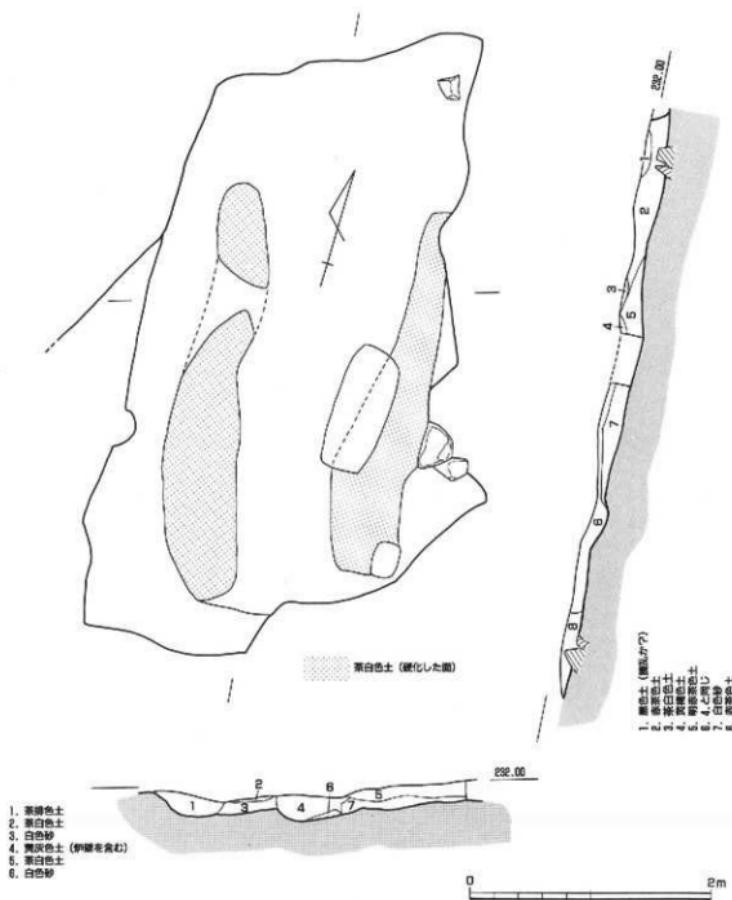
北端沿いのものは現存長2.0mで、東側へさらに延びる可能性がある。西側は、後述する石組施設へ接続している。南端沿いのものは同1.8mで、東側へは伸びていなかったと考えられるが、石組や被覆粘土の状態からは、さらに南西方向へ延長していると推定される。掘方ラインの延長線付近までは施設の痕跡が認められ、後述する北西の石組施設と同様に掘方の外へ続いている可能性をもつ。この2本はほとんどが礫と粘土で構築され、炉壁はごくわずかに使用されるだけである。基盤層と考えられる砂層を幅30~40cm、深さ約10cmの溝状に掘りこみ、側面と天井部を礫で補強



第50図 殿淵山毛宅前鉛跡位置図 1:1000

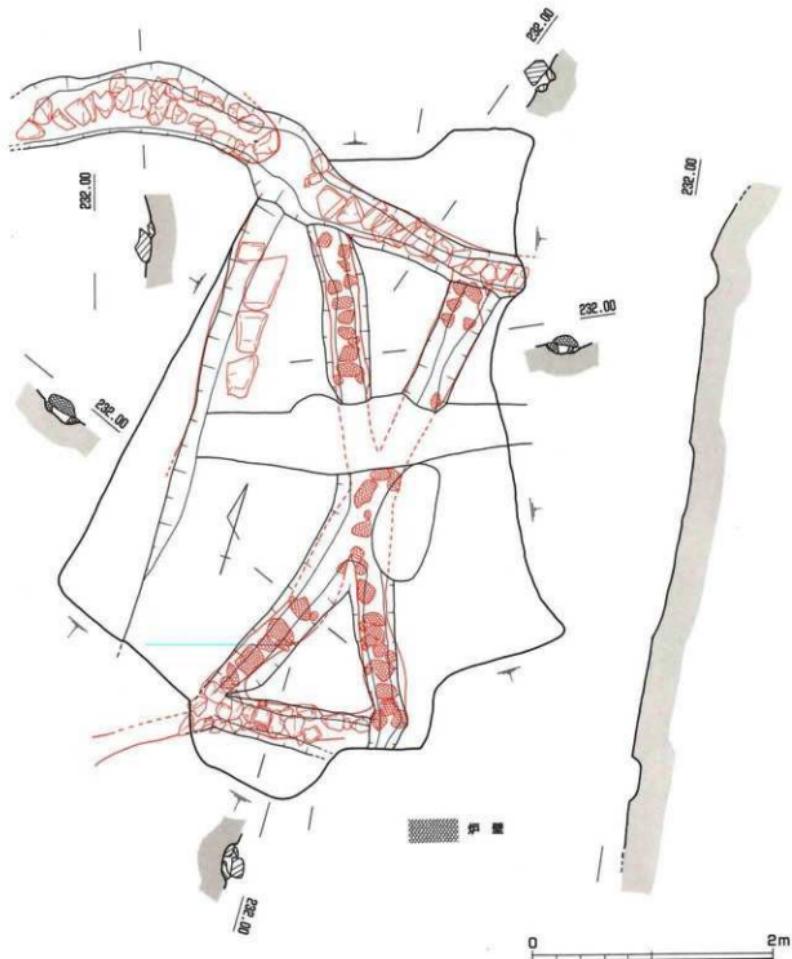
した後に粘土で被覆する構造である。溝の底面に石などは敷かず、砂のままである。

中央で交差するものは北西—南東方向のものが現存長4.2m、北東—南西方向のものが同4.0mである。トンネルの構造そのものは前述の2本と同様であるが、礫は全く用いられず、代わりに炉壁片が使用される。北西—南東方向のものについては、南側へ延長していた可能性がある。中央の交差している部分の状況については、土層観察用トレーンチの位置に重なったためその構造は明



第51図 地下構造実測図(1) 1:40

らかではないものの、掘方の状況から見ると、4方向いずれにもつながっていたようである。一方、中央の2本と北端・南端沿いの施設とは掘方の平面図で見る限りつながっているように見えるが、北東の接続部では明らかに閉塞されている様子が観察された。またそれぞれの底面レベルを見ると全体に南東から北西へむけて下がっている。



第52図 地下構造実測図(2) 1:40

石組施設は造構の北西隅に存在し、北端沿いのトンネル状施設に接続して緩やかに弧を描きながら南西方向へ延びる。構造はこれに接続する北端沿いの施設と同様で、一連の施設と考えることもできる。石と粘土でトンネル状の構造をつくり、長さは約2.5mで、先端部の底面のレベルは、基部の底面レベルより15cm下がる。掘り込む溝は幅40~50cmと掘方内のものよりやや広いが、深さは約10cmでほとんど差はない。基部付近では明らかにトンネル状につくることを意識しているが、先端部に向かうにつれて簡略化され、最後は砂層上面に石を積み重ねただけとなる。隣接する道路のため、先端付近は破壊されている可能性もあるが、簡略化された構造から考えると、破壊があったとしてもわずかなもので、ほぼ構築時の状況をとどめているものと見られる。

その他には、西側に残る掘方下端ライン沿いに4個のやや大形の石が存在するのが確認された。最も北側のものはトンネル状施設に用いられているものとほぼ同じ大きさであるが、他の3個は長さ40~50cm、幅約20cm、高さは15~25cmで掘方の下端に沿って並べられている。この1個以外に石は発見されていない。

### 第3節 小 結

この造構は、冒頭に記したように、製鉄造構の地下構造の最下部に相当することは間違いないであろう。掘方規模の推定は、ほとんどの辺が削り取られており、またトンネル状施設が調査範囲外へ延長すると見られることから容易ではないが、北端・南端沿いの施設が掘方下端沿いに設けられたもので、交差する2本の施設が掘方下端のほぼ中央で交差していると仮定すると、掘方下端の規模は長軸4.5m以上、短軸3.0m以上となる。

砂層直上でみられたトンネル状施設は高殿鉋の掘方下端の壁沿いをめぐる「伏櫓」と呼ばれる施設に相当しよう。類例としては、広島県持丸川西たたら跡の地下構造基底部の施設が挙げられる。ただ、本遺跡の場合、掘方が砂層を掘り込んでつくられているためか、底面には砂が露出したままであったことから、排水目的ではなく何らかの防湿効果を狙ったものと思われる。しかし、石組施設は掘方底面レベルよりさらに低い位置で完結しており、調査範囲内では、上方へ通じていた跡もなく、調査した限りでは湿気を外部へ逃がす構造にはなっていない。内面は特に火を受けた様子もなく、実際にどのように機能したものかは不明である。

検出面で見られた灰白色のベルト状面については、調査時には小舟（状造構）の基底面ないし、小舟を焼いた際の熱を受けた地下部分と考えた。しかし、レベルは掘方の床面まで約10cmで小舟が存在する位置にしてはかなり低いことから、小舟とトンネル状施設の中間に位置する防湿施設の一部である可能性もある。

この造構が所属する時期についてであるが、時期を示す遺物の出土がなく、調査期間の制約のため自然科学的年代測定も実施できなかった。従ってその構造や規模から時期を類推せざるを得ないが、先ほど推定した規模の最小の値を用いた場合、近世のいわゆる高殿鉋と比較すると、小規模

なものといえる。また、掘方最下部の防湿用施設については、江戸時代後期の高殿鉢に多く見られるもので、天秤輪が発明されたとされる1691（元禄4）年頃までは、本床・小舟の地下に石敷きや排水溝はつくられないとする見解もあるが、近年、島根県タカラ山第1遺跡で本床状造構、<sup>(iv)</sup> 小舟状造構を備え、その地下に炉壁列をもつものが見つかっている。時期は14～15世紀とされ、中世から焼土以外の防湿用の構造を持つものがある例として注目される。本遺跡の下流1kmに位置する長老畠遺跡の製鉄炉でも、掘方最下面に溝状施設が発見されている。この製鉄炉は出土陶磁器から17世紀以降のものと考えられている。掘方の規模は短軸が2.5m、長軸は一部破壊されていいるが現存長4mで、その構造から復元すると6m程度ではないかと思われ、本遺跡の時期を考える上で参考になるものである。

これらから、この遺構は高殿鉢初源期以前の製鉄炉と推定され、中世にさかのばる可能性も考えられる。ただ、中世～江戸時代前半期の製鉄炉の調査例は多くなく、地下構造の変遷過程が充分に把握されているとは言えない状況にある。また近世の出雲地方においては、大規模な生産を行う「企業たら」と、自家消費量程度の生産を小規模に行う「自給たら」の2つが併存するという指摘もあり、必ずしも小規模な製鉄炉は時期的に古ないと判断できない。今後の資料の増加と研究の進展を待って、慎重に判断すべきである。

## 註

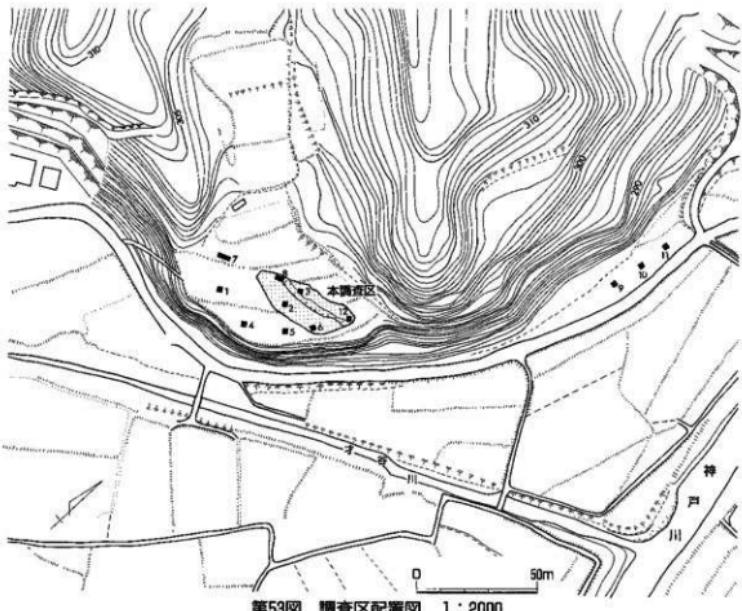
- 1) 動広島県埋蔵文化財調査センター『耳木第1号たら跡・持丸川西たら跡』1995
- 2) 河瀬正利「中国地方における砂鉄製錬法の成立と展開—炉床構造を中心として—」『瀬戸内海地域史研究』第3輯 1991年8月
- 3) 島根県教育委員会「父ヶ平遺跡・中ノ原遺跡・タカラ山第1・第2遺跡」1993年3月
- 4) 寺尾令「長老畠遺跡」「島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報」IV 島根県教育委員会 1996年3月
- 5) 高橋一郎「奥出雲の近世企業たら発達小史—産業考古学的側面から—」『日本の産業遺産・産業考古学的研究』玉川大学出版部 1986年

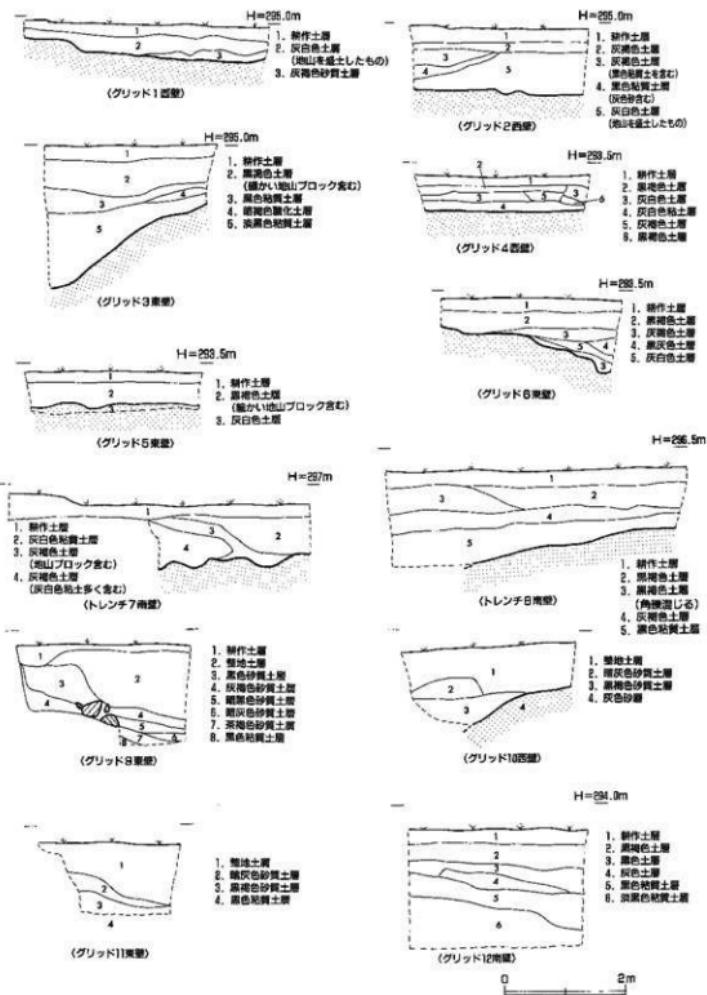
## 第5章 谷川遺跡

### 第1節 調査の概要

谷川遺跡は、島根県飯石郡飯石町大字八神に所在する。遺跡は、神戸川とその支流である才谷川を望む低丘陵上位置し、才谷川を挟んで南側の河岸段丘には弥生時代から奈良時代にかけて大集落が営まれた森遺跡がある。調査地は、『島根県遺跡地図Ⅰ』(島根県教育委員会、1993)によれば谷川城郭群(T66)として周知の遺跡となっていた地点であるが、隣接して谷川遺跡(T158)も存在しており、ここでは確認された遺跡の性格上、谷川遺跡に含めて報告することとした。

調査は、志津見ダム建設工事の一部である才谷川改修工事に先立つものである。遺跡範囲確認調査は、平成7(1995)年8月8日～8月25日にかけて実施し、事業予定地内に計12カ所のグリッドまたはトレンチを設定した。その結果、丘陵上に設けたグリッド3・12及びトレンチ8で、谷状に落ちこむ地形と堆積土である黒色粘質土層及び淡黒色粘質土層で赤土器などの遺物が出土し、遺物包含層であることが確認された。この他の調査区では、遺構は見られず、遺物も整地土層より少量出土した程度であった。





第54図 試掘調査区土層実測図 1:80

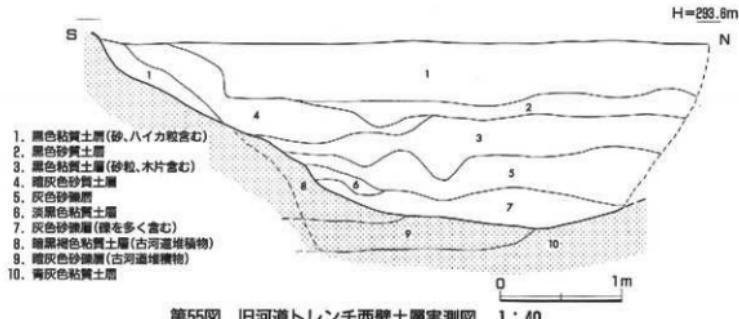
この調査結果を受けて、全面調査は遺物包含層が確認されたグリッド3・12及びトレンチ8付近を中心に約500m<sup>2</sup>を対象とし、平成7(1995)年9月4日～9月21日まで実施した。その結果、小さな谷地形と思われた地点はさらに深く落ち込み、谷を侵食して西から東へ向かって流れていた小河川であることが判明した。また、堆積土中からは、縄文時代後期～晩期・弥生時代後期・古墳時代前期～中期の各時代にわたる遺物が検出された。

## 第2節 旧河道

全面調査地点は、才谷川沿いの水田からの比高は約20mであるが、調査前には水田として利用されていた。この地点は、南東から北西方向に延びる2つの尾根に挟まれた谷地形であり、水田造成のための盛土が行われて、平坦面が形成されたものと見られる。検出された旧河道は、この谷を侵食して西から東へ向かって流れていたもので、調査範囲に制約があるため不明な点が多いが、検出した範囲は東西約2.5m、底面で幅2m、上端で幅6m以上と推定される。

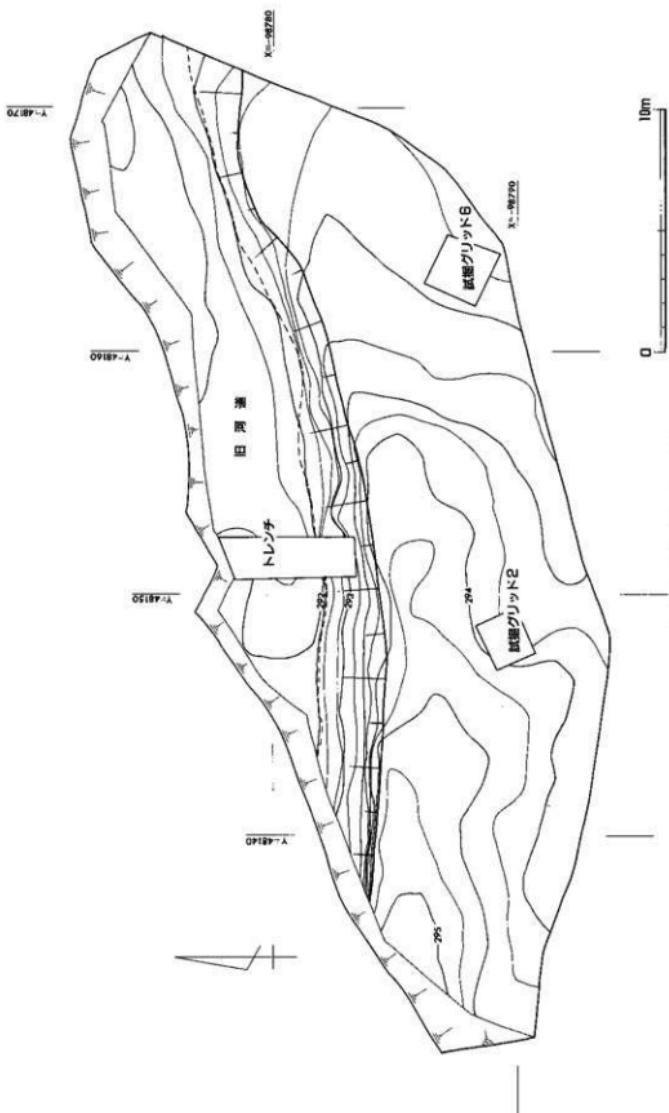
旧河道中の堆積土は上層より、砂粒・ハイカ粒を含む黒色粘質土層(1層)・黒色砂質土層(2層)・暗灰色砂質土層(4層)・砂粒・木片を含む黒色粘質土層(3層)・灰色砂礫層(5層)・礫を多く含む灰色砂礫層(7層)の順となっている。このうち、遺物は3層・5層・7層から、縄文土器・弥生土器・土師器の土器類をはじめ、磨製石斧・金銅製耳環など、様々なものが出土している。これらの遺物の出土位置は、古いものが下層より検出される傾向はあるが、新しい遺物も混じって出土しており、2次堆積の遺物である可能性が高い。

また、この河道の下層では暗黒褐色粘質土層(8層)・暗灰色砂礫層(9層)が確認されているが、これは前述した河道以前の堆積物と考えられ、より古い段階の河道があったことも明らかになった。しかし、先行する河道については、その規模など不明である。



第55図 旧河道トレンチ西壁土層実測図 1:40

第56図 稲城後地形測量図 1:200



### 第3節 出土遺物

遺物は、調査区内に設定した第57図のような10m方眼にしたがって取り上げた。そのほとんどは旧河道中より出土したもので、範囲確認調査の際に検出されたものも含め、遺構に伴うものは一切見られなかった。

#### (1) 繩文土器・石器

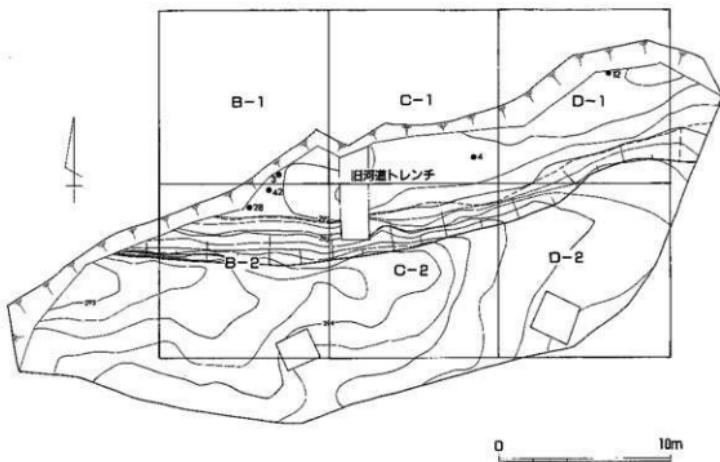
1は、太い沈線で区画された磨消繩文をもつ。2は、1より細い沈線で区画された磨消繩文をもつ。3は、外面に3条以上の太い沈線文をもつもので、内面には条痕文が入るものである。これらは、いずれも小片であるため所属時期を明確にできないが、縄文時代後期前葉から中葉にかけてのものと見られる。

4は、胴部に屈曲部をもち、口縁が外反する深鉢である。胴部下半は、ケズリのちミガキが加えられており、口縁部外面及び内面はミガキが顯著に見られる。また、口縁部には、焼成後、外側から穿孔された孔がみられる。5・6は、外面に突帯を貼り付けた深鉢である。共に突帯は、口縁よりやドがった位置につき、キザミが施されているが、6は口縁端部にもキザミがある。これらの時期は、4が縄文時代晚期前半、5・6が晚期後半に位置づけられる。

7～11は、平底の底部である。8・10は厚手、7・9・11は薄手に作られている。

12・13は、磨製石斧である。12は刃部で、両刃になっており、断面は橢円形である。13は基部で、刃部は欠損しており、断面は円形である。

14・15は、磨石・敲石である。14は、磨面・敲面、15は磨面が認められる。

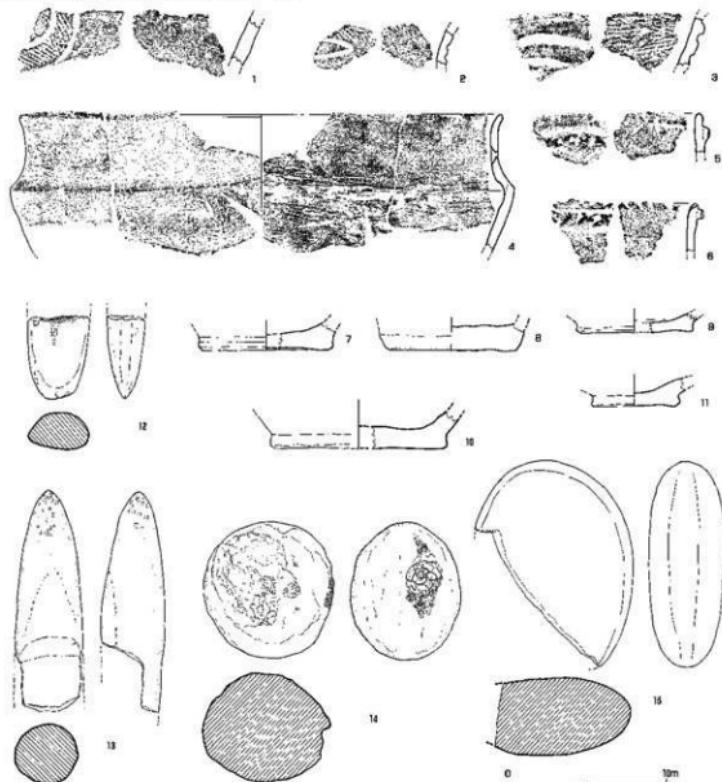


第57図 遺物出土地点位置図

## (2) 弥生土器

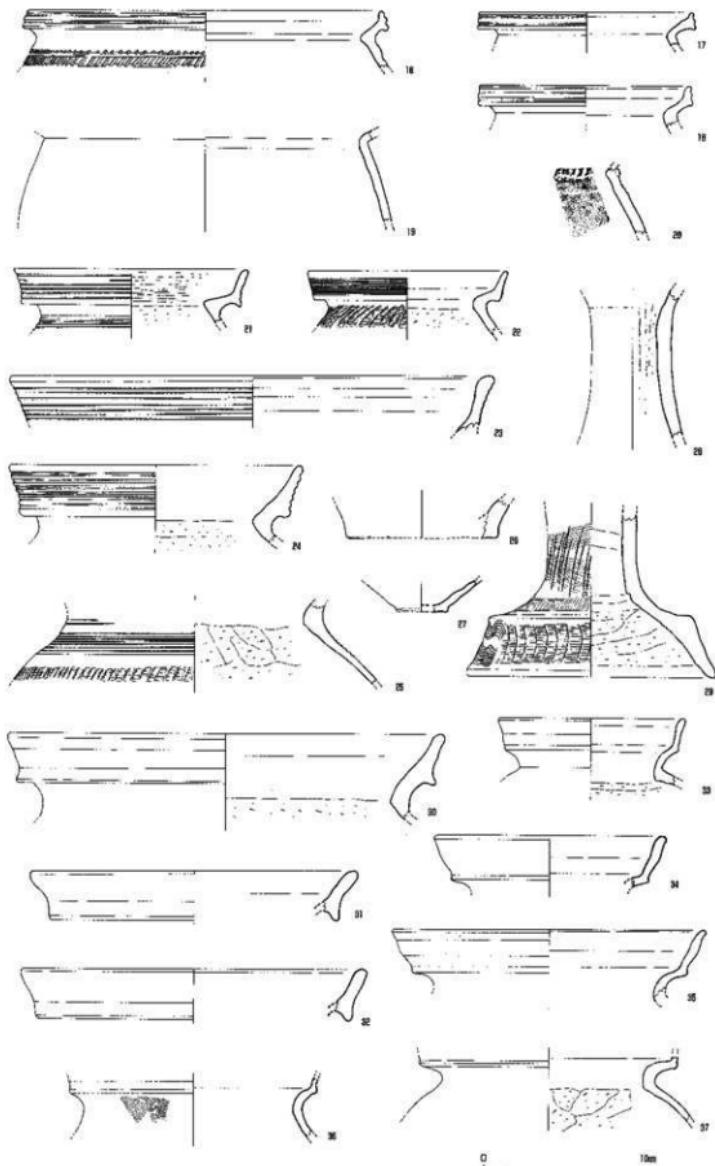
16は壺で、内傾する立上りの短い複合口縁をもつ。口縁外面に2条の凹線文、肩部に斜行刺突文の後、2条以上の沈線が施されている。17・18も壺で、立上りの短い複合口縁をもち、口縁外面に2条の凹線文が入る。19・20は壺の頸部から肩部で、20は頸部に粘土帯があり、その上に斜行刺突文が施されている。28は高環の脚部で、文様は見られない。16～20・28の時期は、弥生時代後期前半に位置づけられる。

23・24は壺で、複合口縁外面に擬凹線文がめぐるものである。24の頸部内部以下にヘラケズリが入る。25は壺の頸部で、外面には斜行刺突文と8条以上の沈線、頸部内面以下にはヘラケズリが施される。26・27は、半底の底部である。27は、外面にミガキ、内面にヘラケズリが施されている。29は鼓形器台である。脚台部外面には貝殻腹縁で擬凹線文と波状文、筒部外面には鋭利な工具によって縱方向に沈線が施されている。



B-1(13), C-1(4・6・7・8), C-2(1・5・9・10・11), 旧河道トレンチ(2)  
D-1(3・12), グリッド11(14), グリッド9(15)

第58図 繩文土器・石器実測図 1:3



B-1 (16-20-23), B-2 (17-19-21-25-26-27-28-36), C-2 (34-37),  
D-2 (22), 旧河道トレンチ(18-33-35), トレンチB (24-29-30-31-32)

第59図 弥生土器・土師器実測図 1:3

21・22は壺で、外傾する複合口縁をもつ。口縁外面には、貝殻腹縁によって描かれた擬凹線文がつけられ、頸部内面以下にはヘラケズリが施される。肩部外面は、21には3条以上の沈線、22は貝殻腹縁により斜行刺突文と擬凹線文が連続してつけられている。30～32は壺で、複合口縁をもつが、口縁外面は無文で横ナデ調整のみである。

21～25・30～32の時期は、弥生時代後期後半に位置づけられるものである。

### (3) 土師器・須恵器

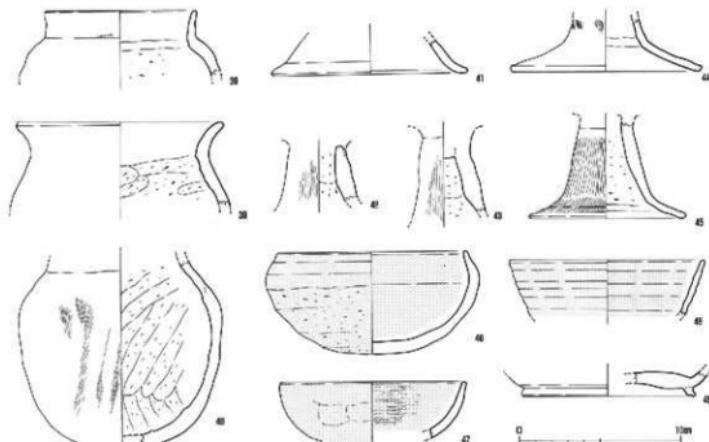
33～37は壺で、外傾する複合口縁をもつが、口縁外面は無文で横ナデ調整のみである。口縁端部や外面の稜線のつくりは鈍い。

38は小形丸底壺と見られ、直立する短い口縁を有し、外面にハケメ、内面にヘラケズリ調整が施される。39は壺で単純な口縁をもち、口縁内外面は横ナデ、頸部内面以下にヘラケズリが施される。40は壺の胴部で、やや張った肩部と丸い底部を有する。外面には粗いハケメ、内面はヘラケズリ調整である。

41～45は、高坏の脚部である。44は、脚端部が大きく開くもので、外面にハケメがみられる。42～45は、器壁がやや厚いもので、43の筒部には粘土が充填されている。調整は、外面がハケメ、内面はヘラケズリである。

33～39・42～45の時期は、古墳時代中期前半に位置づけられるものである。

46・47は、碗である。46は、内傾し丸みを帯びた口縁部を持っており、外面下半にはヘラケズリが施され、赤色顔料が内外面に塗布されている。47は、やや外傾する口縁部を持っており、外面にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキがみられる。これも赤色顔料が内外面に塗布されている。46・47



B-1(43), B-2(38-41-42), C-1(44-45), C-2(40-41-46), D-1(39-47)  
トレンチ7(49), グリッド9(48)

第60図 土師器・須恵器実測図 (アミ目は赤色顔料)

の時期は、古墳時代後期から奈良時代墳までのもの見られる。

48は、土師器坏の口縁部で、内外面に赤色顔料が塗布されている。49は須恵器の底部で低い高台がつく。底部切離しの手法は不明である。48・49の時期は奈良時代である。

#### (4) その他の遺物

50は、緑色凝灰岩製の石製品である。幅は2.5cm・厚さ3mmで、両端を欠損しているが、一方は折れた後、擦った痕跡があり、3方及び表裏両面に擦痕が残る。

51は、金銅製の耳環である。径2.1~2.3cm・厚さ0.5cmで内部は中空になっている。時期は、古墳時代後期のものである。

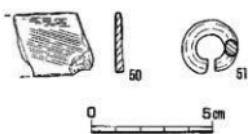
52は、瓦質土器で擂鉢とみられる。内面には摺り口が入り、外面はナデ調整である。

53は、磁器の碗で、内外面に天目釉がかけられている。54は、唐津の碗で、底部に削り出しの高台がつき、外面上部と内面に灰緑色の釉がかけられている。

55は、キセルの雁首である。先端を欠失しているが、長さ4.2cm・幅1.1cmで、銅製である。

写真図版40-56・57は、小片のため図化できなかったものであるが、中国製の青磁である。56は、碗の口縁部で、外面には陰刻された文様の一部が見える。57は、大皿の一部と思われ、内外面に陰刻された文様がある。

これらの時期は、52が平安時代末から鎌倉時代初め、56・57が室町時代後半、53・54が江戸時代初めのものと見られる。



第61図 石製品・耳環実測図 1:2



グリッド2(55), グリッド3(54), トレンチ8(52), グリッド11(53)  
第62図 陶磁器他実測図 1:3

#### 第4節 小 結

以上述べてきたように、今回の調査地点は、谷を流れる小さな川に廃棄された遺物が2次的に堆積したところであることが明らかになった。旧河道より出土した遺物は、縄文時代後期前葉～中葉・晚期、弥生時代後期、古墳時代中期前半・後期の各時代にわたっており、これらの出土状況よりすれば、調査地点より上流部の丘陵上や斜面に、これらの時代に集落が形成されていたことが窺える。

また、1点ではあるが金銅製耳環が出土していることは、付近に横穴墓など古墳時代後期の墳墓が存在している可能性も考えられる。

さらに、試掘調査の際に整地土層中から出土したものが多いため、奈良時代、平安時代末から鎌倉時代初め、室町時代後半、江戸時代初めの遺物も検出されており、調査地点周辺に連続と集落などが営まれていたことも窺える。

今回の調査は、調査範囲の制約上極めて限定されたものではあったが、谷川遺跡をめぐる往時の景観や、周辺集落の存続時期などを考える上で一定の成果をおさめることができたといえよう。

第1表 繩文土器観察表

測定番号	出土地点	器種	部位	長さ(cm)	文様・調査の特徴	胎 土	焼成	色調
58-1	C - 2	深鉢	肩		(外)太い沈線で区画された磨削縦文	3mm大の砂粒を多く含む	良好	灰黄色
58-2	酒呑-レンチ	深鉢	肩		(外)太い沈線で区画された磨削縦文	2~3mm大の砂粒を多く含む	普通	灰褐色
58-3	D - 1	深鉢	肩		(外)太い沈線(内)横方向の条痕文	3mmまでの長石、石英を含む	普通	灰褐色 (灰褐色 灰黑色)
58-4	C - 1	深鉢	口縁	(36.0)	(外)口縁の上部は東方向のミガキ、口沿の下部は後方 方向のケリの後ミガキ(内)東方向のミガキ	2mm大の砂粒多く含む	普通	灰系褐色
58-5	C - 2	深鉢	口縁		(外)キザミのある貼付突帯	3mm大の砂粒含む	普通	灰褐色
58-6	C - 1	深鉢	口縁		(外)キザミのある貼付突帯、口縁端部にもキザミ	4mm大までの石英含む	良好	淡黒色
58-7	C - 1		底部	(8.2)	平底	3~4mm大の石英多く含む	普通	灰褐色
58-8	C - 1		底部	(8.1)	平底	1cm以上の大石英多く含む	不良	暗系褐色
58-9	C - 2		底部	(7.3)	平底	2~3mm大の石英、長石を含む	普通	灰褐色 (灰褐色 灰褐色)
58-10	C - 2		底部	(11.0)	平底	5mm大までの砂粒を含む	普通	灰褐色 (灰褐色 灰褐色)
58-11	C - 2		底部	(5.5)	平底	4mm大までの石英、長石含む	普通	灰褐色

第2表 石器観察表

測定番号	出土地点	種類	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
58-12	D-1	磨製石斧	刃部			3.8	60.45
58-13	B-1	磨製石斧	基部			3.7	270.0
58-14	グリッジ1	磨石		8.4	8.2	6.8	590.0
58-15	グリッジ8	磨石	3分の1欠損	13.3	9.6	4.7	770.0

第3表 弥生土器観察表

測定番号	出土地点	器種	部位	長さ(cm)	文様・調査の特徴	胎 土	焼成	色調
59-16	B - 1	甌	口縁	(21.8)	(外)斜面に2条の凹縫文、背部に斜削り状の刃先の底面	石英、雲母を多く含む	普通	灰褐色
59-17	B - 2	甌	口縁	(13.1)	口縁外面に2条の凹縫文	1~2mm大の砂粒を含む	普通	淡黒褐色
59-18	酒呑-レンチ	甌	口縁	(12.8)	口縁外面に2条の凹縫文	2~3mm大の石英を含む	良好	灰褐色
59-19	B - 2	甌	肩部		(外)調査不明(内)ナデ	1~3mm大の砂粒を多く含む	良好	灰褐色
59-20	B - 1	甌	肩部		(外)土留め付の後、斜削り刃先内へラケツリ付ナデ	2mm大の砂粒を含む	良好	淡黒褐色
59-21	B - 2	甌	口縁	(14.3)	(外)刃先に長削れの底壁及び、底部に3角以上の底面 (内)口縁はミガキ、底盤に下にヘラケツリ	3mm以下の砂粒を含む	良好	灰褐色
59-22	D - 2	甌	口縁	(12.2)	(外)口縁に貝殻模様による擬似縞文 (内)口縁はナデ。腹部以下にヘラケツリ	5mm大の石英を含む	良好	灰褐色
59-23	B - 1	甌	口縁	(30.0)	(外)口縁に貝殻模様(内)横方向のナデ	4mm大までの砂粒含む	普通	灰褐色
59-24	トレンチ8	甌	口縁	(17.9)	(外)口縁に貝殻模様(内)底部以下にヘラケツリ	2~3mm大の砂粒を含む	良好	淡黒褐色
59-25	B - 2	甌	肩部		(外)底部に2条の沈紋、肩部に斜削りによる剥離文 (内)剥離以下にヘラケツリ	2mm大までの砂粒含む	良好	灰褐色
59-26	B - 2		底部	(9.2)	(外)ナデ	2~3mm大の長石を多量に含む	良好	淡黒褐色
59-27	B - 2		底部	(3.0)	(外)ヘラミガキ(内)ヘラケツリ	2mm大の石英、長石を含む	良好	灰褐色
59-28	B - 2	高杯	筒部		(外)調整不明(内)しおり目	2mm大の砂粒を含む	良好	灰褐色
59-29	トレンチ8	脚台	脚部	(15.3)	(外)筒部は其底面による擬似縞文3分の1は底板文 筒部2端方に沈紋(内)脚部にヘラケツリ	6mm大の砂粒を含む	普通	淡黒褐色
59-30	トレンチ8	甌	口縁	(26.6)	(外)横ナデ(内)脚部以下はヘラケツリ	5mm大までの砂粒含む	良好	灰褐色
59-31	トレンチ8	甌	口縁	(20.2)	(外)横ナデ(内)口縁ヘラミガキ後ナデ	2mm大の雲母、長石を含む	良好	灰白色
59-32	トレンチ8	甌	口縁	(21.4)	(外)横ナデ(内)口縁ヘラケツリ後ナデ	3mm大の砂粒、石英、長石を含む	良好	淡黒褐色

第4表 土師器・須恵器観察表

査定番号	出土地點	器種	部位	並重(m)	文様・構造の特徴	胎土	焼成	色調
59-33	トレンチ7	甕	口縁	(11.6)	(外)口縁に横ナデ、腹部はハケメ(内)腹部以下にナズリ	密	良好	灰褐色
59-34	C-2	甕	口縁	(14.4)	内外面とも横ナデ	1~2mm大の長石を多量に含む	良好	灰褐色
59-35	トレンチ7	甕	口縁	(9.4)	(外)内面とも横ナデ	3mm大までの砂粒含む	良好	暗灰褐色
59-36	B-2	甕	腹部		(外)腹部にハケメ(内)ケズリの後ナデ	1mm以下の細かな粒が多く含む	良好	暗茶褐色
59-37	C-2	甕	頭部		(外)横ナデ (内)頭部以下にヘラケズリ	2mm~5mm大の砂粒含む	良好	明茶褐色
60-38	B-2	納豆瓶	口縁	(9.5)	(外)ハケメの後ナデ(内)腹部以下にヘラケズリ	4mm大の砂粒含む	普通	明灰褐色
60-39	D-1	甕	口縁	(12.5)	(外)横ナデ (内)頭部以下にヘラケズリ	2mm大の長石、石英を密に含む	良好	暗褐色
60-40	C-2	甕	脇部		(外)荀頭压痕、粗いハケメ (内)ヘラケズリ	3mm大までの砂を多く含む	良好	灰褐色
60-41	B-2	高杯	脚部	(12.0)	(外)横ナデ	雲母、長石、石英を多く含む	良好	灰白色
60-42	B-2	高杯	脚部		(外)縱方向のハケメ後、ナデ(内)ヘラケズリ	2~3mm大の長石を含む	良好	暗灰褐色
60-43	B-1	高杯	脚部		(外)縱方向のハケメ (内)ヘラケズリ	2~3mm大の石英を多く含む	良好	淡褐色
60-44	C-1	高杯	脚部	(11.5)	(外)ハケメ後、ナデ(内)ヘラケズリ後、ナデ	石英、長石を多量に含む	良好	淡白色
60-45	C-1	高杯	脚部	9.5	(外)重ねたハケメ、横ナデ (内)横方向のハケメ	3mm大の砂粒含む	良好	淡褐色
60-46	C-2	杯		(11.5)	(外)横方向のハケズリ (内)横ナデ 内外面に赤褐色の頸料塗布	3mm大の砂を密に含む	普通	淡褐色
60-47	D-1	杯	口縁	(11.3)	(外)静止ケズリ(内)ナデ 内外面に赤色頸料	緻密	良好	明褐色
60-48	グリッド9	杯	口縁	(11.9)	内外面とも横ナデ、内面に基 内外面に赤色頸料	緻密	良好	淡褐色
60-49	トレンチ7	麿鉢	底部	(10.6)	内外面とも回転ナデ	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色

第5表 陶磁器他観察表

査定番号	出土地點	器種	部位	並重(m)	文様・構造の特徴	胎土	焼成	色調
62-52	トレンチ8	瓦質 擂鉢	体部		(外)ナダ(内)横方向の押り目	僅かだが4mm大の砂粒含む	良好	(外)淡白色 (内)淡褐色
62-53	グリッド11	碗	口縁	(11.7)	内外面に天目釉	密	良好	黒褐色
62-54	グリッド3	碗	底部	4.9	削り出し高台、外面上部と内面に赤緑色釉	1mm大の砂粒含む	良好	淡褐色

図 版  
(檀 原 遺 跡)



図版1（檀原遺跡）



檀原遺跡全景（発掘調査前）



檀原遺跡全景（1993年度調査）

図版2 (植原遺跡)



植原遺跡全景 (1994年度調査)



III区 V区 全景

図版3 (檀原遺跡)

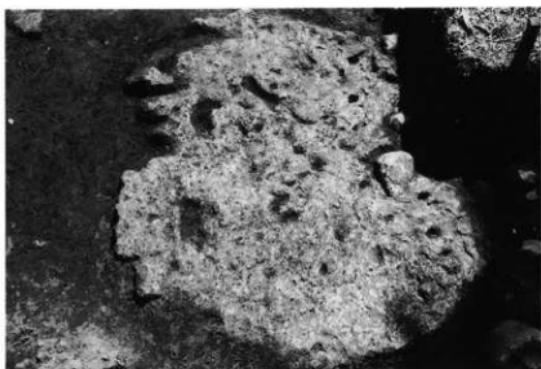


IV区 全景



I区 1号炉 (粘土面) 檢出状況 (1994年度)

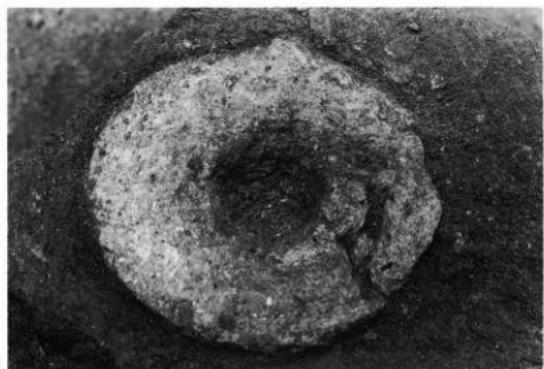
図版4 (檜原遺跡)



図版5 (檀原遺跡)



SX-02 梢出状況



SX-02 全景



・02断面

図版6 (植原遺跡)



1号炉 本床・跡坪・小舟 (1994年度)



1号炉 本床

図版7 (檀原遺跡)



1号炉 本床端部の面取り  
及び壁体補修状況



北東側跡坪トンネル状構造



南西側跡坪トンネル状構造

図版8 (植原遺跡)



北西・南西 跡坪



北東・南東 跡坪

図版9 (檀原遺跡)



1号炉 小舟天井部除去後



小舟間トンネル状構造  
内部 (流入鉄鉄検出)



同上

図版10（檀原遺跡）



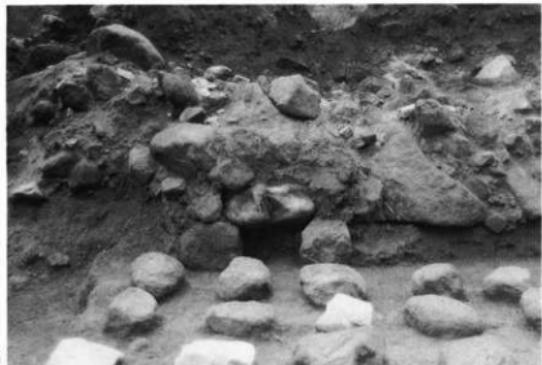
1号炉 配石面（上）



1号炉 配石面（下）



石組施設（北東）



石組施設（南東）



石組施設（北西）

図版12 (植原遺跡)



石組施設（南西）

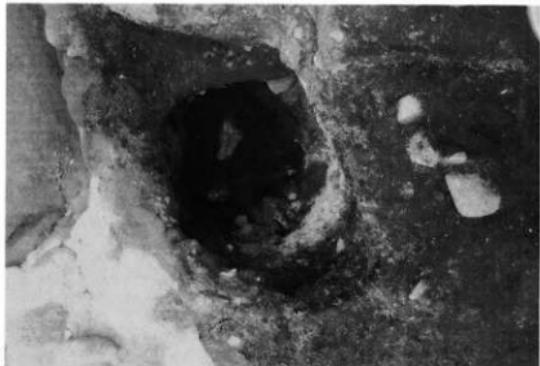


押立柱（北東）

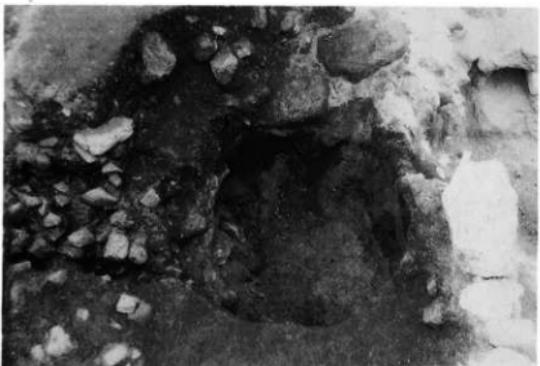


押立柱（北西）

図版13 (植原遺跡)



押立柱（北西）完掘



押立柱（南東）完掘



押立柱（南西）完掘

図版14 (檜原遺跡)



1号炉 最下層 敷石



1号炉 掘方

図版15 (檀原遺跡)



1号炉 据方



1号炉 横断面

図版16 (檜原遺跡)



II区 表土除去後



II区 鋳治炉

図版17 (檀原遺跡)



図版18 (禮原遺跡)



SX-02



SX-03

図版19 (植原遺跡)



SD-01



III区 SX-01 挿出状況

図版20 (櫛原遺跡)



III区 SX-01 完掘状況



IV区 遺構完掘状況

図版21 (檜原遺跡)



IV区 SX-01



IV区 調査後全景

図版22 (植原遺跡)



V区 調査後全景



V区 1号炉・2号炉検出状況(手前が1号炉)



1号炉・2号炉周辺



1号炉

図版24 (檍原遺跡)



1号炉 炉内



1号炉 炉内生成物除去後



1号炉内 横断面

図版25 (檀原遺跡)



1号炉 送風孔



1号炉 送風孔



1号炉 送風施設跡

図版26 (檀原遺跡)



送風施設の推定復元  
(板屋III遺跡出土羽口使用)



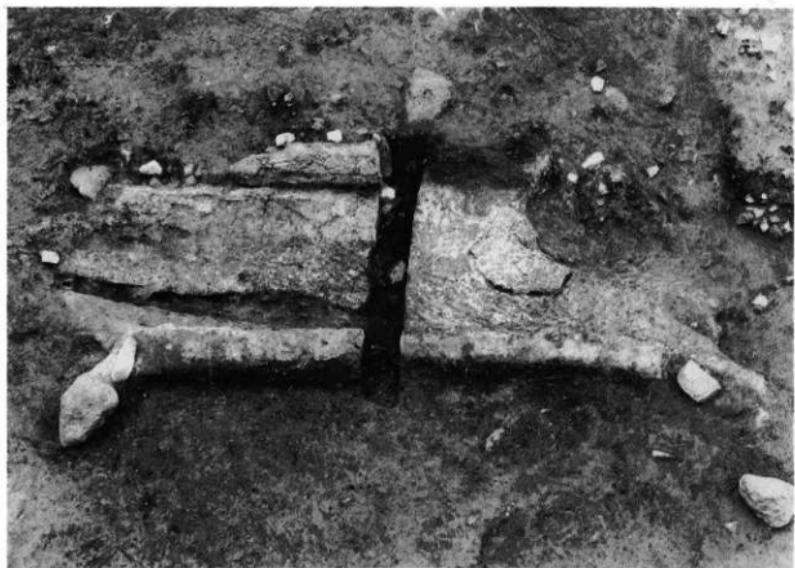
1号炉 横断面土層



1号炉 完掘



1号炉・2号炉・SX-01

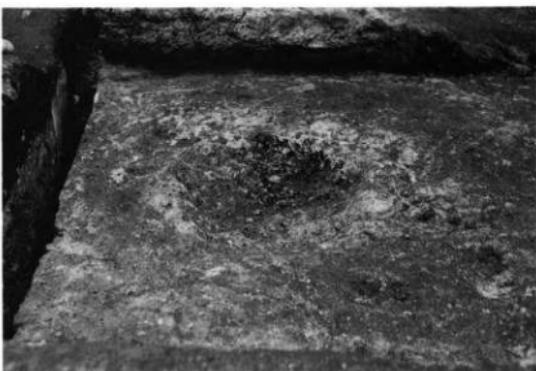


2号炉

図版28 (檀原遺跡)



2号炉 横断面



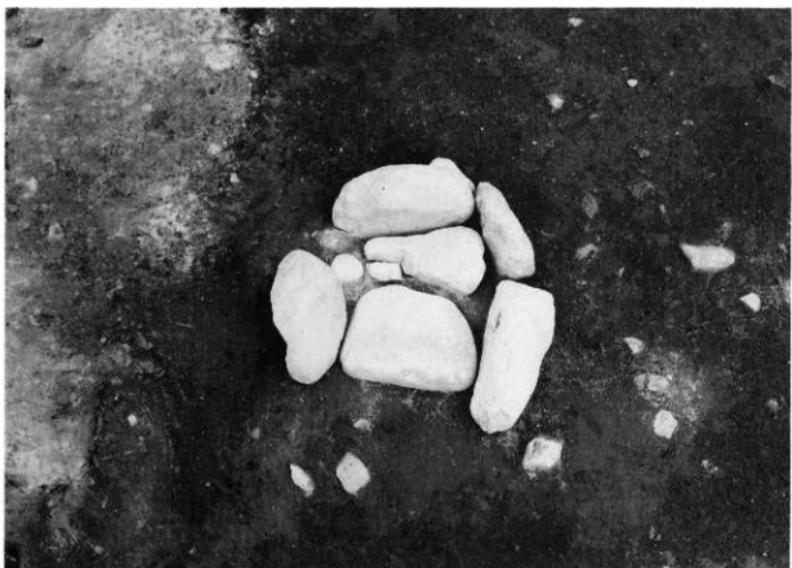
皿状おちこみ（西側）



皿状おちこみ（東側）

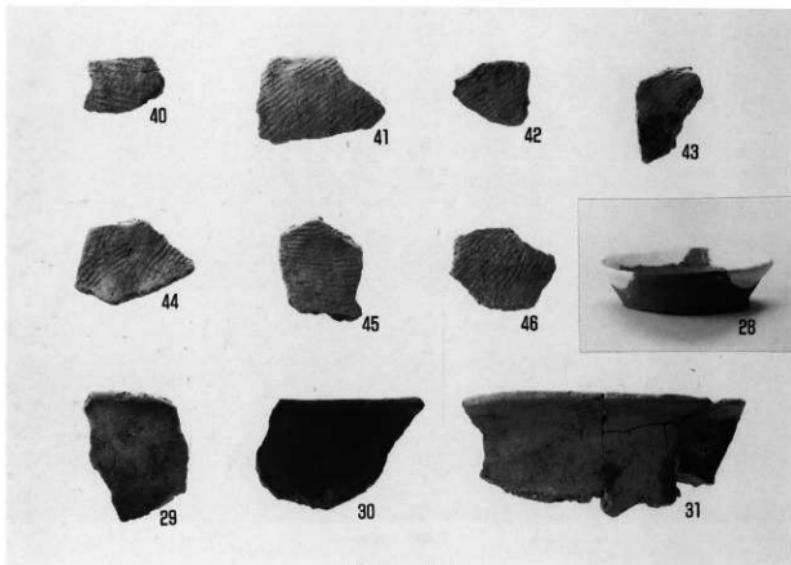


2号炉 挖方

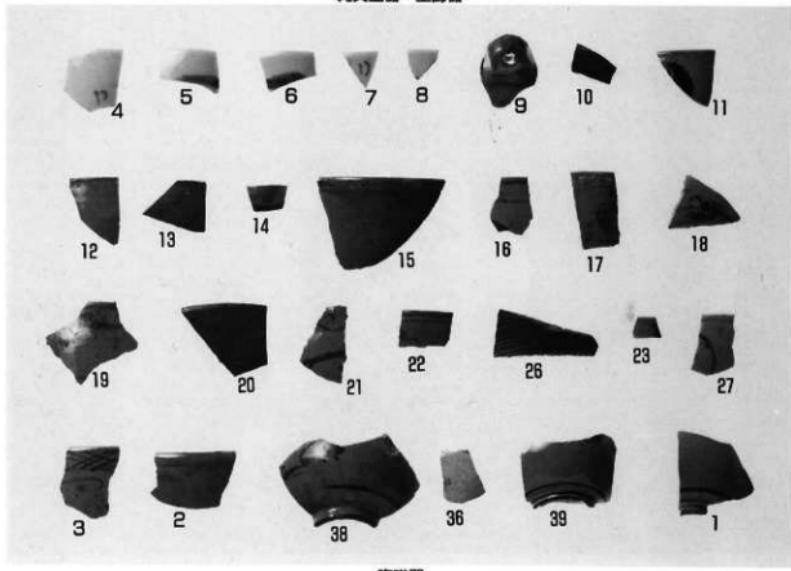


SX-01

図版30 (檀原遺跡)



縄文土器・土師器



陶磁器